

博士学位申請論文

中国語母語話者による

第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

西坂祥平

2019 年 9 月

目次

第1章 序論	1
1.1 本研究の背景と問題の所在	1
1.2 本研究の目的	7
1.3 本論文の構成	8
第2章 先行研究	11
2.1 第二言語習得における母語の影響	11
2.2 日本語におけるテンス・アスペクト	14
2.2.1 日本語におけるテンス・アスペクト形式	14
2.2.2 「ている」の用法	23
2.3 日本語と中国語のテンス・アスペクトの対照	26
2.3.1 中国語におけるテンス・アスペクト形式	26
2.3.1.1 動詞接尾辞“了 ₁ ”、“着”	29
2.3.1.2 動詞接尾辞“过”	34
2.3.1.3 語気助詞“了 ₂ ”、“呢”	35
2.3.2 日本語と中国語におけるテンス・アスペクト形式の相違点	37
2.4 第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得研究	39
2.4.1 語彙アスペクトの観点からの研究	39
2.4.1.1 アスペクト仮説について	40
2.4.1.2 日本語を対象としたアスペクト仮説の検証	41
2.4.2 文法アスペクトの観点からの研究	44
2.4.2.1 「動作の持続」と「結果の状態」用法の習得	44
2.4.2.2 「ている」のその他の用法の習得	48
2.4.2.3 「ている」と「ていた」の習得難易度に関する研究	52
2.4.3 「ている」と「ある／いる」との類義関係に注目した研究	55
2.5 研究課題	56
2.5.1 先行研究に残された課題	56

2.5.2 本研究の課題	57
第3章 「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け	
—調査紙の作成と妥当性の検討—	59
3.1 Reichenbach の SRE 理論	59
3.2 崔 (2009、2011、2012)	65
3.3 稲垣 (2015)	67
3.4 研究課題	73
3.5 調査紙の作成	74
3.6 予備調査の実施	78
3.7 結果と考察	79
3.7.1 「る」および「た」の習得難易度	85
3.7.2 時点別の「動作の持続」「結果の状態」の習得状況	87
3.7.3 動詞のタイプ別の「結果の状態」の習得状況	89
3.8 予備調査のまとめと調査紙の改善点	94
第4章 「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け	
—習熟度の異なる学習者の習得状況—	97
4.1 研究課題	97
4.2 調査方法	98
4.2.1 調査対象者	98
4.2.2 調査対象者のレベル分け	99
4.2.3 調査資料および手続き	102
4.3 結果と考察	104
4.3.1 習熟度別に見た「る」および「た」の習得	109
4.3.2 習熟度別の「ている」「ていた」の習得	111
4.3.3 学習者の母語の動詞タイプから見た「結果の状態」の習得	118
4.4 第4章のまとめ	125

第5章 「ている」「た」「ある／いる」の使い分け	
ー調査紙作成と日本語・中国語の母語話者データの収集ー	128
5.1 先行研究と研究課題	128
5.2 調査方法	132
5.2.1 調査に用いた問題	132
5.2.2 調査対象者および調査項目	134
5.3 結果	137
5.3.1 タイプ a (「移動動詞＋ている」の場面)	138
5.3.2 タイプ b (「状態変化動詞＋ている」の場面)	140
5.4 考察	143
5.5 第5章のまとめ	144
 第6章 「ている」「た」「ある／いる」の使い分け	
ー母語話者データと学習者データの比較ー	146
6.1 陳 (2009) の結果および問題点	146
6.2 研究課題	148
6.3 調査方法	149
6.4 結果	151
6.4.1 タイプ A の場合 (日本語母語話者が 「移動動詞＋ている」を使用する場面)	151
6.4.2 タイプ B の場合 (日本語母語話者が 「状態変化動詞＋ている」(存在型)を使用する場面)	156
6.4.3 タイプ C の場合 (日本語母語話者が 「状態変化動詞＋ている」(非存在型)を使用する場面)	158
6.5 考察	161
6.6 第6章のまとめ	162
 第7章 結論	164
7.1 本研究のまとめ	164
7.2 本研究の意義	166

7.3 今後の展望	167
参考文献	169
付録資料	178
付録資料①	178
付録資料②	190
付録資料③	203
付録資料④	215
付録資料⑤	227
付録資料⑥	238

第 1 章

序論

1.1 本研究の背景と問題の所在

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者による第二言語としての日本語のテンス・アスペクト形式の習得過程を明らかにし、習得上の問題点やその要因を探ることにある。特に日本語でアスペクトを表す基本的な形式とされる「ている」を中心に、形式的にも意味的にも類似していることから日本語学習者にとって使い分けが困難であるとされる言語形式「る」「た」「ている」「ていた」「ある／いる」の使い分けについて調査する。外国人に対する日本語を教える場合に、これらの表現はいずれも初級段階で教授される。しかし、形式的あるいは意味的に類似した項目があり、適切な形式を選択することが難しく、日本語学習者にとって習得しにくい項目であると言われる。

まず、これらの諸形式の使い分けを習得することがなぜ重要なのかについてその理由を述べる。最も大きな理由として挙げられるのが、これらの形式を適切に使い分けることは、日本語を用いたコミュニケーションの際に重要になるからという点である。例えば、以下のような場合に問題になることがある。

(コップを手に取り、表面にできているヒビに気づいて)

- (1) あれ、コップが割れている。
- (2) ?あれ、コップが割れた。

この例は、日本語学習者のアスペクト習得の研究において用いられる誤用の一つである。おそらく多くの日本語母語話者が、同じ場面を見せられて何と言うかと問われれば、(1)の「割れている」と答えるだろう。(2)の「割れた」であれば、コップにヒビが入る瞬間を目にしたことになるため、手を取る前からコップにヒビが入っていたことを述べる際には適切な言語形式の選択とは言えない。もう一つ、例を挙げる。

(学校で先生に会って)

- (3) 先生、教室のパソコンが壊れました。

(4) 先生、教室のパソコンが壊れていました。

(3) の場合、教師は学生による何らかの行動によってパソコンが壊れた、つまり壊れた原因は学生にあると考えることが予想される。そのため、「何をしたんですか」「落としたりしたんですか」などといった言葉をかけるかもしれない。一方、(4) の場合、教師はどのように学生の言葉を解釈するであろうか。学生が教室に入った時点で、既にパソコンは壊れていて、壊れた原因が学生にあるとは考えないだろう。教師から学生にかけられる言葉としても、「誰が壊したんでしょうね」「担当のスタッフに直してもらいましょう」といった言葉が出てくるかもしれない。さらにもう一つ、本研究で扱う言語形式の使い分けで、実際のコミュニケーションの場面で誤解を生むことが予想されるものを見てみる。

(道を歩いていて、前方に何かを見つけて)

(5) あ、財布が落ちているよ。

(6) ?あ、財布が落ちたよ。

(7) ?あ、財布があるよ。

日本語母語話者であれば、同じ場面で (6) あるいは (7) を耳にすれば若干の違和感を覚えるのではないだろうか。(6) の「財布が落ちたよ」では、財布が落ちたその瞬間を目撃していれば違和感が和らぐだろう。また、(7) の「財布があるよ」は、道に何があるのか、その存在の有無のみが問題になる。誰かが財布を落として、その結果そこにあるという意味合いは含まれず、やはり (5) で感じるほどの自然さはない。

本研究では、上記のような場面における中国語母語話者の日本語習得を対象としている。こうした問題は、テンス・アスペクトの問題として知られている(テンス・アスペクトについては第2章で詳述する)。テンスとは学校英語などで学ぶ時制のことで、動作や出来事、あるいは何らかの状態が現在・過去・未来のいずれに起こったものかを表す文法的な手段である。日本語では、動詞のル形が非過去(状態を表す動詞であれば現在を、動作を表す動詞であれば未来)を指し示す(例. 太郎がご飯を食べる)、タ形が過去を指し示す(例. 太郎がご飯を食べた)。英語であれば過去形に“I played tennis.”のように動詞に-ed を付して出来事が過去に起こったことを表す。アスペクトとは、出

来事を時間の流れの中でどのように捉えたのかを表す文法的な手段である。出来事をひとまとまりのものと見るか、時間の流れに合わせて展開される出来事の一部に注目するかなどに関わるものである。例えば、「太郎がご飯を食べた。」では、太郎がご飯を食べ始めてから食べ終わるまでの出来事をひとまとまりとして述べており、さらにそれが過去の出来事であることを表している。一方、「太郎がご飯を食べている。」では、太郎が今まさに食べている最中であり、食べるという動作が進行・継続していることを述べている。こうした時間に関する表現は、多くの日本語学習者にとって習得が困難な文法項目として知られている。

ここで、なぜ中国語を母語とする日本語学習者を本研究の対象とするかについて述べる。まず一つ目に挙げたいのは筆者の教育経験から来るものである。筆者はこれまでに中国語を母語とする日本語学習者への日本語教授を日本国内および中国で行ってきた。その中で、上に挙げたような誤用に度々出会い、なぜ多くの学習者が同じような場面で同じような誤用をするのかを知りたいと考えた。

次に挙げられるのは、自らの中国語の学習経験から来るものである。筆者自身が外国語として、第二言語として中国語を学ぶ過程で、時間を表す表現、つまりテンス・アスペクトについて日本語と中国語の差異に関心を持った。詳細は第2章以降で述べるが、ここで日本語と中国語のテンス・アスペクトの差異について簡単に触れておく。まず、中国語と日本語で大きく異なる点として、中国語にテンスがないとされることが挙げられる。日本語では、動詞のル形が非過去を表し（例. 太郎がご飯を食べる。）、動詞のタ形が過去を表す（例. 太郎がご飯を食べた。）ことを上で述べた。このように、日本語では、動詞の形を変化させて、つまり非過去（ル形）と過去（タ形）を形式的な対立によって表し分ける。一方、中国語では、時間の前後関係を表すために、日本語のような形式的な対立を用いない。

(8) 他 去年 在 北京 工作。

彼 去年 で 北京 働く

(彼は去年北京で働いた。)

(9) 他 現在 在 北京 工作。

彼 いま で 北京 働く

(彼はいま北京で働いている。)

(10) 他 明年 到 北京 工作。

彼 来年 で 北京 働く

(彼は来年北京で働く。)

(8) から (10) のように、時間を表す副詞“去年”(去年)、“現在”(現在、いま)、“明年”(来年)以外、述語形式はすべて“工作”(働く)であり、述語によって現在・過去・未来を表すことはない(井上・生越・木村 2002)。

次にアスペクトについて述べる。中国語でアスペクトを表す言語形式はいくつかあるとされるが、代表的なものに“了”と“着”が挙げられる。これらは“了”が「完了」を表し、日本語の「た」に対応する場合が多いとされる。また、“着”が「持続」を表し、こちらは日本語の「ている」に対応するとされる。しかし、“了”は日本語で「結果の状態」を表す「ている」を用いるような場面においても使用されることがある。つまり、(11) (12) のように、中国語でアスペクトを表す“了”は、日本語で「た」「ている」を表す両方の場面で使用されることがあるということである。

(11) 財布が落ちた。(掉了钱包。)

(12) 財布が落ちている。(掉了钱包。)

こうした違いが、学習上影響があるのか、あるとすればどのような影響が、どの程度あるのかを明らかにしたいと考えた。

日本語と中国語の言語間の差異に着目して、中国語を母語とする日本語学習者の「ている」を中心とした上記の言語形式の使い分けの状況を明らかにし、そこにある困難さの原因を探ることには、どのような意義があるだろうか。最も期待されるのは、中国語を母語とする日本語学習者のための日本語教育現場に対する貢献であると考えられる。上述したように、本研究は筆者の中国語を母語とする日本語学習者への教育現場から出発している。中国語を母語とする日本語学習者による日本語のテンス・アスペクト習得に見られる困難点やその要因を明らかにできれば、その困難点を克服するためにどのように教えたらいかなど、効果的な教育方法を考える際の重要な手掛かりになるはずである。日本語の習得を考えた場合に、ある項目についての習得の困難さについては2つのタイプがあると考えられる。一つ目は、学習者の母語に関わらず日本語学習者に共通

してみられる困難点と、二つ目は、ある言語を母語とする日本語学習者に特有の困難点である。二つ目の点については学習者の母語と習得される日本語との言語的な差異による要因が大きいと考えられるが、教育の場においてもその点を考慮した指導が求められる。母語別の日本語教育の必要性はこれまでも指摘されている（西口 1995；張 2001；井上 2002）。本研究は、こうした母語別の日本語教育を考える際の基礎的な資料としても意義があると言える。

第二言語としての日本語の習得研究は、1990 年代に入ってから本格的に行われるようになった。日本語学習者にとって、どのようなものが習得が難しいのか、それはなぜ習得が困難なのか、そして、どうすれば習得を促せるのか。日本語教育に携わる多くの者が抱く疑問であろう。テンス・アスペクトについては、こうした疑問に対する答えを得ようと、これまでに多くの研究が行われてきた。アスペクトに関しては、多方面から習得に関わる要因を明らかにしようとする研究がなされてきた。例えば、語彙アスペクトと呼ばれる、動詞に内在する意味のタイプによって習得の難易度が異なるかという問題がある。「落ちる」「割れる」など瞬間的なことを表す動詞（瞬間動詞や到達動詞と呼ばれる）や、「食べる」や「走る」など動作に時間的な幅のある動詞（継続動詞や活動動詞と呼ばれる）など、動詞の特性によって習得の難易度が異なるのかという問題である。また、テイル形には「動作の持続」と「結果の状態」のほかにも、「習慣」用法（例、太郎は最近、毎朝ジョギングしている。）や「経験」用法（例、太郎は高校生の時に一度富士山に登っている。）など様々な用法があるとされる。どの用法が学習者にとって易しいのか、あるいは難しいのかを明らかにしようとする習得順序の研究も行われてきた。また、学習者の母語の特徴が習得に与える影響や、難しいとされる用法から教室で指導した場合の教授効果なども議論されてきた。しかし、議論がしつくされているわけではない。

日本語学習者に見られる誤りを観察すると、「正用」と「誤用」とが、学習者にとって使い分けの難しい類似したものである場合がある。上で挙げたいくつかの例も、学習者にとっては「類似したもの」であると考えられる。類似した A と A' という二つの形式があるとする。A の習得を考える場合、学習者は二つのことを習得しなければならない。一つは、A を使うべき義務的文脈で、A を正しく選択することである。もう一つは、類似した A' を選択すべき文脈で A を選択しないということである。A を選択すべきでないときに A を選択してしまえば、それは A のルールを過剰に使用するという「過剰

般化」が起こってしまっている。本研究で中心的に扱う「ている」の習得についても、「ている」を選択すべき時に「た」を選択してしまう誤用などが先行研究によって報告されている。しかし、「ている」を選択すべきではないときに「ている」を選択してしまっていないかという点についてはほとんど扱われていない。本研究ではこうした点についても調査を行う。

もう一点、中国語を母語とする日本語学習者のテンス・アスペクト習得の問題については、学習者の誤用の原因が母語の影響にあると主張する論考が少なくない。「た」「ている」「ある／いる」の習得も例外ではない。

(机の下に財布を見つけて)

(13) 財布が落ちている。

(14) ?財布が落ちた。

(15) ?財布がある。

これは中国語を母語とする日本語学習者に見られる誤用例として知られる(陳,2009; 庵,2010)。この誤用の原因は、学習者の母語である中国語の影響であるというのである。改めて以下の例を見てみる。

(机の下に財布を見つけて)

(13') 財布が落ちている。(*掉钱包。)

(14') ?財布が落ちた。(掉了钱包。)

(15') ?財布がある。(有钱包。)

このように「ている」を選択すべきときに、日本語の「ている」に相当するとされる“着”が中国語では使用できず(第2章で詳述する)、同じような場面であれば「財布がある」に相当する表現(“有钱包”)を使用する、そのため、中国語を母語とする日本語学習者はこうした場面で「ている」の代わりに「ある／いる」といった存在の表現を選択するという主張である。しかし、母語の影響と結論付けるにはまだ十分な検証がなされていない。母語の影響と判断するためにはいくつかの方法があると考えられるが、その一つには母語で本当にそのように言うのか、母語話者個人あるいは集団の使用状況も同時

に調べる必要がある。なぜなら、母語話者であっても同じ場面で表現の選択に揺れが生じる場合も往々にしてあるからである。つまり、母語の影響であるかどうかを判断するためのベースラインを設定する必要がある。これまでの研究ではこうした点において議論の余地が残されていると言える。

1.2 本研究の目的

本研究では、「ている」を中心に、学習者にとって使い分けが困難であるとされる形式の習得過程を探り、母語の影響という観点からその困難さの要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、上でも取り上げた、二つの使い分けについて調査を行う。

まず一つ目に取り上げるのは、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けである。日本語のテンス・アスペクト体系は、現在、工藤（1995）による＜基本的アスペクト・テンス体系＞が共通の認識となっているとあって差し支えないだろう。その中では、「る（ている）」と「た（ていた）」は、非過去と過去というテンスの対立を表し、「る（た）」と「ている（ていた）」は完結相か継続相かというアスペクトの対立を表す。さらに、テンスの対立、つまり形の上での対立ではないが、意味の面から見れば、「非過去」は、指し示す時点によって「現在」と「未来」を表すことができる。以下にそれぞれの例を示す。

- (16) お店は（もうすぐ）開く。（ル形・非過去（未来））
- (17) お店は（さっき）開いた。（タ形・過去）
- (18) お店は（今）開いている。（テイル形・非過去（現在））
- (19) お店は（昨日の夕方）開いていた。（テイタ形・過去）
- (20) お店は（明日の午後）開いている。（テイル形・非過去（未来））

この指し示す時点の異なりが、習得難易度の差を生むのか検討した研究は、次章以降で述べるように少なく、十分な研究の蓄積があるとはいいにくい。これまでの研究においては、非過去を表す「ている」の習得に焦点が当てられたものが多く、日本語のテンス・アスペクト習得研究は、「ている」偏重とも言える状況にある。しかし、日本語を用いて適切なコミュニケーションを行うためには、「ている」を使うべき文脈における使用

だけではなく、形式的あるいは意味的に類似したものを使い分けられるかについて、その習得状況を明らかにし、難易度を分ける要因を探る必要がある。そのため、本研究の前半では、「る」「た」「ている」「ていた」について、どのような場合に、どの形式とどの形式の使い分けが困難であるのかを明らかにすることを一つの目的とする。困難さを引き起こす要因として、目標言語である日本語の特徴、学習者の母語である中国語の特徴から考察を加える。

二つ目に取り上げるのは、「ている」「た」「ある／いる」の使い分けである。先行研究においては、「ている」の基本的な用法とされる「動作の持続」用法（例．太郎がご飯を食べている。）と「結果の状態」用法（例．財布が落ちている。）のうち、習得が難しいのは「結果の状態」であることが明らかになっている。さらに、「ている」を用いるべきところで、「た」を用いる傾向が強いことも指摘されている。この傾向は中国語を母語とする日本語学習者に顕著であるとされている。このことから、「結果の状態」の「ている」と「た」とが、類義関係にあると言える。しかし、同一の場面において、「た」だけでなく「ある／いる」も用いた誤用も見られることが先行研究で明らかになっている。「財布が落ちている。」ではなく「?財布がある。」といった例がこれにあたる。中国語を母語とする日本語学習者を対象に調査を行った陳（2009）では、「結果の状態」の「ている」場面における「ある／いる」の使用傾向は、中国語の影響によるものだとしているが、その後、十分な検証は行われていない。本研究の後半では、この議論に一定の回答を与えるべく、方法論的な問題点を克服した調査を実施し、その結果をもとに中国語の特徴から考察していく。

1.3 本論文の構成

本論文は、全 7 章からなっている。続く第 2 章では、先行研究の概観を行う。まず、学習者の母語の影響を探る研究が、第二言語習得研究でどのように扱われてきたかを確認し、母語の影響の問題を扱うことの重要性を述べる。そのうえで、日本語と中国語のテンス・アスペクトについて、本研究の分析対象を中心に、基本的な性質と両言語の相違点をまとめる。最後に、日本語のテンス・アスペクト習得研究を概観したうえで、これまでの研究の問題点を指摘し、本論文全体の研究課題を提示する。

第 3 章から第 6 章では、第 2 章で提示した研究課題に基づいて調査を行う。まず、第

3 章および第 4 章では、多肢選択式課題を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の「る」「た」「ている」「ていた」の習得状況を明らかにし、母語である中国語の影響、記号論的な観点からその要因を検討する。そして、第 5 章および第 6 章では、同一場面における日本語と中国語の表現方法を比較可能にするタスクを作成する。そのタスクを用いて両言語の母語データを収集し、同じ場面における日本語と中国語の事態の述べ方について対照する。そのうえで、中国語を母語とする日本語学習者の「ている」「た」「ある／いる」の使い分けに関する調査を行う。その結果を母語の影響の観点から考察する。以下、各章について概略する。

まず第 3 章では、本研究において重要な先行研究である崔 (2009) が「現在」「過去」「未来」における「動作の持続」「結果の状態」の習得順序を説明するのに用いた Reichenbach (1947) の SRE 理論と呼ばれる記号論の手法について、その概要をまとめる。その後、この手法を用いて学習者のテンス・アスペクトの習得を扱った研究およびその問題点をまとめ、本研究で用いる調査紙について述べる。そして、調査紙の妥当性を測るため、中国語を母語とする日本語学習者 30 名と日本語母語話者 30 名を対象として予備調査を行い、その結果を報告する。

第 4 章では、中国の大学で日本語を学ぶ学習者 180 名と日本語母語話者 54 名を対象に、調査を行う。学習者の習熟度を測るテスト (SPOT) の結果をもとに、学習者を各 60 名の 3 グループに分け、1) 「る」「た」の習得状況と習熟度の関係、2) 「現在」「過去」「未来」の各時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況と習熟度の関係、3) 「結果の状態」習得の際の母語の影響と習熟度の関係について検討し、記号論の手法 (Reichenbach 1947) を用いて説明を加える。

第 5 章では、「結果の状態」の「ている」と「存在」を表す「ある／いる」が類義関係にあると主張した陳 (2009) などの研究の問題点を指摘したうえで、同一場面における日本語の中国語におけるアスペクト表現が比較可能なタスクを作成する。そして、このタスクを用いて、日本語母語話者 58 名と中国語母語話者 136 名から母語データを収集し、同一場面における日本語と中国語の事態の述べ方を対照する。

第 6 章では、第 5 章の結果を、中国語母語話者による日本語習得における母語の影響を考える際のベースラインとして、第 5 章と同様のタスクによる調査を上級日本語学習者 31 名に対して行う。その結果から日本語学習者の「ている」「た」「ある／いる」の習得状況の実態を明らかにし、母語の影響の観点から検討する。

第 7 章では、本研究から得られた結論をまとめ、本研究の意義と今後の展望を述べる。

第 2 章

先行研究と本研究の位置づけ

本章では、2.1 において、第二言語習得において母語の影響を明らかにすることが重要なトピックの一つであることを述べる。そのうえで、2.2 で、本研究で学習者の目標言語となる日本語のテンス・アスペクト形式について、第 3 章以降の分析対象を中心に概観する。2.3 では、中国語のテンス・アスペクトについて、その基本的な性質を確認し、日本語との相違点をまとめる。最後に 2.4 では、日本語のテンス・アスペクト習得研究を概観したうえで、2.5 でその問題点を指摘し、本研究の研究課題を提示する。

2.1 第二言語習得における母語の影響

今日的な第二言語習得研究の始まりとされる Corder (1967) の「誤用分析 (Error Analysis)」や、Selinker (1972) の「中間言語 (Interlanguage)」などの概念が生まれる以前から、言語教育への活用を目的とした対照分析 (Contrastive Analysis) が行われ、第二言語習得における母語の影響が研究者、教育者たちの関心を集めていた。母語の影響に関する研究が、これまでに長い歴史を持つことについて、Gass (2013) では以下のように述べている。

...one of the oldest and most continuously studied area of SLA, that of the role of NL, which has had a rocky history in the course of SLA research. This subfield of SLA has come to be known as language transfer. (p.79)

(筆者訳：SLA において最も古く、最も継続的に研究されているものの一つが、母語の役割である。この SLA の下位分野は言語転移の問題として知られている。)

第二言語習得研究において、母語の影響は、これまでに長い時間をかけて議論されてきた問題である。今日、その重要性は広く認識され、母語の影響が大なり小なり第二言語習得過程において現れるものであるとされている。

Corder 以前は、学習者の誤用は母語の干渉 (interference) が原因で、その誤用は、対

照分析によって予測が可能であると考えられていた。そのため、対照分析の結果を反映させた教材を用いて繰り返し訓練すれば、新たな習慣が形成されて干渉は抑えられるとされ、オーディオリンガルなどの教授法が盛んに用いられていた。しかし、そのうちに、母語と目標言語が違っていても誤用にならないものや、対照分析では予測されない誤用などが報告されるようになる（Whitman & Jackson 1972 など）。また、Corder（1967）によって誤用分析の重要性が指摘され、盛んに行われるようになると、今度は、誤用のみに注目していたのでは、学習者がある形式を難しいと思っていたり、自信がなかったりして使用しない「回避（avoidance）」の問題が扱えないことなどがわかってくる（Schachter 1974）。そのため、誤用だけでなく、正用も含めたデータを分析する必要があることが認識されるようになる。こうした流れから、Selinker（1969、1972）は、学習者が第二言語を学ぶ過程で構築する学習者独自の言語体系を指して、中間言語（interlanguage）と呼び、中間言語は、学習者の母語からも、目標言語からも影響を受けながらも、いずれとも異なる独自の体系を有した学習者独自の言語体系であるとした（中間言語仮説、Interlanguage Hypothesis）。

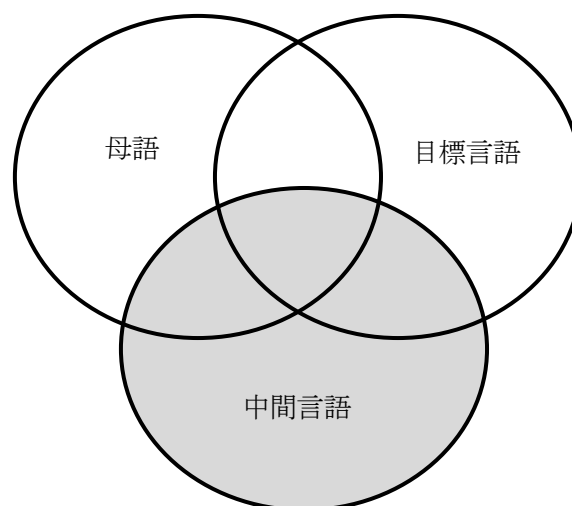


図 2-1 Selinker の中間言語（Corder 1971 : 151）

佐々木（2010）は、対照分析、誤用分析、中間言語分析の3つのアプローチの関係を、図2-2のようにまとめている。学習者の母語と目標言語の詳細な対照分析は、正用も含めた学習者の使用を解釈する際に大きな助けとなり、また誤用分析も Selinker（1972）が指摘したように、学習者がどのような中間言語の知識を有しているのかを知る重要な手がかり

となり得る。

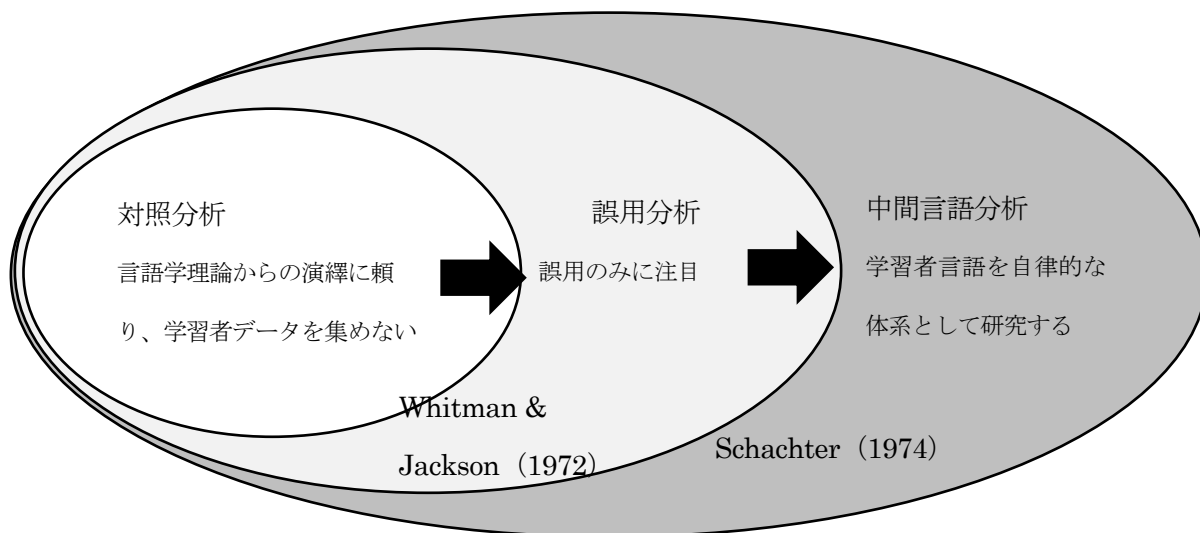


図 2-2 対照分析・誤用分析・中間言語分析の関係 (佐々木 2010 : 5)

対照分析の時代においては、学習者の誤りの原因は学習者の母語と目標言語との差異であるとされ、母語のマイナスの影響ばかりが注目されていた。しかし、対照分析のみでは、学習者の誤用を説明できないことがわかってくると、今度は学習者の母語に関わらない習得過程における普遍性に注目が集まるようになる (Dulay & Burt 1973、1974 など)。そこでは、学習者言語の創造的な側面に注目するあまり、母語の影響はほぼないとするような極端な主張さえなされるようになる (Dulay, Burt, & Krashen 1982 など)¹。しかし、こうした流れの中においても、母語の影響によると思われる現象は報告され続けた (Gilbert & Orlovic 1975 など)。対照分析には、誤用の全てを予測できるとする強い型と、一部の誤用を対照分析の結果から説明しようとする弱い型が存在するが、弱い型における対照分析は、佐々木 (2010) にあるように、今日でも有効な方法論として認識されている。そして現在、母語が影響する条件を探る研究が広く行われている。この点について、Gass (2013) の記述を見てみる。

In the late 1970s, interest in the role of the NL shed its earlier dichotomous

¹ Selinker (1992) は、上の 1970 年代における、対照研究からのアプローチが全く軽視されていたような期間を指して、'baby and bathwater syndrome'と呼んでいる。

perspective and took on *when and what conditions* perspectives. That is, the question was: Under what conditions does transfer take place? (p.147)

(筆者訳：1970年代、母語の役割における関心は、いつ、どのような条件という点に移った。つまり、どのような条件下において転移が起こるのか、という問題である。)

それまで母語の影響の有無について二分的に考えられてきた傾向から、母語の影響が、「いつ、どのような条件下で」見られるのかという観点へと捉え方が変化してきた。これまでに、学習者が母語と目標言語に見られる差異（有標性）をどのように認識しているかが、転移の生起を決定づけるとする研究（Kellerman 1978、1983）、学習者の母語によって、異なる発達の道筋が形成されることを指摘する研究（Zobl 1982）、回避の結果、使用が少なくなる「過少使用（underproduction）」や、反対に目標言語以上にルールを適用してしまった結果起こる「過剰使用（overproduction）」に関する研究（Schachter & Rutherford 1979）などがなされてきた。また、普遍文法の立場から母語の影響を探ろうとする研究（White 1991）など、様々な観点から母語の影響を検証する研究が行われてきた。これらの研究は、上に述べたように、いつ、どのような条件下で母語の影響が見られるのかというメカニズムを明らかにしようとしている。

母語の影響は、一度はその大部分が否定されるという歴史をもつが、今日ではその役割が再認識され、母語の影響は第二言語習得における重要な要因であると考えられている。これらの点を踏まえた上で、本研究における学習者が習得する対象である日本語のテンス・アスペクト、および学習者の母語である中国語のテンス・アスペクトについて見ていく。

2.2 日本語におけるテンス・アスペクト

2.2.1 日本語におけるテンス・アスペクト形式

テンス・アスペクトは、ともに時間に関する文法カテゴリーとして様々な言語に見られるものである。多くの言語に見られはするものの、その表現方法は言語ごとに異なり、普遍性や個別性など、これまで多くの研究がなされてきた（Comrie 1976、1985 など）。それは日本語学の世界においても例外ではない。特にアスペクトについては、日本語学の中で最も研究が進んでいる分野の一つであると言われる。金田一（1950）に始まったとされ

る日本語のアスペクトの研究は、その後、多くの研究者の関心を集め、様々な議論がなされてきた。

まずはテンスについてまとめる。テンスは出来事が発話時を基準として、過去、現在、未来のどこに位置するのかを述語の形式によって表す文法カテゴリーである²。

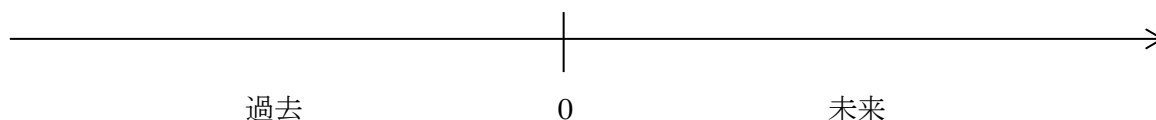


図 2-3 時間の表し方 (Comrie 1985 : 2 (久保訳 2014))

図 2-3 のように、テンスとは、発話時 (0) から見た出来事の時間的な前後関係 (同時を含む) を表す³。この時間的な前後関係を、述語の形式、つまり日本語の場合はル形とタ形の対立によって表し分ける。ル形には、イ形容詞やナ形容詞を述語とするもの、名詞が「だ」「である」を伴うもの、「いる／ある」のように存在や所有を表す動詞を述語とするものなどが含まれている。以上の点を確認したうえで、日本語のテンス研究において周知されている現象を見ていく。

日本語では現在・過去・未来の時間的な前後関係を、ル形とタ形によって表し分けることは上述したとおりである。意味の面から見れば、現在・過去・未来の 3 点に分かれるのであるが、日本語の場合は、ル形とタ形の対立が、非過去と過去の対立を表す。

- (1) a. 明日、東京へ行く。(非過去)
- b. 昨日、東京へ行った。(過去)

(1a) では、「東京へ行く」という出来事が、過去ではない時点 (非過去) に成立することを表している。一方、(1b) では、同様の「東京へ行く」という出来事が、発話時から見て過去に成立したことを表している。

タ形の表す意味は、述語のタイプに関係なく、一般的には過去を指す。一方、ル形が表

² 主節末における述語と、従属節内における述語とでは、テンスの表す現象が異なることが多くの研究によって指摘されているが、ここで扱うのは主節末における述語のテンスに絞る (従属節内のテンスについては岩崎 2001 など)。

³ 発話時を基準として出来事との前後関係を見る場合を「絶対テンス」、そのほかの時点を基準として出来事との前後関係を見る場合を「相対テンス」と呼ぶ (Comrie 1985 など)。

すのは、現在と未来の 2 つが含まれており、これには述語のタイプが関係する。述語が、(2a) の「名詞+だ」、(3a) の形容詞、(4a) の状態動詞を用いるものはル形は現在を表す。また、動作性を表す動詞を用いる場合には、(5a) のようにテイル形を用いることで現在を表す。

- (2) a. 今日は休みだ。(名詞+だ) (現在)
b. 昨日は休みだった。(名詞+だ) (過去)
- (3) a. 今日は忙しい。(形容詞) (現在)
b. 昨日は忙しかった。(形容詞) (過去)
- (4) a. 机の上に本がある。(状態動詞を用いるもの) (現在)
b. 机の上に本があった。(状態動詞を用いるもの) (過去)
- (5) a. 今、食べている。(テイル形) (現在)
b. さっき、食べていた。(テイル形) (過去)

上の例では、(2a) ～ (5a) のように「休みだ」「忙しい」「ある」「食べている」という状態が、発話時から見て現在のことである例と、(2b) ～ (5b) のように、それが発話時から見て過去のことである例とで対応しており、ル形とタ形が現在と過去の対立を指している。次に、述語が動作性の例を見てみる。

- (6) a. 明日、友達と遊ぶ。(未来)
b. 昨日、友達と遊んだ。(過去)
- (7) a. いまから、ご飯を食べる。(未来)
b. さっき、ご飯を食べた。(過去)
- (8) a. 10 分後、電話を掛ける。(未来)
b. 10 分前、電話を掛けた。(過去)

これらの例では、(6a) と (6b) では「友達と遊ぶ」という出来事、(7a) と (7b) では「ご飯を食べる」という出来事、(8a) と (8b) では「電話を掛ける」という出来事を表しているという点ではそれぞれ対応しているが、その出来事が発話時から見て、前のことなのか(過去)、後のことなのか(未来)という点で異なっている。このように、動作性の述語の

場合、ル形とタ形が未来と過去という対立を表す。述語が動作性のものの場合、現在の出来事であることを表すなら、上述したように述語の部分をテイル形にする必要がある（テイル形についての詳細は次節）。

- (9) a. 明日、友達と遊ぶ。(未来)
b. いま、友達と遊んでいる。(現在)
- (10) a. いまから、ご飯を食べる。(未来)
b. いま、ご飯を食べている。(現在)
- (11) a. 10 分後、電話を掛ける。(未来)
b. いま、電話を掛けている。(現在)

以上の点は、テンス研究によって概ね研究者間で共通認識となっている。ここからは、上述してきたものとは少々性質が異なると指摘されてきた現象について、これまでの研究を概観する。庵（2012：152）は「テンスの問題は基本的にタ形の意味をどう考えるかという問題に還元でき」、と述べているが、タ形が過去を表していると言い切れるかという現象が、これまでに指摘されている。それが、寺村（1971）による「完了のタ」である⁴。寺村（1971）は、次の例を挙げ、これが「完了」を表す場合と、「過去」を表す場合があり、タ形が二つのバリエント（異種）を持つ形式と主張した。（12）に例文を示す。

- (12) 昼ご飯を食べました。
 - a. もう昼ご飯を食べました。(完了)
 - b. 昨日は昼ご飯を食べました。(過去)

この現象は、上の例が答えとなる問いに対して、その否定の答えを比較してみると両者の違いがわかりやすくなる。

- (13) （昼休みが始まって 30 分後くらいに）昼ご飯を食べましたか。

⁴ 寺村（1971）は「た」が「ある事柄を単に過去の事実として述べるのではなく、過去のことを仮想して推量したり価値判断をしたりするようなより複雑な話し手の心的状態の反映と思われる」（寺村 1984：335）と、「ムードのタ」の用法も指摘しているが、この点に関する議論は本研究の範囲を超えるものであるため、ここでは触れない。

- a. はい、もう食べました。
- b. いいえ、まだ食べていません。(?食べませんでした。)

(14) (昨日) 昼ご飯を食べましたか。

- a. はい、食べました。
- b. いいえ、食べませんでした。(?まだ食べていません。)

寺村 (1984) は、「もう」「昨日」といった副詞と共に起ることによって、タ形が「ある場合には現時点での動作の終わったか否かを、またある場合には現時点と（いかに短い間であっても）隔絶した‘過去’における動作を表す」(p.322) と述べており、こうした異なる点を限定する「もう」「昨日」などが無い「ご飯を食べた」のような文を、二義的であるとした⁵。

次にアスペクトについて見ていく。アスペクトは始まりと終わりのある出来事をどのように捉えるかを表す文法カテゴリーである。始まりから終わりまで幅のある出来事を、全体としてまるごと一つと捉えて述べたり、あるいはその出来事のある段階（開始・継続・終了など）のみを捉えて述べる。

- (15) a. 太郎がご飯を食べる。
- b. 太郎がご飯を食べた。

(15a) と (15b) は、テンスについては、「ご飯を食べる」という出来事が発話時から見て前であるか後ろであるか、非過去と過去の対立が見られる。しかし、アスペクトについては、ともに「ご飯を食べる」という、「ご飯を食べ始めて」から「ご飯を食べ終わる」までの幅のある出来事を、全体として一つのまとまりのあるものと捉えている。

- (16) a. 太郎がご飯を食べる。
- b. 太郎がご飯を食べている。

一方、(16a) と (16b) は、ともにル形であり、テンスは非過去を表している。しかし、

⁵ 「た」の二義性に関して寺村と異なる論考に井上 (2011) などがある。

(16a) が (15a) 同様、「ご飯を食べる」という出来事を全体として一つの出来事として述べているのに対して、(16b) は、「ご飯を食べる」という出来事がまだ完結していない、つまり継続していることを表している。

現代日本語のアスペクト研究において、金田一 (1950) 以来、最も盛んに研究が行われているのは継続を表す「ている」に関するものである。アスペクトには、継続以外にも開始や終了などがあるが、ここでは継続、そのなかでも継続を表す「ている」に焦点を当ててその特徴を見ていく⁶。

まず金田一 (1950) は、動詞のタイプを、「ている」と共起するかどうか、「ている」と共起して表される意味が「動作の持続」か「結果の状態」かによって、4 種類に分類した。この金田一の 4 分類は、その後、多くの研究者によってその分類の妥当性が検討されることになる、非常に影響力の大きなものである。こうした動詞分類の研究は、日本語に限らず、ほかの言語にも見られる。英語を対象とした Vendler (1957) や、中国語を対象とした Tai (1984) などがそうである。ここでは、日本語のアスペクト研究を概観するにあたり、まず日本語と英語の動詞分類の出発点となった金田一と Vendler の分類に触れ、その類似点と相違点をまとめる。

金田一 (1950) はまず、「ている」との共起、および共起して表す意味をもとに、動詞を次の 4 つに分類をした。

- (17) I. 状態動詞：「ている」をつけることができない動詞 (例：いる、ある)
- II. 継続動詞：「ている」をつけると、動作の持続を表す動詞 (例：読む、書く)
- III. 瞬間動詞：「ている」をつけると、動作・作用が終わってその結果が残存して
いることを表す動詞 (例：死ぬ、(電燈が) つく)
- IV. 第四種の動詞：常に「ている」をつけて用いられる動詞 (例：似ている)

まず、状態動詞であるが、このタイプの動詞は、日本語においてごく限られた数しかないと言われている。金田一が挙げている例では「いる」「ある」などがある。また、金田一自身の指摘にもあるように、「見える」「聞こえる」などの知覚動詞や、「分かる」「できる」などの可能動詞も、「ている」と共起はできるが、「ている」のない形であっても状態を表

⁶ 継続以外にも含めて包括的に扱ったものに、吉川 (1976)、庵他 (2000、2001)、高橋 (2005) などが挙げられる。

せることから、このタイプの動詞に含まれる。続く継続動詞は、ある時間、続いて行われる動作や作用をもつもので、「読む」「書く」といった動詞がこのタイプに当てはまり、「ている」と共起することで、動作・作用の継続を表す。一方の瞬間動詞は、金田一によると、時間的な幅を持たず、動作や作用が始まって、その瞬間に終わるようなものを指す⁷。例えば、「死ぬ」「(電燈が) つく」といったものであり、「ている」と共起することで、動作・作用が終わって、その結果の残存を表す。最後の第四種の動詞は、常に「ている」とともに用いられるもので、「似ている」「(山が) 聳えている」などが例として挙げられる。

続いて、英語を対象に、Vendler (1957) が動詞 (句) の意味特性の違いから行った分類を (18) に示す (動詞の日本語訳は影山 (1996)、各動詞の例は菅谷 (2005) を参考にした)。

- (18) I. 状態動詞 (State verb) : 動きのない状態を示すもの。(例: ある、いる)
 - II. 活動動詞 (Activity verb) : 動的で持続性のあるもの。(例: 走る、食べる)
 - III. 達成動詞 (Accomplishment verb) : 持続性があるが、決まった終結点を有するもの。(例: イスを作る、学校まで歩く)
 - IV. 到達動詞 (Achievement verb) : 持続的でなく動的で、限界性 (それ以上先へ進めない動作の終結点) があるもの。(例: 死ぬ、落ちる)
- (菅谷 2005 : 42)

(18) から、金田一の分類と類似した部分が見られることがわかる。状態動詞は、時間を超越したもので、金田一 (1950) の状態動詞に相当するものであると言える。活動動詞は、動作や出来事に時間の幅を有するものであるが、特定の終点などがない点で、達成動詞と異なる。活動動詞と達成動詞の違いについて、影山 (2009) は次のように説明している。

＜活動＞は一般に、前もって定められた終点 (境界) がない継続的な動作や出来事
を表すのに対し、＜達成＞は継続的活動の先に「ここまでやったら活動は終わり」と
いう明確な終点がある。たとえば、He is running. や He is pushing the cart. とい
った表現が表す事象には、どうなれば終わりという限界点が明示されていない。しかし、

⁷ 瞬間動詞に含まれるものが、必ずしも瞬間的に終わるとは言えず、漸次的な変化を表すものもある。例えば、「太る」「痩せる」などが挙げられる。

He is building a house. では、家が完成すれば、build a house という過程は終わりを迎える。つまり、この表現自体に「どうなれば終わりか」というゴールが明示的に含まれているのである。このように、終点（境界）の有無が活動と達成のアスペクトの違いである。(p.22)

最後の到達動詞は、達成動詞同様、明確な終点を持つてはいるが、動作や出来事に時間の幅がないものを指す。そのため、時間の幅を表すような副詞と共に起することもできない(例: *died for one hour など)。

この Vendler の 4 つの分類は、瞬間性 (punctual)、有界性 (telic)、動性的性 (dynamic) という 3 つの意味特性の組み合わせによって決定される。いずれの意味特性も持たないものが状態動詞である。瞬間性も有界性も持たないが、動性的性を持つものが活動動詞で、瞬間性は持たないが、有界性と動性的性を持つものが達成動詞である。そして、すべての意味特性を持つものが到達動詞であるとされる。

表 2-1 意味特性から見た動詞（句）の分類⁸

	状態動詞	活動動詞	達成動詞	到達動詞
瞬間性	—	—	—	+
有界性	—	—	+	+
動性的性	—	+	+	+

再び日本語に話を戻す。金田一（1950）による動詞分類がなされて以降、彼の分類についてはその妥当性について多くの研究が行われた（鈴木 1957; 藤井 1966; 吉川 1976 など）。この動詞分類のパラダイムを大きく変えたのが、金田一の分類における問題点を指摘し、新たな視点を提示した奥田（1977、1978）である。奥田は次の点で、金田一の流れをくむ分類に問題があると批判した。それは、「ている」がアスペクトを表すとしているものの、「る」もまた、アスペクトを表していることが無視されているということであった。つまり、「る」と「ている」が一つの対をなす関係にあると指摘した。この点について、奥田は次のように述べている。

⁸ Andersen (1991 : 311) に基づき、小山 (2003 : 420) が作成したものである。

もし、site-iru が《持続》をあらわしているとすれば、他方に、当然のことながら、《持続》はあらわさないアスペクチュアルなかたちが存在していなければならないだろう。（筆者中略） site-iru という文法的なかたちは、suru という文法的なかたちと対立的な関係をむすびながら、アスペクトの体系をなして、いまかりに、suru を《完成相》、site-iru を《継続相》と名づけておこう。動詞の、ふたつのアスペクチュアルなかたちは、一方がなければ、他方もありえないという、きりはなすことのできない、有機的な関係の中にある。（p.107）

この奥田の主張は、その後、高橋（1985）などを経て、工藤（1995）へと繋がる。工藤（1995）では、テンス（非過去と過去）の対立、そしてアスペクト（完成相と継続相）の対立が組み合わさることによって「る」「た」「ている」「ていた」の形式が決定される。この＜基本的アスペクト・テンス体系＞は現在の日本語のアスペクト研究において、一応の共通認識となっていると言って差し支えないだろう（表 2-2）。本研究でも、この工藤（1995）を前提とする。

表 2-2 基本的アスペクト・テンス体系（工藤 1995 : 36 を改変）

		アスペクト	
		完成相	継続相
テンス	非過去	る	ている
	過去	た	ていた

さらに奥田（1977）は、金田一が継続か瞬間かという、時間の幅によって動詞を分類している点について、「太っている」など「結果の状態」を表すが瞬間的とは言えないものがあることを指摘し、＜主体の動作＞か＜主体の変化＞かによる新たな分類を提案した。

（19）Ⅰ．主体動作・客体変化動詞：テイル形は「動作の持続」か「結果の状態」

（例、ドアを開けている、ご飯を作っている）

Ⅱ．主体変化動詞：テイル形は「結果の状態」（例、落ちている、死んでいる）

Ⅲ. 主体動作動詞⁹：テイル形は「動作の持続」（例、歩いている、飛んでいる）

本研究においても、動詞が＜主体の動作＞か＜主体の変化＞のいずれを表すかが、テイル形の用法を決定するうえで重要であると考え、この奥田（1977）の分類に沿うこととする。

2.2.2 「ている」の用法

続いて、本研究が主な対象とする形式である「ている」が表す用法を確認する。「ている」にはさまざまな用法があり、その用法の分け方や呼称の仕方は研究者によって異なっている（吉川 1976; 寺村 1984; 益岡・田窪 1992; 工藤 1995; 庵 2001; 白井 2004 など）。本研究では、「ている」の用法を次のように考える。

- (20) a. 動作の持続（太郎はご飯を食べている。）
b. 結果の状態（財布が落ちている。）
c. 繰り返し・習慣（朝 6 時に起きている。）
d. 完了（その本はもう読んでいる。）
e. 経験・経歴（富士山には 3 回行っている。）

これら「ている」の用法の中で、最も基本的な用法とされるのが「動作の持続」と「結果の状態」の二つである（益岡・田窪 1992; 庵 2012 など）。

(21) 太郎はご飯を食べている。（動作の持続）

(22) 財布が落ちている。（結果の状態）

「動作の持続」は「問題の時点以前に動きが始まり、その時点でまだ動きが終結していない状態を表す用法」（益岡・田窪 1992 : 114）である。(21) では、「ご飯を食べる」、つまり食べ物を口に運ぶという細かい動作が連続して行われていることを表している。一方、

⁹ 主体動作動詞には自動詞も他動詞も含まれるが、他動詞においては客体の変化を伴わない。打撃や接触を意味する動詞（蹴る、押すなど）を指し、客体に働きかけるのみで、結果としての変化は意味に含まれない（影山 1996; 工藤 1995 参照）。

「結果の状態」は、「問題の時点以前に動きが終結し、動作の主体にその結果が残存している状態を表す用法」(益岡・田窪 1992: 114-115)である。(22)では、「財布が落ちる」という細かい動作が連続して行われているわけではなく、「財布が落ちた」結果、そこに「財布がある」ことを表している。

「結果の状態」の「ている」は、日本語学の世界においても、これまでに多くの研究の蓄積がある。しかし、その多くが、「結果の状態」の「ている」が「どのような用法なのか」を説明しようとするものである。例えば、上に述べているように「問題の時点以前に動きが集結し、動作の主体にその結果が残存している状態を表す用法」(益岡・田窪 1992: 114)や、「発話時以前のある時点で起こった変化の結果が発話時以前から発話時を超えて発話時以降のどこかの時点まで続くこと」(庵 2012: 156)を表す、といった説明がなされている。しかし、日本語学習者の視点から見れば、「結果の状態」の「ている」がどのようなものであるかと同時に、どのような場面で「ている」を使用すればよいのかという、使用の条件も同様に重要である。こうした点から「結果の状態」の「ている」を説明したものは、筆者の知る限り多くない。

例えば、寺村(1984)では、「金魚が死んでいる」「財布が落ちている」「家が倒れている」といった例を挙げながら、「結果の状態」について、「その成立には、何らかの‘ふつうでない’状態という状況が必要である」(p.136)と述べている。しかし、こうした条件も、すべての「結果の状態」の「ている」の使用条件に適用できるとは言えそうにない。現に寺村自身も「電灯がついている」といった例を挙げて上述の説明に対して「言いすぎかもしれない」(p.137)と述べている。

また、井上・生越・木村(2002)では、「ている」と「た」の使い分けについて、次のように述べている。(23)や(24)のように、「変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握している場合」(p.142)には、「落ちた」のように「た」が使用可能であると述べている。

(23) (聞き手のハンカチが落ちたのを見て、その直後に)

ハンカチが {落ちましたよ／*落ちていますよ}。

(24) (聞き手のハンカチが知らない間に聞き手の足元に落ちているのを見て)

ハンカチが {落ちましたよ／落ちていますよ}。

しかし、「変化の過程が把握されていない場合」(p.142)は、(25)のように「ている」を用いて、眼前にある結果後の状態に言及するほかない。

(25) (道に誰のものかわからないお金が落ちているのを見つけて)

あ、お金が {落ちている／*落ちた}

「繰り返し・習慣」は、(26)のように同じ動作が反復して行われる状態にあることを表す。「動作の持続」よりも繰り返しの間隔が広く、例えば「最近」「いつも」などと共起して使用されることがある。「る」でも習慣を表すが、「ている」のほうが一時的状態の意味が強いとされる (田窪・益岡 1992 : 115; 砂川 1986 : 33)。

(26) a. 花子は (最近) 毎朝 5 時に起きている。

b. 彼は (いつも) あの席に座っている。

また、「ている」が、肯定の場合は「もう」「既に」、否定の場合は「まだ」と共起すると、動作や出来事の「完了」を表す。(27a) (27b) に例を示す。

(27) a. その本はもう読んでいる。

b. 祖父は 10 年前に死んでいる。

工藤 (1995) では、こうした「完了」¹⁰の「ている」の意味を「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」(p.99)であると述べている。「完了」と「結果の状態」は、類似している点もあるが、工藤 (1995) では、次のような場合には「ている」が「完了」を表すとしている。例えば、①「ときに」「までに」など、通常ル形と共起するものと結びついた場合、②「現在完了」であれば、「昨日」「さっき」「昔」など過去を表す形式と結びついた場合、そして③動作の場所を表すデ格と結びついた場合である (工藤 1995 : 118-119; 白井 2004 も参照)。

¹⁰ 工藤 (1995) では、「完了」ではなく「パーフェクト」という呼称を用いている。

(28) 彼女は結婚している。(結果状態)

(29) 彼女はスイスの教会で結婚している。(パーフェクト)

(工藤 1995 : 119)

次は、「ている」を用いて、当該の動作や出来事を、経験や経歴として述べる例である。

(30a) (30b) はいずれも、過去に富士山に行ったことがあること、大会に参加したことがあることを述べている。

(30) a. 富士山には3回行っている。

b. 彼はこの大会に何回も出ている。

以上、「ている」の用法を見てきたが、複数ある「ている」の用法の中でも、基本的な用法は「動作の持続」と「結果の状態」の2つであると言える。

2.3 日本語と中国語のテンス・アスペクトの対照

2.3.1 中国語におけるテンス・アスペクト形式

続いて、日本語と中国語におけるテンス・アスペクトの相違点をまとめる。それに先立ち、中国語のテンス・アスペクト形式について、その基本的な性質を確認することから始める。まずテンスについてであるが、日本語と異なり、中国語は文法カテゴリーとしてのテンスを持たない言語であることが通説となっている (Li & Thompson 1981; 井上・生越・木村 2002 など)。つまり、発話時から見た時間的な前後関係を述語部分の形式によって表すことはない。

(31) 他 去年 在 北京 工作。

彼 去年 で 北京 働く

(彼は去年北京で働いた。)

(32) 他 現在 在 北京 工作。

彼 いま で 北京 働く

(彼はいま北京で働いている。)

(33) 他 明年 到 北京 工作。

彼 来年 で 北京 働く
(彼は来年北京で働く。)

(31) から (33) のように、時間を表す副詞 “去年” (去年)、“現在” (現在、いま)、“明年” (来年) 以外、述語形式はすべて “工作” (働く) であり、述語によって現在・過去・未来を表すことはない (井上・生越・木村 2002)。例えば、動作動詞の場合、(34) や (35) のように動詞を裸の形で用いれば、通常、未来のことを表す。

(34) 你 吃 什么?
あなた 食べる なに
(あなたは何を食べますか?)

(35) 我 吃 面包。
わたし 食べる パン
(わたしはパンを食べます。)

過去のことを言いたければ、「完了」を表すアスペクトマーカ “了” などを用いて述べることができる (詳細は後述)。例を (36) に示す。

(36) 你 吃 饭 了 吗?
あなた 食べる ごはん *LE* か
(あなたはご飯を食べましたか?)

続いて、状態動詞の場合には、(37) のように裸の形で現在のことを述べ、過去のことも裸の形で、(38) のように “昨天” (昨日) など時間副詞の助けを借りて表す。

(37) 我 在 家。
わたし いる 家
(わたしは家にいます。)

(38) 我 昨天 在 家。
わたし 昨日 いる 家

(私は昨日、家にいました。)

文法カテゴリーとしてのテンスを持たないと広く言われるのと同様に、中国語が複数のアスペクトを表す形式を有している言語であることもたびたび指摘されてきた（朱德熙 1982; 藤堂・相原 1985; 呂淑湘編 1999; 木村 2006 など）。そのなかでも、研究者たちの関心の中心が「持続」を表す“着”および「完了」を表す“了”であったことを、木村（2006）は次のように述べている。

＜持続＞を表すとされる“着”と、＜完了＞を表すとされる“了”は、ともにアスペクトを担う中核的な要素としてこれまでに多くの研究者の関心を集めてきた。中国語のアスペクトは、この 2 つの動詞接辞を典型的な成員とし、この 2 本柱に若干数の文末形式や動詞接尾辞的な形式が加わって 1 つの体系的な文法カテゴリーを構成しているという認識が、明に暗に現代中国語の数十年に亘る文法研究の歴史の中で広く共有されている。(p.46)

木村（2006）では、従来の中国語文法研究における主要なアスペクト形式を、動詞（形容詞の場合もある）につく動詞接尾辞の“了”、“着”、“过”、文末助詞（語気詞）の“了”、“呢”としている。本研究においても、中国語でアスペクトを表す典型的な形式を“了”、“着”、“过”¹¹、“了”、“呢”、としたうえで、各形式がアスペクト的にどのような機能を表しうるかを概観する。なお、“了”に関して、「完了・実現」を表す動詞接尾辞“了₁”と、「事態の変化」を表す文末助詞“了₂”が区別して論じられることがあるが、本論文では三宅（2010）が述べているように、「動作の完了」という概念自体も「動作が完了していない状態」から「動作が完了してしまった状態」への一種の「状態の変化」(p.48)と考え、“了₁”と“了₂”をまとめて「変化」を表す“了”として扱う。しかし、本節に限り、動詞接尾辞の“了₁”と文末助詞の“了₂”の特徴をまとめるために、便宜的に表記を区別する¹²。

¹¹ 木村（2006）は、“过”も経験を表すアスペクト形式としたうえで、「動詞に後接して動作主体の＜経験＞を表す“过”は、特定の時空間に現出する個別の事態の時間的局面的特徴づけというアスペクト本来の機能からはやや逸脱し、むしろ動作主体のある種の属性を語る形式に近いもの」(p.47)であり、上に挙げた他形式とは「異質」なため本研究の考察の対象から除いているが、木村自身も述べているように、“过”がアスペクトを表す形式であることについては広く認められていると考え、これも含めて概観することとする。

¹² “了₁”と“了₂”に分けず、“了”はそもそも一つであり、その表す意味は“実現（実現）であるという

“了₁”と“了₂”の両形式の文法的意味については、これまでに多くの先行研究によって議論がなされている。その代表と言えるのが、“了₁”は動作や出来事が「実現」したことを表すとする説（刘勛宇 1988）と、“了₁”は動作や出来事が「完了」したことを表すとする説（木村 1997）の対立である。本節の目的はこの議論に対する解を述べることではないため、本研究では、“了₁”の表す意味を、現在、広く用いられている呂淑相編（1999）の「動作の完了」（以下、完了）とする。また、“了₂”についても、“了₁”同様に、呂淑相編（1999）の「主として事態に変化が起きたこと、あるいは今にも変化が起きることを認め」（p.239）ることを表すとして、「変化」とする。

2.3.1.1 動詞接尾辞“了₁”、“着”

これまでの中国語のアスペクト研究では、“了₁”と“着”の文法的意味についてのものがその中心的な位置を占めてきた。アスペクトにおける基本的な性質を、事態をどのように捉えて言語化するかの問題であると考えた場合、日本語でも見たようにそれが完了したものであるか、あるいは持続しているものかという対立構造が重要になる。その意味において、ここで取り上げる“了₁”と“着”は、それぞれ完了相（perfective）と持続相（imperfective）と捉えることができる。以下では、2つの接尾辞の基本的な意味および、その成立する条件についてまとめていく。

まず、“了₁”は持続性の動詞、変化性の動詞、状態動詞、そして形容詞に後接して、動作や行為が「完了」したことを表す。

(39) 我 买 了 一斤 苹果。

私 買う *LE₁* 一斤 りんご

（わたしはリンゴを1斤買った。）

(40) 今天 我 吃 了 一斤 饺子。

今日 私 食べる *LE₁* 一斤 餃子

（今日わたしはギョーザを1斤食べた。）

(41) 我 那个 朋友 死 了 十五年 了。

主張もある（刘一之 1995）。

私 あの 友だち 死ぬ LE_1 十五年 LE_2

(わたしのあの友だちは亡くなって15年になる。)

(42) 由于 经常 在一起, 他们 之间 逐渐 产生 了 爱情。

ので いつも 一緒に 彼ら 間 だんだん うまれる LE_1 愛情

(いつもいっしょにいたので、彼らの間にはだんだん愛情が芽生えた。)

(43) 我 知道 了 她的 秘密。

私 知る LE_1 彼女の 秘密

(わたしは彼女の秘密を知った。)

(44) 这 十年来 中国 有 了 很 大的 变化。

この 十年来 中国 ある LE_1 とても 大きな 変化

(この10年来中国では大きな変化があった。)

(45) 这个月 只 晴 了 五天。

今月 ただ 晴れる LE_1 五日間

(今月は晴れた日が5日間しかなかった。)

(荒川 2003 : 127)

それぞれで用いられた述語を見てみると、“买”(買う)と“吃”(食べる)は持続性の動詞(Vendlerの活動動詞に相当)、“死”(死ぬ)と“产生”(うまれる)は変化性の動詞(Vendlerの到達動詞と達成動詞に相当)、“知道”(知っている)と“有”(ある)は状態動詞(Vendlerの状態動詞に相当)、“晴”(晴れる)は形容詞が用いられている。持続性の動詞の場合についてさらに見てみる。

(46) 我 写 了 一封 信。

私 書く LE_1 一通 手紙

(私は手紙を一通書いた。)

(47) 我 看 了 一本 书。

私 読む LE_1 一冊 本

(私は本を一冊読んだ。)

上の2つの例文は、それぞれ「手紙を一通書く」「本を一冊読む」という動作や出来事が

完了したことを表している。「完了」については、まだ完了していない状態から完了した状態への移行と考えると、必然的に動作や出来事における限界点や変化点が必要になると言える。“了₁”については、その文を言いきりの形にできるかどうかという点において、動詞句あるいは文全体の限界性の有無が大きく影響する（木村 1997; 楊 2001 など）。井上・生越・木村（2002）でも、“了₁”は、“等三个小时（三時間待つ）“など＜閉じた形＞や、”死（死ぬ）“などの「+生」と「一生」の境界を表すような事態に用いるとされている。

(48) ?我 写 了 信。
私 書く *LE₁* 手紙
(私は手紙を書いた。)

(49) ?我 看 了 书。
私 読む *LE₁* 本
(私は本を読んだ。)

(48) (49) はともに、文としてすわりが悪く、言い切りにくいものとなっている。(50) (51) のように、“一封”（一通）、“一本”（一冊）を加えて限界性を示す必要がある。または、文を続けて継起関係を表せば、すわりの悪さを解消できる。

(50) 我 写 了 信 就 出去。
私 書く *LE₁* 手紙 すぐ 出かける
(手紙を書いたら出かける。)

(51) 我 看 了 书 再 说 吧。
私 読む *LE₁* 本 また 話す しょう
(本を読んでからまた話しましょう。)

反対に、(52) (53) のように限界性を示すものを伴いながら“了₁”を落としてしまうと、これもまた文として不自然になってしまう。

(52) ?我 写 一封 信。

- 私 書く 一通 手紙
 (53) ?我 看 一本 书。
 私 読む 一冊 本

この限界点を必要とすることから、“了₁”は「＜限界性 (bounded) のある動作＞が参照時において＜既に実現済み＞であることを表す。言い換えれば、“了₁”は、動作が一定の具体的な限界点に既に到達済みであることを示す」(木村 2006: 56) 形式であると言える。

続いて、「持続」を表す動詞接尾辞の“着”についてまとめていく。朱德熙 (1982) は、“着”について、①「行為や変化の持続（すでに開始し、なお収束していない）」、②「姿勢を表す動詞に付くと、静止した状態」、③「動作が完了した後に残った状態」に分けて説明している。まず、①「行為や変化の持続（すでに開始し、なお収束していない）」の例を (54) (55) に示す。

- (54) 他 正 上 着 大学 呢。
 彼 ちょうど 通う ZHE 大学 NE
 (彼は今大学に通っている。)

- (55) 外 下 着 大雪。
 外 降る ZHE 大雪
 (外は大雪が降っている。)

(朱德熙 1982 : 88)

これらは、「大学に通う」「大雪が降る」という行為・出来事がまさに進行中であることを表している。次に、②「姿勢を表す動詞に付くと、静止した状態」の例 (56) (57) (58) を見てみる。

- (56) 台上 坐 着 主席团。
 壇上 座る ZHE 主席团
 (壇上に議長団が座っている。)
- (57) 旁边 站 着 两个 孩子。
 そば 立つ ZHE ふたり 子ども

(横に子どもが二人立っている。)

(58) 手里 端 着 一盆 水。

手 持つ *ZHE* 一杯 水

(手に洗面器一杯の湯を持っている。)

(朱德熙 1982 : 88)

それぞれ、「壇上に座り、その状態（姿勢）が持続している」こと（例 56）、「横に立った状態（姿勢）が持続している」こと（例 57）、「洗面器を持った状態（姿勢）が持続している」こと（例 58）を表す。最後に③「動作が完了した後に残った状態」である。

(59) 门 开 着 呢。

ドア 開く *ZHE* *NE*

(ドアは開いているよ。)

(60) 墙上 挂 着 一幅 画。

壁 掛かる *ZHE* 一枚 絵

(壁に一枚の絵が掛かっている。)

(61) 房顶上 盖 着 一层 厚厚的 雪。

屋根 覆う *ZHE* 一層 厚い 雪

(屋根には厚い雪が覆い被さっている。)

(朱德熙 1982 : 89)

(59) が「ドアが開き、開いたままの状態が持続している」こと、(60) が「壁に絵が掛けられて、そこにある状態が持続している」こと、(61) が「屋根に雪が積もった結果、雪が屋根を覆っている状態が持続している」ことを表している。

この「持続」を表す“着”は、動詞との共起可否において制約が掛かるという点で、先に見た“了₁”と大きく異なっている。荒川（2015）は、“着”と結びつきやすい動詞は動きが静かで、ある状態を保つものであり、その程度によっていくつかの動詞群に分けられると指摘している。また木村（2006）も、“着”が後接するのは、「人や物を特定の場所に位置させる動作を意味する動詞」（p.54）であり、その典型的なものとして、“搁”（置く）、“貼”（貼る）などの設置動詞、“坐”（座る）、“躺”（横たわる）などの姿勢動詞を挙げて

いる。次節で触れるが、このように二つの動詞接尾辞と動詞の共起可否は、中国語母語話者による日本語習得を考える際にも重要になるものである。

2.3.1.2 動詞接尾辞“过”

“过”は「かつてある事が発生した」あるいは「かつてある事を経験した」ことを表す(朱德熙 1982 : 89)。

(62) 你 动 了 手术 没有?

あなた する *LE₁* 手術 か

(あなたは手術をしましたか?)

(63) 你 动 过 手术 没有?

あなた する *GUO* 手術 か

(あなたは手術をしたことがありますか?)

(朱德熙 1982 : 89)

上の例(62)(63)のように、動作や出来事が完了したことを表す“了₁”とは異なる性質を持っている。呂淑相編(1999)では、“了₁”と“过”の違いとして(64)と(65)の例を用いている。動詞が“了₁”を伴うことで、その出来事が現在まで持続しているということとはあり得るが、“过”を伴う形では現在まで持続しているということはない。つまりこの経験を表す“过”の場合は、過去のことに限られる。

(64) 他 当 过 班长。

彼 なる *GUO* 班長

(彼は班長になったことがある(今はもう班長ではない。))

(65) 他 当 了 班长 了

彼 なる *LE₁* 班長 *LE₂*

(彼は班長になった(今もなお班長である。))

(呂淑相編 1999 : 159)

2.3.1.3 語気詞“了₂”、“呢”

“了₂”は、呂淑相編（1999）によると「文末に置き、主として事態に変化が起きたこと、あるいは今にも変化が起きることを認め、文を完結する働きを持つ」（p.239）。また、朱德熙（1982）は、“了₂”を、「現在（発話時）との関わりにおいてすでに完了した事態を表す」（p.285）と述べている。例を（66）に示す。

- (66) 回来 已经 两年 了
 帰ってくる 既に 二年 *LE₂*
 (帰ってきてもう二年になる。)

(朱德熙 1982 : 285)

しかし、次のように文末の“了”の前が動詞である場合には、それが動詞接尾辞の“了₁”なのか、語気助詞の“了₂”であるかはわからず、二通りの解釈が可能になる。（67）の例文を用いて確認する。

- (67) 他笑了。

(朱德熙 1982 : 285)

（67）の例を“了₁”で解釈すれば「彼が笑って、笑うという動作・行為が完了した」ことを表し、“了₂”で解釈すれば、「笑っていない状態から笑う動作・行為への変化」となる。どちらで解釈するかは使用されている場面や状況によって判断される。

“呢”は、従来、（68）のように用いられて「持続」を表すとされてきた（朱德熙 1982）。

- (68) 下 雨 呢。
 降る 雨 *NE*
 (雨が降っている。)

(朱德熙 1982 : 284)

しかし、木村（2006）では、状態述語の文においても“呢”が用いられることから、“呢”

それ自体が「持続」を表すとは言いにくく、“呢”が表すのは、「ある状況が問題の場にく
現然>と存在するという意味」(木村 2006 : 51)であるとした。木村(2006)は“呢”の
持つ意味を、“了₂”にも言及しながら、次のように述べている。

NE は、ある状況が問題の場にく現然と存在する>という意味を表す形式であると
考える。喩えて言えば、先の LEsp¹³が、X でない状況と X という状況を各々描いた 2
枚の絵を持ち出し、前者から後者へと場面が転換したということを伝える形式だとす
るなら、NE は、目の前の 1 枚のボードに、X という状況を描いた 1 枚の絵をベタリ
と貼り付けて提示する、という、そのようなイメージの役割を担う形式だと言える。
話し手の発話領域あるいは参照領域、即ち、「ここ」あるいは「そこ」という話し手に
よっての問題の場に、斯くなる状況が現然と存在しているのだ、ということを提示す
る働き、それこそが NE の意味機能であると考えられる。(p.51)

井上(2012a)も、“呢”が「「変化のない場面(世界、情景)」を現実のものとしてイメー
ジしていると言う心的態度」(p.208)を表すとして、その意味を「状況維持」とした。

- (69) 小李 在 厨房 包 饺子 呢。
 李さん で 台所 包む 餃子 NE
(李さんは台所で餃子を包んでいる。)

(木村 2006 : 51)

この例(69)は、木村(2006)、井上(2012a)に従えば、「李さんが台所で餃子を包む」
という「状況、世界、状態」がそこに存在しているという話者の認識を“呢”によって表
している。荒川(2011)もやはり、“呢”が「持続(荒川 2011 では「進行」)を表すとは
言えず、「一時的な状態を相手に知らせる」ときに使用されるものとした。

- (70) 他 等 着 你。
 彼 待つ ZHE あなた

¹³ LEsp は「文末助詞 (sentence-final-particle)」の LE であることを指しており、本研究の“了”に相当する。

(彼はあなたを待ち続けている。)

(71) 他 等 着 你 呢。

彼 待つ *ZHE* あなた *NE*

(彼はあなたを待っている。)

(荒川 2011 : 4、(70) の訳文は筆者による)

荒川によると、(70) では、すでに待つ動作が始まっており、今後「あなたを待ち続ける」ことを表すが、(71) のように“呢”を伴うことで、それが現在に引き留められるようになる。

2.3.2 日本語と中国語におけるテンス・アスペクト形式の相違点

日本語と中国語におけるテンス・アスペクト形式について、本研究と関連する形式を中心にその基本的な性質を概観してきた。次に両者の相違点をまとめる。日本語と中国語のテンス・アスペクト形式の対照研究は、中国語が無テンス言語という認識が広く認められていることから、アスペクト形式を対象としたものが多くなっている。具体的には、木村 (1982)、張 (2001)、井上 (2002、2012b)、井上・生越・木村 (2002)、荒川 (2015) などが挙げられる。

張 (2001) は、中国語の“着”を、状態の持続を表し、日本語の「結果の状態」の「ている」に対応する形式としている。

(72) 桜の木にはきれいな花が咲いています。／樱花儿树上樱花儿盛开着。

(張 2001 : 140)

しかし、張 (2001) では、この“着”の使用条件について、表している事柄が何かに付着している現象でなければ、“着”は用いられないと述べている。例えば、(72) では桜の木に花が付着している、という発想である。この条件が満たされていない場合には、日本語の「結果の状態」の「ている」を用いるような場面で、“着”の代わりに、変化に注目する“了”が用いられると述べている。そのため、中国語を母語とする日本語学習者が「花が落ちている」や「靴下が破れている」を、それぞれ「花が落ちた」「靴下が破れた」と言っ

てしまう (p.141)。

木村 (1982) は、完了の“了”の基本的な意味を、「既に実現・展開し終えて、もはや続行されない、というあり方で把握されたものであることを示す」(p.29)として、この点において、日本語の「た」に対応する形式であると述べている。また、“了”が日本語の「死んでいる」に対応するような場合にも用いられ(“死了”)、「動作・作用の完了の結果として存続している状態を指す場合にも用いられる」(p.29)としている。

これに関連して、井上 (2002) では、日本語で「死んでいる」と「結果の状態」を述べるのに対して、中国語では“死着”とは言えず、“死了”のように「変化」に焦点を当てた表現になる理由を次のように述べている (井上・生越・木村 2002 も参照)。

中国語の“着”は動作や状態の維持を表す形式であり、“死”(死ぬ)のように変化の局面のみを持ち、結果状態維持の局面を持たない動詞はそもそも“V 着”の形は成立しない。そのため、「死ぬ」という変化の結果状態(すなわち[一生]の状態)が眼前に存在している状況でも、中国語では“死了”で変化の実現そのものを叙述するしかない。(p.7)

井上 (2002) では、以上のような差異を踏まえて、変化動詞と、日本語の「た」「ている」、そして中国語の“了”“着”との共起関係を表 2-3 のようにまとめている。

表 2-3 変化動詞と「た」「ている」、「了」「着」の共起関係 (井上 2001 : 7)

		V した	V している	V 了	V 着
変化 動詞	結果状態維持なし (例:「死ぬ」、「死」)	○	○ (結果状態残存)	○	×
	結果状態維持あり (例:「開く」、「開」)	○	○ (結果状態維持)	○	○

このように、日本語の変化動詞は結果状態維持の有無に関係なく「た」「ている」と共起できる。それに対して、中国語では、変化動詞が結果状態維持の局面を持つかによって“了”“着”との共起の可否が変わる。この点は本論でも触れるが、中国語母語話者による日本語習得を考える際にも留意する必要があると言える点である。

アスペクトの問題を考える際に動詞の性質が重要になることはこれまでも繰り返し触れてきた。一見対応していると思われる日本語と中国語の動詞でも、厳密には表す意味の範囲が完全に重なっているわけではないという例は決して少なくない。荒川（2015）は“坐（座る）、躺（横になる）、站（立つ）、爬（はう）、蹲（しゃがむ）”などを「静態的な動作」を表す「静態動詞」であり、これは「静態を表すのが主で、その静態に移る変化（過程）を積極的には表さない」（p.125）とした。このことから、一見対応していると思われる日本語と中国語の動詞の意味範囲の違いも考慮した上でも学習者言語の分析の必要性が指摘できる。

2.4 第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得研究

ここまで、本研究における学習者の目標言語（日本語）と母語（中国語）におけるテンス・アスペクト形式を概観してきた。アスペクト研究は日本語学、中国語学の分野において研究が進んでいるトピックであるとされるが、第二言語としての日本語の習得研究においても、やはり、アスペクトは研究が盛んなトピックの一つと言える。研究の対象となる言語形式は「ている」が多く、これまでに、動詞（句）の持つアスペクト特性（語彙アスペクト、Lexical aspect）とテンス・アスペクトを表すマーカ－との結びつきを明らかにしようとする研究、「ている」が表す様々な用法の習得順序を明らかにしようとする研究、学習者の母語がアスペクト習得に与える影響を明らかにしようとする研究、教授効果を明らかにしようとする研究など、多くの方面から研究が行われてきた。

2.4.1 語彙アスペクトの観点からの習得研究

これまで行われてきたテンス・アスペクトの習得において、研究者たちの最も大きな関心の1つが、動詞（句）が持つアスペクト的性質である語彙アスペクトが、テンス・アスペクト形式の習得にどのように影響するのかというものであった。そして、その影響を予測するものがアスペクト仮説 (Aspect Hypothesis) である（白井 1998; Andersen & Shirai 1994; Bardovi-Harlig 2000 など）。

2.4.1.1 アスペクト仮説について

アスペクト仮説はもともとフランス語やイタリア語、英語の第一言語習得に端を発している（白井 1998; Shirai 2002; 菅谷 2005 など）。その後、第二言語習得においてもアスペクト仮説を検証する研究が行われるようになった。アスペクト仮説では、次のような予測が導き出されている。

- (73) （完結相）過去形は、まず主に到達・達成動詞に付加され、後に活動動詞、状態動詞にも使われるようになる。
- (74) 完結相過去と非完結相過去の区別をする言語（例：スペイン語、フランス語、イタリア語）においては、非完結相過去の習得は完結相過去よりも遅れ、主として状態・活動動詞から始まる。
- (75) 進行形は、主として活動動詞から始まる。
- (76) 進行形を誤って状態動詞につけることは、ほとんどない。

（菅谷 2005 : 44）

これを日本語に対応させると、次の習得過程が予測される（菅谷 2005; 稲垣 2011）。

- (77) 学習者は過去形「た」をまず決まった終結点を持つ動詞、つまり到達動詞（例. 死ぬ）と達成動詞（例. 家を建てる）に使用し、その後、活動動詞（例. 走る）と状態動詞（例. いる）にもその使用範囲を広げる。
- (78) 学習者は進行形「てい」をまず活動動詞（例. 走る）に使用し、その後、達成動詞（例. 家を建てる）にもその使用範囲を広げる。
- (79) 学習者は未完結相「てい」をまず活動動詞（例. 走る）と共に「動作の持続」の意味で使用し、その後、到達動詞（例. 死ぬ）にも「結果の状態」の意味で使用するようになる。

（稲垣 2011 : 18-19）

以下で概観するように、アスペクト仮説の検証を目的とした研究は、日本語を対象としたものも盛んに行われている。その理由について、稲垣（2011）は次のように述べている。

仮説 3'（筆者注：(79) の仮説に相当）は日本語の「てい」の多義性ゆえに導かれる仮説で、英語などでは検証できない。加えて、日本語母語話者の会話では、約 1 対 2 の割合で「てい」は活動動詞よりも到達動詞といっしょに使われるほうが多いと言う報告もある（Shirai & Kurono, 1998）。そうであれば、インプットから十分な支持が得られない状況であっても仮説 3' が支持されるかどうかを検証することは、アスペクト仮説の普遍性の根強さを見るうえで極めて興味深いと言える。アスペクト仮説の検証が、特に日本語習得において盛んに行われてきた背景には、このような理由が存在していたのである。

（稲垣 2011 : 19）

Andersen & Shirai (1996 : 557) ではプロトタイプ理論を援用してアスペクト仮説を説明しようと試みている。Andersen & Shirai は、インプットには偏りがあり、その学習者が触れる頻度によりプロトタイプが形成されるとしている。例えば、英語の L1 習得を調査した Shirai & Andersen (1995) では、幼児が触れるインプットに、進行形 (-ing) と活動動詞、過去形と到達動詞の結びつきが多いことが確認されている。そして、同様の傾向が成人同士の会話にも見られるとしている (Andersen & Shirai 1996)。こうしたインプットに触れることにより、-ing のプロトタイプ (-ing と活動動詞の結びつき) が形成される。しかしながら、日本語の場合を見てみると、Shirai & Kurono (1998) や西・白井 (2004) によって日本人同士の会話で「ている」と多く用いられるのは活動動詞より到達動詞であることが指摘されている。そうすると、インプットデータによって活動動詞と「てい」のプロトタイプは形成されないはずである。そのため、もし日本語でも活動動詞と「ている」の結びつきが確認されれば、上で見たインプットの頻度によるプロトタイプ形成とは別の説明が必要になる。菅谷 (2005) も、こうした理由から、日本語の習得は興味深いデータを提供することになると述べている。

2.4.1.2 日本語を対象としたアスペクト仮説の検証

日本語を対象としてアスペクト仮説を検証した研究には、Shirai & Kurono (1998)、三村 (1999)、Shibata (1999)、菅谷 (2002)、Shirai (2002)、Sugaya & Shirai (2004) などがある。Shirai & Kurono (1998) の調査 1 では、日本の大学で日本語を学ぶ中国語

母語話者 3 名を対象として、来日 8 か月の時点でインタビューを行い、そのデータを、Vendler (1967) の動詞分類に基づき、動詞タイプと「た」「ている」との結びつきを分析している。3 名の使用を見てみると、「た」と結びついた動詞のうち到達動詞がそれぞれ 92%、72%、69%、「ている」と結びついた動詞のうち活動動詞がそれぞれ 62%、46%、58%であり、「た」と到達動詞、「ている」と活動動詞の間に強い結びつきが確認された（表 2-4）。この結果は、それまで主にインド・ヨーロッパ語族に属する言語の習得で確認されていたアスペクト仮説が日本語においても支持されたことを示しており、アスペクト仮説の普遍性を裏付ける興味深いものであると言える。その後も、日本語を対象にアスペクト仮説を支持する研究結果が報告されている（Shirai 1995 も参照）。

表 2-4 語彙アスペクトと「た」「ている」の結びつき

(Shirai & Kurono 1998 : 259 を改変。訳は筆者による。)

	形式	状態動詞	活動動詞	達成動詞	到達動詞
学習者 C	-た	2%	6%	0%	<u>92%</u>
	-てい-	0%	<u>62%</u>	10%	29%
学習者 T	-た	3%	19%	6%	<u>72%</u>
	-てい-	0%	<u>46%</u>	7%	46%
学習者 K	-た	24%	7%	0%	<u>69%</u>
	-てい-	7%	<u>58%</u>	0%	35%

三村 (1999) は、「ている」が表す「完了」（三村 1999 では、「パーフェクト」）の用法に焦点を当てて、その習得を調査している。初級から上級までの日本語学習者 121 名（9 割が韓国語母語話者、残り 1 割は中国語母語話者）を対象として、会話文中に入る選択肢を一つだけ選ぶ多肢選択式課題を行った。問題は現在完了、未来完了を表すものを、活動動詞（三村 1999 では「継続動詞」）で 1 問、到達動詞（三村 1999 では「瞬間動詞」）で 2 問、作成されていた。調査の結果、現在完了、未来完了ともに、活動動詞のほうが到達動詞よりも「ている」の選択率が高く、この傾向はレベルを問わず確認された。

Shibata (1999) では、英語を母語とする日本語学習者 4 名および日本語母語話者 4 名を対象に、24 枚の絵からなる絵本 “Frog, where are you?” (Mayer 1969) を用いたストーリーテリングの発話資料を分析した。学習者が「ている」と共に用いた動詞を見ると、異

なり語数の 41%が活動動詞で、48%が到達動詞であった。これは一見アスペクト仮説と一致しない結果であるが、Shibata では、述べ語数では活動動詞が 55%、到達動詞が 37%となり、アスペクト仮説と一致する結果も報告している。このことから、Shibata は算出方法（異なり語数か述べ語数か）によって結果が異なる可能性があることを指摘した。また、日本語母語話者の発話における「ている」と動詞タイプの結びつきに関して、Shirai & Kurono (1998) と比較した結果、Shirai & Kurono (1998) では到達動詞＞活動動詞であったのに対して、Shibata (1999) の述べ語数では到達動詞＜活動動詞という、異なる結果が得られた。この結果について、Shibata はタスクの違いが影響した可能性を挙げ、異なる性質を持つタスクを組み合わせで行うことの必要性を説いている。

菅谷 (2002) では、自然習得者 3 名（母語はロシア語、英語、フランス語）を対象に OPI¹⁴ インタビューを行い、動詞タイプと「た」「ている」との結びつきを調査している。3 名のレベルは OPI の結果、初級上という判定であった。分析の結果、3 名ともに到達動詞と「た」の強い結びつきが確認され、アスペクト仮説と一致する結果が得られた。しかし、「ている」については、2 名が活動動詞より到達動詞とともに使用しており、アスペクト仮説とは異なる結果となった。

Shirai (2002) は Shirai & Kurono (1998) と同じデータを用いて、「ている」の「習慣」用法に絞ってアスペクト仮説を検証するため、会話において「習慣」用法が、「た」「ている」「ていた」のどの形で用いられているかを調査した。その結果、「習慣」の意味で用いられた「た」の 70%（3 名の平均）が到達動詞であり、「ている」「ていた」で用いられていたのは活動動詞（「ている」が 66%、「ていた」が 95%で、「てい-」の形では 74%）が多かった。このように、「習慣」の用法や、先の三村 (1999) の「完了」の用法においてもアスペクト仮説と一致する結果が得られたことは、アスペクト仮説が予測する語彙アスペクトとテンス・アスペクトのマーカ―の結びつきが用法に拠らないことを示している。

母語の影響の観点からアスペクト仮説を検証した研究には、Sugaya & Shirai (2004) がある。Sugaya & Shirai は「動作の持続」に絞り、OPI で中上級と判定された日本語学習者 61 名を対象に多肢選択式テストによる調査を行った。対象者のうち 26 名は母語に進行形を持っており（英語母語話者）、残り 35 名は母語に進行形を持たない（ドイツ語やロ

¹⁴ OPI (Oral Proficiency Interview) は「一言で言えば、最長 30 分という限られた時間内の面接で、できるかぎり信頼性のある自然発話を必要最大限採集し、それを ACTFL 外国語能力規準 (speaking の部分) に照らし合わせて被験者の口頭能力を測定する評価法である」(鎌田 1996 : 203)。

シア語など)のものであった。テイル形が「動作の持続」を表す動詞タイプ3種類(活動動詞、達成動詞、瞬間活動動詞¹⁵⁾)の間に正答率の差が見られるかを検証した結果、両グループとも、活動動詞のほうが達成動詞と瞬間活動動詞より正答率が高く、アスペクト仮説を支持する結果となった。

以上のように、菅谷(2002)の自然習得者を除いて、日本語習得においても、アスペクト仮説を支持する結果が報告されている。アスペクト仮説は普遍的な現象であるとされ、これまでの研究結果から、動詞の語彙アスペクトが習得に影響を与えることは確かであると言えそうである。

2.4.2 文法アスペクトの観点からの習得研究

2.4.2.1 「動作の持続」「結果の持続」用法の習得

アスペクト仮説を検証しようとする研究は、日本語以外にも様々な言語の第二言語習得を対象に行われてきた。一方、日本国内を中心に1990年代に始まった日本語のアスペクト習得研究における中心的な関心は、「ている」の基本的な用法とされる「動作の持続」と「結果の状態」のどちらが先に習得されるのか、であった。この2つの用法の習得を扱った研究には、黒野(1995)、許(1997)、Shirai & Kurono(1998)、菅谷(2003、2004)、小山(2003)、Ishida(2004)、Sugaya & Shirai(2007)などがある。例えば、黒野(1995)は、大学の6か月の集中プログラムで日本語を学ぶ、母語が異なる17名の初級学習者を対象に、「る」「た」「ている」「ていた」それぞれの選択肢に「適格、不適格、判断できない」を選ぶ形式のテストを行った。対象者たちは来日後3か月、6か月、9か月の時点で調査に参加した。調査の結果、「動作の持続」より、「結果の状態」のほうが、習得が困難であること、「結果の状態」が正答となる文脈において、学習者は「ている」の代わりに「た」を選択する傾向にあることを明らかにした。黒野は「結果の状態」の「ている」の文脈で、学習者が「た」を選択していた理由について、「コピー機がこわれている」を例に、次のように述べている。つまり、これは「コピー機がこわれた」結果が、現在も持続しているという意味であるため、「た」で表される事象と「ている」で表される事象が連続しているこ

¹⁵ 「瞬間活動動詞(punctual activity verb)」は、Smith(1991)が提示した動詞タイプであり、Vendlerの分類では到達動詞に含まれる。「動的で瞬間的だが、限界性がないもの」(菅谷 2005: 42)であり、「ドアをノックする」「咳をする」などの例が挙げられる(例も菅谷 2005: 42より)。テイル形になると、「ドアをノックしている」「咳をしている」などの繰り返し行われる動作を表す。

とになる。そのため、「ている」が習得されていない段階においては、学習者は「コピー機がこわれた」という変化のみを、「動詞＋た」で表すと考察している。

Shirai & Kurono (1998) は、黒野 (1995) のデータを再分析し、「ている」の結果を報告している。計 3 回のテストにおける「ている」の正答率を見てみると、「動作の持続」は、それぞれ 55.9%、75.3%、69.4%であったのに対して、「結果の持続」は 29.4%、31.4%、25.9%と 3 回の調査を通して正答率の高さに差が見られた (表 2-5)。いずれも「動作の持続」の正答率が高く、「結果の状態」より先に習得が進むことが示唆された。

表 2-5 「ている」の正答率 (Shirai & Kurono 1998) (数字は%、訳は筆者による)

	1 回目	2 回目	3 回目
動作の持続	55.9	75.3	69.4
結果の状態	29.4	31.4	25.9

これらの研究は選択肢を与えての課題であったため、学習者の理解を測るという側面が強いと言える。産出型の調査を行ったものには、許 (1997)、菅谷 (2003) がある。

許 (1997) では、絵の描写タスクを用いて「動作の持続」と「結果の状態」の 2 用法の習得について、さらに文法テストを用いてその他の用法も含めた「ている」の様々な用法の習得を調査した。台湾で日本語を学ぶ中上級学習者 30 名と、日本で日本語を学ぶ中上級学習者 30 名、計 60 名の台湾人日本語学習者を対象に、タスクの絵を口頭で描写する調査を実施した¹⁶。その結果から、「動作の持続」のほうが、「結果の状態」よりも習得が容易であると報告している。この結果について、許は、各用法において正答率の高いものを見てみると、それぞれ日本語文に対応する中国語で、動作の進行を表す“在”、持続を表す“着”が用いられるものであることを指摘し、中国語からの正の転移を起こしていると述べている。一方、正答率の低いものを見てみると、日本語文に対応する中国語で、動作の完了を表す“了”が用いられるものであることを指摘し、中国語からの負の転移を起こしているとした。

また、松井 (2008) では、ロシア語を母語とする日本語学習者 16 名を対象に、「動作の

¹⁶ 学習者の習熟度の判断には、クローズテストが用いられている。文中に漢字・ひらがな・カタカナ・数字のいずれか一文字が入る空所が用意されており、文章を読んで、その空所を埋めていくという形式のものであった。

持続」と「結果の状態」の習得に関する調査を行った。調査方法は、口頭による絵の描写タスクおよび、許（1997）同様、文中に動詞を辞書形で提示し、適切な形への活用を求める文法テストであった。その結果、いずれの調査においても、「動作の持続」のほうが「結果の状態」よりも適切な使用が確認された。さらに、「結果の状態」においては、動詞のタイプによる差を報告している。ロシア語では、日本語の「結果の状態」の「ている」に相当するものの中に、①不完了体動詞一語で表すもの（「座っている」など）、②受身形にあたる被動形動詞で表すもの（「折れている」など）、そして③完了体動詞で説明的に表すもの（「落ちている」など）¹⁷の区別が存在している。絵の描写タスクにおいては、日本語母語話者が「ている」を使用した回数と、学習者が「ている」を使用した回数の割合を見ると、不完了体動詞で 80%、被動形動詞で 28.57%、完了体動詞で 27.27%と大きな差が見られた。文法テストにおいても、正答率は、不完了体で 86.7%、完了体動詞で 0～6.7%と、動詞タイプによる差が確認されている¹⁸。こうした動詞タイプによる結果の差は、許（1997）の“了”と“着”との共起可能性によるものと通ずるところがあると言える。

このほかにも、母語の影響という観点から行われた研究としては、小山（2003）も重要である。小山（2003）は、九州大学の留学生センターで日本語を学ぶ留学生 75 名（英語母語話者 25 名、中国語母語話者 25 名、韓国語母語話者 25 名）を対象に調査を行った。学習者を、日本語クラスのレベルをもとに初級後半、中級前半、中級後半に分け、「る」「た」「ている」「ていた」から正しい形式を 1 つ選ぶ 4 肢選択式課題を実施した。調査の結果、対象者の母語にかかわらず、「動作の持続」のほうが「結果の状態」より正答率が高かった。しかし、母語別に結果を見てみると、中国語母語話者の「結果の状態」の正答率が韓国語母語話者、英語母語話者に比べて低かった。どの母語話者も「結果の状態」の文脈で「ている」ではなく「た」を選択する傾向にあったが、これも特に中国語母語話者に顕著であった。

また、菅谷（2003、2004）は、学習者の母語が進行形を持つか否かが「動作の持続」と「結果の状態」の習得に影響するかという観点から調査を行っている。

菅谷（2003）は、ロシア語母語話者（進行形なし）とテルグ語母語話者¹⁹（進行形あり）

¹⁷ 例えば、日本語で「財布が落ちている」という場面において、ロシア語で「落ちる」に相当する動詞を用いて述べようとした場合、「誰かが落とした財布がそこにあります。」と表現する（松井 2008 : 74）。

¹⁸ 被動形動詞を用いた問題は含まれていなかった。

¹⁹ テルグ語（Telugu）は、「ドラヴィダ語族の言語で、インドのアーンドラ・プラデーシュ州で主に話されている（オックスフォード言語学辞典：245）。

の日本語学習者 1 名ずつを対象に、縦断的に「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況を調査した²⁰。縦断的なインタビューデータの分析の結果、ロシア語母語話者には調査開始当初から両用法の使用が同程度確認されたのに対して、テルグ語母語話者は「動作の持続」のほうが早い段階で使用が確認され、調査全体を通して見ても使用が多かった。このことから、母語の体系（進行形の有無）が結果に影響しているようにも見える。しかし、ロシア語母語話者が教室での学習経験を有さない自然習得者であったことが、この結果に影響している可能性を菅谷自身も指摘している。というのも、西・白井（2004）が報告しているように、日本語母語話者の日常会話を分析してみると、「動作の持続」と「結果の状態」の使用頻度に違いはなく、自然習得環境に身を置く学習者の場合、インプットの頻度も両用法で差がないとも考えられる。こうした要因が結果に影響した可能性も無視できない。

この結果を踏まえて、菅谷（2004）では、OPI の結果に基づき中上級と判定された 61 名の学習者を対象に文法テストを実施した。61 名のうち、35 名の母語は、ドイツ語、ロシア語、ブルガリア語で、進行形を持たないものであった（-L1 進行）。残りの 26 名は英語母語話者で進行形を持つものであった（+L1 進行）。文法テストは会話文中の空欄に入るものを「る」「た」「ている」「ていた」の中から全て選ぶというものであった。完結相非過去と完結相過去の正答数から「-L1 進行」と「+L1 進行」の両グループを上位群、下位群に分けた後、分析を行った結果、下位群では「動作の持続」が「結果の状態」より得点が有意に高かったが、上位群では用法間の差は認められなかったとしている。このことから、学習者の母語に進行形があるかないかに関わらず、「動作の持続」のほうが「結果の状態」より習得が容易であると結論付けている。そして、この結果を引き起こす要因について、菅谷は学習者が、形式と意味を一対一で対応させやすいとする「一対一の原則（One to One Principle）」（Andersen 1984）から説明を試みている。つまり、日本語においては「結果の状態」を表す形式として「た」も存在しているため、学習者は「ている」を「動作の持続」とマッピングしやすいと述べている。

では、教室における指導の際に、「ている」と「結果の状態」を意図的にマッピングさせればどうなるだろうか。Ishida（2004）は、アメリカの大学で日本語を学ぶ 4 名の学習者（英語母語話者 3 名、中国語母語話者 1 名）を対象に、日本語母語話者との 1 回 30 分の

²⁰ データ収集期間の長さは、ロシア語を母語とする学習者は 9 か月間（27 回）、テルグ語を母語とする学習者は 17 か月間（33 回）となっている（菅谷 2003：67）

会話セッションを週 2 回、計 8 セッション行った。最初の 2 セッションは事前テストを、最後の 2 セッションでは事後テストを実施し、3～6 回目のセッションで、学習者に見られた「ている」の誤用に対してリキャスト (recast²¹) を与え、その効果を検証した。結果を用法別にみると、調査開始時から「結果の状態」のほうが「動作の持続」より正用率が高いことがわかった。調査全体を通してこの傾向があったことは、表 2-6 からも見取れる。この結果について、Ishida は、日本語のクラスにおける導入順序をその要因として挙げている。調査対象者たちが受講していたクラスで使用されていたテキストでは、「結果の状態」が「動作の持続」に先んじて扱われている (それぞれ第 8 課と第 13 課で新出)。Ishida (2004) によれば、「結果の状態」が「動作の持続」より 4 か月早く導入されている。この結果は、「動作の持続」のほうが習得が容易であるとする研究が多い中で、大変興味深いものであると言える。

表 2-6 事前事後セッション 2 回ずつの両用法の正用率

(Ishida 2004 : 362、訳は筆者による)

用法	事前 1	事前 2	事後 1	事後 2
動作の持続	2/14	5/16	8/14	6/14
	14.29	31.25	57.14	42.86
結果の状態	6/15	5/10	10/10	17/19
	40.00	50.00	100.00	89.47

以上の研究は、「ている」の用法のうち、基本的な用法とされる「動作の持続」と「結果の状態」を中心に扱ったものであった。これらの用法以外の、「ている」の様々な用法の習得順序を扱った研究には、許 (1997、2000、2002、2005) の一連の研究がある。

2.4.2.2 「ている」のその他の用法の習得

許 (1997) は、台湾人日本語学習者を対象に「ている」の様々な用法の習得順序を調査した。対象者は日本と台湾における中上級レベルの台湾人日本語学習者 30 名ずつであっ

²¹ リキャストは、「自然なコミュニケーションの流れの中で、コミュニケーションを止めずに暗示的に正しい形を示す方法」(大関 2010 : 101) である。

た。調査に用いられた文法テストには、「ている」の 8 つの用法を表す文が各 3 問含まれており、与えられた動詞（辞書形）を自然だと思ふ形に書き換えるというものであった。各用法 3 問のうち 2 問以上が正しく答えられていればその用法を習得しているとして分析を行った結果、表 2-7 のような習得の難易度の階層が導き出された（許 2005 : 43-50）。

表 2-7 「ている」の習得順序（許 1997）

<div> <div>難</div> <div>↑</div> <div>↓</div> <div>易</div> </div>	経歴・経験	山下教授をご紹介します。教授は古代史の権威でこれまでにすぐれた論文をたくさん <u>発表</u> しています／ <u>なさ</u> っています／ <u>して</u> いらっしやいます。
	反実仮想	大雨が降っていなければ、今頃はみんなと <u>遊</u> んでいるだろう。
	結果の状態	「すみません。山田さんにお会いしたいんですが。」 「山田さんですか。山田さんは、15 分前から、先生の部屋に <u>行</u> っています。」
	動作の持続	「今朝、何時まで <u>寝</u> ていましたか。」
	習慣・繰返し	彼は最近毎日 <u>走</u> っている。
	形容詞的な働き	この建物はずいぶんおもしろい <u>形</u> をしていますね。
	慣用法	彼は車を 3 台も <u>持</u> っている。
	所属・職業	父は地方銀行の支店長を <u>し</u> ている。

この結果について、許は、習得の難易度が高い用法は、対応する中国語からの負の転移（「経歴・経験」、「反実仮想」、「結果の状態」）、そして、問題文に「ていた」が正答となるものが含まれていたこと（「動作の持続」）の影響を示唆している。後者については、後述するように、「ている」より「ていた」のほうが、習得が困難であるという報告があることから、少なからぬ影響が考えられ、こうした点を統制したうえでの検証が必要と言える。

さらに許（2000）は、許（1997）で得られた習得順序が、中国語母語話者に特有のものであるか、あるいは他言語を母語とする日本語学習者にも共通したものであるのかを明らかにするため、OPI の発話資料を用いて調査を行った。「ている」の分類には、許（1997）を踏まえて、新たに「ている」の下位分類を設定し、計 8 つの用法を定義している。初級、中級、上級、超級レベルの英語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者の発話資料を対象に、義務的文脈における正用のみを分析した結果、概ね共通した習得順序の存在が示唆された。許が示した「ている」の習得モデルを、学習者に見られた発話とともに以下にまとめる（表 2-8）。

表 2-8 「ている」の習得モデル（例文は、許 2000 : 76-77）

<div> <div>難</div> <div>↑</div> <div>↓</div> <div>易</div> </div>	運動効力 ²²	その話なら聞いています。 向こうで大学を卒業しています。
	状態の変化 ²³	日本の生活にも一応慣れてきています。 この問題が深刻になっています。
	結果の状態	葉っぱが全部落ちています。 ランプが壊れています。
	繰り返し	毎日テレビを見ています。 最近よく彼女と会っています。
	性状 ²⁴ （－可変性）	学校と家はけっこう離れています。 弟は母と似ています。
	性状（＋可変性）	頭が混乱しています。 この歌は最近流行っています。
	運動の持続 ²⁵	弟は香港に住んでいます。（＋長期） 両親は中国の会社で勤めています。（＋長期）
		大学院で政治を勉強しようと思っています。（－長期） 何をしているの。（－長期）

許はこの結果を、プロトタイプ理論 (Rosch 1973) を援用することによって説明している。許は「ている」における意味要素を「持続性」「現在性」「運動性」²⁶にあると考え、これらの意味要素によって「ている」の典型性が形成されているとした。つまり、3つの意味要素をすべて兼ね備えているものが、「ている」の典型性が最も高いものである。そして、最も典型性が高い用法が「運動の持続」であり、弱い「持続性」と「現在性」のみの「運動

²² 工藤 (1995) のパーフェクト性を指している。

²³ 許 (2005 : 75) では、「増えている」「多くなっている」「慣れてきている」のように、その状態が変化しつつあることを表すものを指す。語彙的に「結果の状態」との区別が難しいものがあることから設定された分類で、「どんどん増えている」は「状態の変化」、「五万人に増えている」は「結果の状態」としている。

²⁴ 「性状」は、ものの性質や状態を表し、変化の時点が明らかではないものを指す (許 2005 : 74)。

²⁵ 「＋長期」は、「勤めている」「働いている」のように、「所属・職業」を表すもの「住む」や「過ごす」などが含まれる。一方、「－長期」は、「遊ぶ」や「見る」のような一時的な動作や、工藤 (1995) が「内的情態動詞」とした、思考や感情、知覚を表す動詞などを指す (許 2005 : 74 参照)。

²⁶ これらの要素はそれぞれ「持続性－完成性」、「現在性－過去性」、「運動性－状態性」と対立関係をなしている。

効力」が「ている」の典型性が低い用法として、習得順序に説明を加えている。

2.4.2.3 「ている」と「ていた」の習得難易度に関する研究

以上の研究は、テンスが非過去（現在）の「ている」に関するものが主であった。次に、テンスが非過去の場合と過去の場合、つまり「ている」と「ていた」の習得の難易度を比較した研究をまとめる。「ている」と「ていた」を取り上げた研究には、Shirai & Kurono (1998)、許 (2002)、小山 (2003)、崔 (2009、2011、2012)、Gabriele & McClure (2011) がある。

上でも触れた Shirai & Kurono (1998) の調査 2 では、文法テストを用いて、「ていた」の習得についても調査を行っている。「ていた」の正答率は、表 2-9 にまとめるように、「動作の持続」で 29.4%、40.2%、52.9%と各回に正答率の伸びが観察されたのに対して、「結果の状態」は 30.6%、27.1%、27.1%という結果で、低い正答率のままであった。このことから、「ていた」でも、「動作の持続」のほうが「結果の状態」よりも習得されやすいことがわかる。また、「ている」の正答率と比べてみると、いずれの用法においても「ていた」のほうが「ている」よりも習得の難易度が高いことが示唆された。

表 2-9 「ていた」の正答率 (Shirai & Kurono 1998) (括弧内は「ている」の正答率)

	1 回目	2 回目	3 回目
動作の持続	29.4 (55.9)	40.2 (75.3)	52.9 (69.4)
結果の状態	30.6 (29.4)	27.1 (31.4)	27.1 (25.9)

許 (2002) では、許 (1997、2000) の「ている」の習得順序に関する結果を踏まえ、過去の要素が加わる「ていた」の習得状況の調査している。日本で学ぶ台湾人日本語学習者 49 名と、台湾で学ぶ台湾人日本語学習者を対象に、許 (1997) 同様、会話文や独話文において、動詞の辞書形を与えて、最も自然だと思ふ形に書き換えるテストを実施した。対象者の習熟度は中上級レベル²⁷とされている。調査の結果、習得順序をいくつかの階層で捉えた場合、「ていた」の習得順序は、「ている」のそれとほぼ一致しており、テンスの違い

²⁷ 習熟度の判断には、許 (1997) と同様のクローズテストを用いている。

が習得順序にまでは影響を及ぼさないとしている。しかし、それと同時に、用法の習得順序では共通していても、「ていた」の場合は、過去という要素が加わることによる認知負荷が、「ている」よりも習得を遅れさせる要因になっていると結論付けている。しかし、惜しいことに、許（2002）では、許（1997）などで自ら指摘した母語の影響に関する知見は、調査課題に反映させてはいない。具体的には、許（1997）では、課題に用いた動詞に対応する中国語の動詞において、「完了」を表す“了”が用いられるものと、「持続」を表す“着”が用いられるもので「結果の状態」用法に正答率の差が見られたが、許（2002）ではそうした動詞のタイプについては言及しておらず、「ている」の習得で観察された母語の影響が、「ていた」でも同様に見られるのかについては不明である。

Gabriele & McClure（2011）は、「た」「ている」「ていた」の習得について上級レベル²⁸の中国語母語話者 46 名を対象に調査を行った。調査に用いた課題は、提示された完結した出来事あるいは未完結の出来事が描かれた絵を見て、その場面についてのナレーションを聞く。そして、続いて提示されたテスト文を見て、「まったく言えない」から「完全に言える」までの 5 段階の選択肢のうちの一つを選択するというものであった。絵は全部で 32 枚あり、調査に用いられた動詞タイプは Vendler の達成動詞および到達動詞であった。調査の結果、「た」「ている」に関しては動詞タイプによらず正確に判断できていたが、「ていた」に関しては、完結する場面においてのみ正しく判断されており、動詞タイプでも達成動詞のほうが難易度が高くなっていた。この結果について、Gabriele & McClure は、学習者が「ている」と「ていた」を形態的に結びついたものとしてではなく、いずれもアスペクトとして認識している可能性を指摘した。つまり、「ている」は動作が進行していることを表し、「ていた」は完了を表しているとして理解しているのではないかと分析している。

以上、「ている」と「ていた」の習得について見てきたが、形態的、つまりテンス的には非過去と過去で対立するものを比較していると言える。しかしながら、(80) や (81) のように、「ている」は未来のことも表すことができる。

(80) (友達と明日の予定を話していて) 明日の 7 時ごろは夕飯を食べていると思うよ。

(81) (公園を歩いている時に) 明日にはもう葉っぱが落ちているかもしれないなあ。

²⁸ 日本の大学で学ぶ学生で、全員少なくとも 3 年間の日本滞在歴を有していた。さらに教室の内外で日常的に日本語を用いて生活をしているものとされる。加えて聴解による習熟度テストの結果を踏まえて上級レベルと判断している。

庵（2010）は日本語のテンス・アスペクトの組み合わせを、表 2-10 のようにまとめている。

表 2-10 テンスとアスペクトの組み合わせ（庵 2011：60、太枠は筆者による）

	過去	非過去（現在）	非過去（未来）
動作の持続	テイタ	テイル	テイル
結果の状態	テイタ	テイル	テイル

「ている」を用いて未来のことが表現されている場合、あるいは未来のことを表現したい場合、学習者は正しく理解、産出することができるのであろうか。この点に言及した研究としては崔（2009、2011、2012）による一連の研究が挙げられるのみである。

崔（2009）は中国語を母語とする日本語学習者 161 名を対象に、選択肢が「る」「た」「ている」「ていた」の多肢選択式課題を用いて、「動作の持続」と「結果の状態」を表す「ている」（現在）、「ていた」（過去）、「ている」（未来）の習得を調査した。調査の結果、崔は次のような習得段階があると主張した。崔の習得段階を（82）に示す。

（82）崔（2009）による習得段階

第一段階：「ている」（動作の持続）が使えない段階

第二段階：「ている」（動作の持続・現在）が使える段階

第三段階：第二段階に加えて、「ていた」（動作の持続・過去）と「ている」（動作の持続・未来）、「ている」（結果の状態・現在）が使える段階

崔は上記の習得段階を、Reichenbach (1947) の SRE 理論（S=Speech time、R=Reference time、E=Event time）を用いて説明を試みている（庵 2011、稲垣 2015 も参照）。

さらに、崔（2011）では、KY コーパスを用いて、中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者各 30 名の計 90 名という、母語が異なる日本語学習者の自然発話資料の分析を行い、崔（2012）では、中国の大学で日本語を専攻する大学 1～3 年生 179 名と日本語母語話者 55 名を対象に、イラスト付きの多肢選択式課題を行っている。崔の研究は、未来の時点における出来事も扱っている点、そして SRE 理論による説明など興味深い点が含ま

まれている。しかし、方法論的には問題がある。この点については第 3 章および第 4 章で詳述する。

2.4.3 「ている」と「ある／いる」との類義関係に注目した研究

以上、日本語のテンス・アスペクトの習得研究について、「ている（ていた）」を対象に行われてきた研究を概観してきた。「ている」の基本的な用法が「動作の持続」と「結果の状態」であることは繰り返し述べてきた。ここでは、「結果の状態」の用法について、「ている」とその他の形式とが類義関係にあると主張する研究として陳(2009)を取り上げる。

陳(2009)は、「結果の状態」の「ている」について、(83)のように存在を表す「ある／いる」を用いてしまう場面があるとして、両者が類義関係にあると主張した。

(83) (玄関で見慣れない靴を見て)

- a. お客が来ている。
- b. ?お客がいる。

陳は学習者がどのような場面で「結果の状態」の「ている」ではなく「ある／いる」を誤用としてしまうのかを調べるための調査を行った。調査は台湾における日本語学習者 120 名（日本語能力試験 3 級レベル以上）と日本語母語話者 120 名であった。提示された場面において、会話文あるいは独話文がありその中の空欄部分に自然だと思ふ発話を記入する形で調査が行われた。調査の結果、学習者と日本語母語話者で使用の傾向に違いがある場面、つまり学習者が「ある／いる」を用いて、日本語母語話者が「ている」を用いる場面の特徴として、陳は、移動を表す動詞が「ている」とともに用いられていることを指摘した。そのうえで、中国語の場合、同様の場面で移動後の存在に注目して存在を表す“有”を用いるため、負の転移となり、日本語でも存在を表す「ある／いる」を用いるとしている（庵 2010; 稲垣 2013 も参照）。「結果の状態」の「ている」について、学習者が誤用するのは「た」が多いという報告が多い中で、「移動を表す動詞＋ている」の場面で「ある／いる」を使用することを示したこの研究は、日本語のテンス・アスペクト習得研究の拡がりとも言える興味深いトピックを提供している。

2.5 研究課題

2.5.1 先行研究に残された課題

以上、第二言語習得研究における、母語の影響を探る研究、日本語と中国語のテンス・アスペクト形式の特徴および相違点、そして日本語のテンス・アスペクト習得研究について概観してきた。これまでの日本語のテンス・アスペクト習得研究における中心的なトピックは、アスペクト仮説に関するものと、「ている」の習得順序に関するものであり、多様な対象者、観点、手法からその普遍性や個別性が論じられてきた。しかしながら、「ている」の習得について、その全体像を明らかにするという点から見れば、次の点において検討すべき点が残されている。「ている」の習得を扱った研究において、「ている」が、その他の項目と対立関係をなしているという観点のもと行われたものが少ないことである。野田（2001）は、学習者がある文法項目を使えるかどうかという観点から考えた場合、習得すべきはその項目と類似する項目との「対立関係」とであると主張している。「ている」で考えた場合、例えば、学習者が「ている」を用いるべき文脈において、正しく「ている」を産出、あるいは選択できたとしても、それだけでは「ている」が習得されているかどうかを測るには不十分である。「ている」が習得されている状態とは、「ている」を使うべき文脈で産出、選択でき、「ている」を使わない文脈においては「ている」を産出、選択しない（産出、選択すべき形式を産出、選択できる）」状態であると言える。そのため、例えば、義務的文脈における「ている」の使用を見るのであれば、「ている」と対立関係にある形式を用いる文脈において、「ている」を「選択しない」かも併せて検討する必要がある。

特に、「ている」とテンス的に対立関係にある「ていた」は、その習得が困難と言われながらも、限られた数の研究しか行われていない。さらに、テンスとしては対立しているわけではないが、「ている」であれば、テンスは「非過去」であり、指し示す場面は「現在」の場合も「未来」の場合もあり得る。これまで日本語の習得研究においてテンスの異なりによる影響が扱われることが少なかったことは、菅谷（2005、2016）などのレビュー論文などでもそのタイトルが、「テンス・アスペクトの習得」ではなく、「アスペクトの習得」とされていることから窺える（長友 2002 にもテンス習得研究の手薄さを指摘する記述がある）。ここで注意が必要なのは、テンスの影響を検討した研究が、単に「研究が少ないから行う必要がある」と主張しているわけではないということである。日本語ではテンスが文法カテゴリーに属することは既に述べた。つまり、日本語では事象の時間的な位置がど

ここにあると捉えているかを表し分けなければならない、その習得は日本語の理解・産出において欠かすことができない。そしてそれが無テンス言語と言われる中国語を母語とする学習者による習得であれば、その習得過程を探ることは、日本語の第二言語習得研究の観点から見ても興味深いことと言える。この点については、稲垣（2011）も、今後のテンス・アスペクトの第二言語習得研究における重要なテーマの一つに、「ている」と「ていた」の習得難易度の違いを検討することを挙げている。

さらに、「ている」との対立関係を考えた場合、対象となる項目は、「る、た、ている、ていた」の枠組み内に留まらない。「ている」の習得については、これまでに「結果の状態」の「ている」を使用するべきところで、日本語学習者が「た」を用いる傾向があり、この傾向が中国語を母語とする日本語学習者に顕著であるとされてきた。しかし、前節では、陳（2009）による、「移動を表す動詞＋ている」を「ある／いる」との類義表現と主張する研究にも触れた。こうした「ている」との類義関係に注目した研究は、比較的最近のものであり、日本語のアスペクト習得研究の拡がりと言える。ただし、新しい主張であるが故に、主張を裏付けるものがまだ十分に検証がなされていない。具体的には、陳（2009）は、「移動を表す動詞＋ている」の場面において、中国語を母語とする日本語学習者が「ある／いる」を使用する傾向にあるのは、同様の場面において、学習者の母語である中国語でも日本語の「ある／いる」に相当する存在表現を用いるためであると結論付けている。しかし、第5章と第6章で詳述するように、陳の主張は方法論的な点から説得的とは言えない。その後、庵（2010）や稲垣（2013）によって、陳（2009）の主張の妥当性を検討する論争が展開されているが、陳以降、具体的なデータに基づく議論はなされていない。どのようなときに類義表現と捉えられるのか、そこに何らかの普遍的な要因や母語の影響などの個別的な要因が絡んでいるのかなど、仮説の域を出ておらず、明らかになっていないことは多い。主張の妥当性を探ることはもちろん、研究の成果の蓄積という点から見ても、追試（replication）あるいは部分的な追試（partial replication）などによって、さらなる調査、分析を進め、記述的妥当性、説明的妥当性を得ていく必要があると言える（追試の重要性については Gass 2013; 村上 2010 など）。

2.5.2 本研究の課題

これら先行研究の問題点を踏まえて、本研究では、「ている」と関連する次の問題に焦点

を絞って、日本語のテンス・アスペクト習得について、問題の在処を探っていく。本研究における研究課題は以下の通りである。

(研究課題 1) 中国語を母語とする日本語学習者は、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

(研究課題 2) 中国語を母語とする日本語学習者は、「ている」「た」「ある／いる」の使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

研究課題 1 については、第 3 章および第 4 章で多肢選択式課題を用いて「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けに関する調査を行い、学習者による使い分けの実態を明らかにし、母語がどのように影響しているのか検討する。

研究課題 2 については、まず第 5 章で、日本語と中国語それぞれの母語話者を対象に、空欄補充課題を用いて、同一場面における日本語と中国語の表現様式を比較対照する。その結果をベースラインとして、第 6 章で行う中国語を母語とする日本語学習者への調査の結果を、母語がどのように影響しているのかという観点から検討する。

第3章

「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け —調査紙の作成と妥当性の検討—

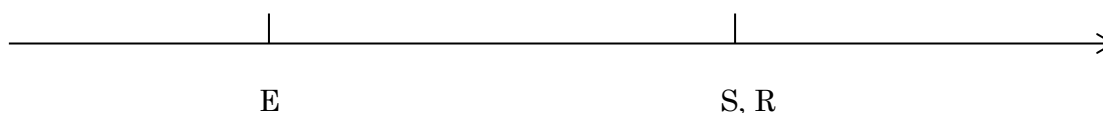
第二言語としての日本語のアスペクト習得は、これまで「ている」に焦点を当てたものが多い。「ている」と「る」「た」「ていた」は、形式的にも意味的にも類似しており、学習者にとって使い分けるのが困難であると考えられる。こうした中、崔（2009）は、アスペクト習得におけるテンスの影響を考慮して、「現在」「過去」「未来」の異なる時点における「動作の持続」と「結果の状態」の用法の習得難易度を提示したという点で重要な研究である。それと同時に、崔（2009）の研究で注目し値する点は、調査によって得られた「動作の持続」と「結果の状態」両用法の習得段階結果に対して、記号論的な観点から説明を加えようとした点である。長友（1998）では、日本語の第二言語習得研究における、説明的妥当性の必要性、つまりなぜそのような現象が起こるのかを説明する理論やモデルの必要性を述べているが、崔（2009）は、説明的妥当性まで踏み込もうとした研究である。崔が援用した、Reichenbach（1947）のSRE理論は、テンス・アスペクトの意味をS（発話時、Speech time）、R（参照時、Reference time）、E（出来事時、Event time）の3点によって記述する。個別言語の枠を超えて使用される、汎用性の高い記号論的手法を取り入れることで、崔（2009）は、現象の記述や習得段階の提示に留まらない、説明的なレベルにまで踏み込んだものとなっている。しかし、崔によるSRE理論を用いた説明が妥当なものであるかということ、そこには疑問が残る。

本章では、崔（2009）が「現在」「過去」「未来」の時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得順序を説明するのに用いたReichenbach（1947）のSRE理論の概要をまとめる。その後、この手法を用いて学習者のテンス・アスペクトの習得状況を扱った研究をまとめ、本研究で用いる調査紙について述べる。そして、調査紙の妥当性を測るため、日本語母語話者および、中国語を母語とする日本語学習者に対して予備調査を行う。

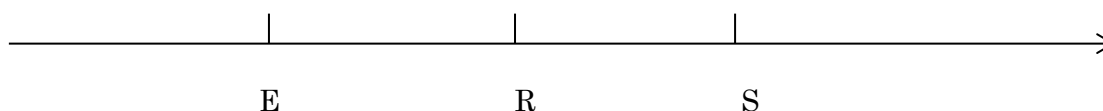
3.1 Reichenbach の SRE 理論

Reichenbach (1947) は、テンス・アスペクト、特にテンスの異なった意味を、S (発話時、Speech time)、R (参照時、Reference time)、E (出来事時、Event time) の3点の組み合わせにより説明可能であるとした。

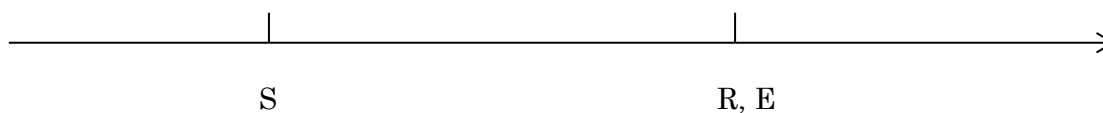
(1) I have seen John. (E·S=R²⁹)



(2) I had seen John. (E·R·S)



(3) I shall have seen John. (S·R=E)



例における S (発話時) は、いずれも現在の時点を示し、E (出来事時) は「ジョンに会う」というひとまとまりの事象を指す。「ジョンに会う」という事象が起こり、それを現在という時点において言及している。一方、次の例では、S と E の位置関係は同様であるが、発話時より前、つまり過去のある時点における出来事として述べている。

3つの点を用いるということは、それぞれの組み合わせ (S と R、R と E、S と E) が何を表しているのかを説明する必要がある。曾我 (1993) や Smith & Erbaugh (2005) によれば、S と R の関係は、テンスを表す。つまり、S と R が同時 (S=R) か、R が S より後であれば (S·R)、非過去を表す。そして、S が R より後であれば (R·S)、過去を表す。一方、R と E の関係は、アスペクトに関わる。R と E が同時 (R=E) であれば

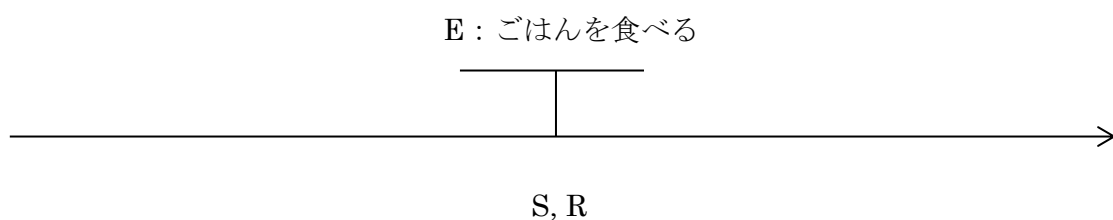
²⁹ 時間軸上において、例えば、「S·E」は、S が E に先行することを表し、「S=E」は S と E が同時であることを表す。

ば未完了を表し、E が R より先 (E・R) であれば完了を表す。最後に、S と E の関係は、「時間の流れの中の歴史的事実として存在するかどうか」(曾我 1993 : 48) を表す。つまり、E が S より前であれば、それは歴史的事実として真であり、同時であれば、事実としてまさに展開している最中にある。また E が S より後であれば、それはまだ事実としては存在していないということになる。

SRE 理論を用いて、日本語のテンス・アスペクトを表すとどのようなになるだろうか。

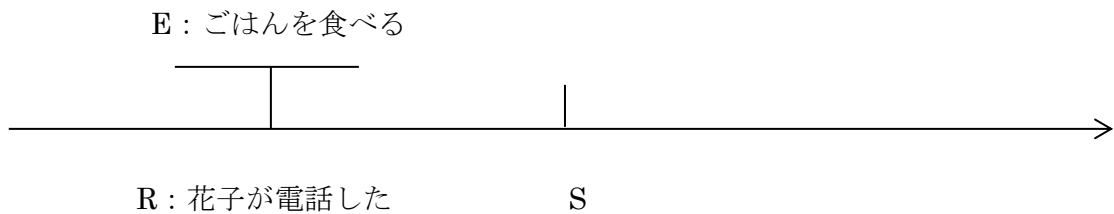
「太郎はご飯を食べている」の場合、発話時 (S) は当然、「いま」である。そして、「ご飯を食べる」という時間の幅を持つ出来事 (E) があり、「動作の持続」を表していると言うことは、幅のある出来事のどこかの段階における状態に言及しており、その点は発話時と一致している (R)。発話時と参照時は同時であり、 $S=R$ と表記できる。さらに、両者は幅のある出来事に含まれているため、 $S=R \subset E$ と表記できる。

(4) 太郎はご飯を食べている。(S=R ⊂ E)



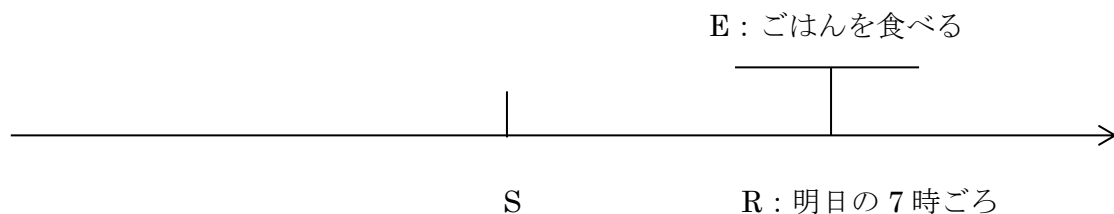
指し示す時点が過去になった場合、「太郎はご飯を食べる」という幅のある出来事のあの段階に言及しているのが、発話時以前 (例えば、「花子が電話したとき」など) となる。「花子が電話した」時点 (R) において、「太郎がご飯を食べる」という幅のある出来事 (E) の一段階が認識されたため、上の例同様、やはり、R は E に含まれている ($R \subset E$)。そして、それらは発話時である現在から見て、過去 (R・S) のことであり、SRE で表記すると、 $R \subset E \cdot S$ となる。

(5) (花子が電話したとき) 太郎はご飯を食べていた。(R \subset E-S)



指し示す時点が未来になっても、基本的には同じ考え方である。例えば「明日の 7 時ごろ」という未来の時点 (R) における、「太郎がご飯を食べる」という幅のある出来事 (E) の一段階を認識することを述べる場合、やはり、R は E に含まれている (R \subset E)。そして、それらは発話時である現在から見て、未来 (明日の 7 時ごろ) のことであり、SRE で表記すると、S-R \subset E となる。

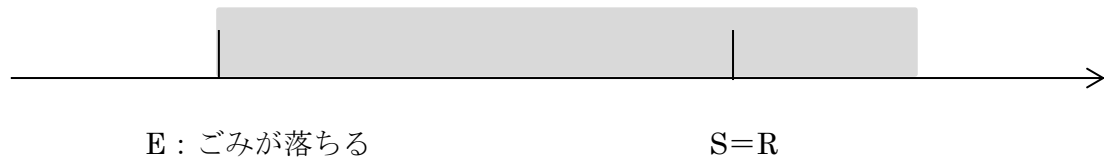
(6) (明日の 7 時ごろ) 太郎はご飯を食べている (だろう)。(S-R \subset E)



続いて、「ている」のもう一つの基本的な用法である「結果の状態」はどのように SRE で表記するかをまとめる。「結果の状態」は、変化動詞が「ている」と共起して、その変化後の状態に言及する。「結果の状態」における、出来事が起こった時点 (E) は、「変化が起こった時点」を指す。R は、E の時点に起った変化の結果として残っている、なんらかの状態 (ごみが存在している状態³⁰) を認識した点である。

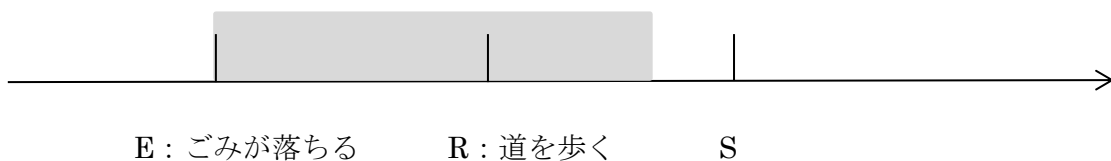
³⁰ 先行研究において、「結果の状態」を図式するにあたって、本論文で提示する図のような網掛けを用いてはいない。参照時において認識するものが「動作の持続」では動きのあるものであるのに対して、「結果の状態」では動きのないものであり、それを視覚的に明示するために網掛けで表示している。

(7) ごみが落ちている。(E-S=R)



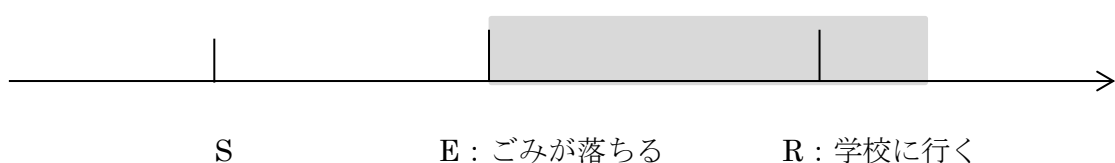
発話時 (S) は「いま、現在」である。そして、「ごみが落ちる」という出来事 (変化) (E) は発話時以前に起っている (E-S)。そして、「ごみが落ちた結果として、そこにごみがあること (つまり、「ごみが落ちている」) 状態」を認識した時点 (R) が、発話時 (S) と一致している (S=R)。よって、SRE では E-S=R と表記される。続いて、過去における「結果の状態」の例を見てみる。

(8) さっき道を歩いているとき、ごみが落ちていた。(E-R-S)



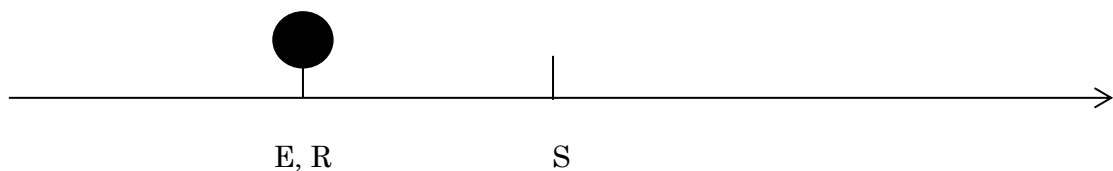
「ごみが落ちている」ことを認識した時点 (R) が、発話時 (S) から見て過去である場合には、R-S となる。さらに、「ごみが落ちる」という出来事 (E) は、さらに時間を遡った時点に生じているため、E-R-S と表記される。未来の場合になると、発話時 (S) から見て、未来の時点において、当該の出来事 (E) (「ごみが落ちる」) が生じ、さらにその後、「ごみが落ちた結果、そこにある (つまり、「落ちている」) 状態」を認識する (R)。そのため、S-E-R となる。

(9) 明日、学校に行くとき、(また) ごみが落ちている (だろう)。(S-E-R)

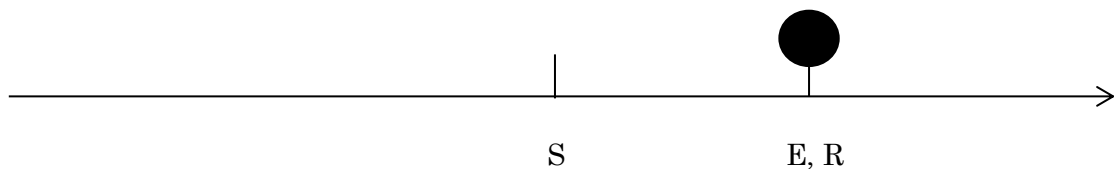


以上、現在、過去、未来の異なる時点における「ている」の2つの用法「動作の持続」「結果の状態」のSRE理論による表記を確認した。これらは、継続相を表すものであり、出来事あるいは動作、または変化の結果としての状態が広がりを持ったものである。では、完結相、つまり出来事や動作をまるごと捉えた場合、SREではどのように表記すればよいだろうか。稲垣（2015）では、ひとまとまりの出来事を点的に「●」と表記して、広がりのある、線的な出来事「—」と区別している。本研究でも、図式する場合に、稲垣（2015）のこの表記に倣う（例文（10）（11）は稲垣 2015 より）。

（10）太郎は（1時ごろ）ご飯を食べた。（ $E=R-S$ ）



（11）太郎は（1時ごろ）ご飯を食べる。（ $S \cdot E=R$ ）



以上をまとめると、本研究で扱う日本語のテンス・アスペクト形式、「る」「た」「ている」「ていた」は次のようにSREで表記することができる。

表 3-1 「る」「た」「ている」「ていた」の SRE 表示

アスペクト	テンス	形式	SRE
継続相 (動作の持続)	非過去 (現在)	ている	$S=R \subset E$
	過去	ていた	$R \subset E-S$
	非過去 (未来)	ている	$S \cdot R \subset E$
継続相 (結果の状態)	非過去 (現在)	ている	$E-S=R$
	過去	ていた	$E \cdot R-S$
	非過去 (未来)	ている	$S \cdot E-R$
完結相	非過去 (未来)	る	$S \cdot E=R$
	過去	た	$E=R \cdot S$

3.2 崔 (2009、2011、2012)

この SRE 理論を用いて、崔 (2009) は中国語母語話者の「ている」の習得段階の説明を試みた。改めて崔 (2009) の調査概要および SRE 理論からの考察をまとめる。

崔 (2009) は、中国語を母語とする日本語学習者 161 名を対象に、「ている」の 2 つの用法 (「動作の持続」と「結果の状態」) の習得について、「る」「た」「ている」「ていた」から一つを選ぶ多肢選択式課題を行った。多肢選択式課題の成績によって学習者を下位群、中位群、上位群に分け、「現在」「過去」「未来」における「動作の持続」と「結果の状態」の正答率をまとめたのが、表 3-2 である。

表 3-2 「動作の持続」「結果の状態」の習得状況（崔 2009 : 86）

用法	SRE 表示	形式	テンス ³¹	下位群	中位群	上位群
動作の 持続	S=E=R	テイル	現在	32.0%	86.3%	100%
	E=R-S	テイタ	過去	14.0%	54.0%	84.8%
	S-E=R	テイル	未来	26.0%	40.3%	87.5%
結果の 状態	E-S=R	テイル	現在	20.0%	39.8%	82.1%
	E-R-S	テイタ	過去	13.3%	31.2%	42.9%
	S-E-R	テイル	未来	24.0%	14.0%	48.8%

崔は、正答率が 80%以上のものを習得したとみなし、分析を行っている。その結果、下位群においては、習得されている形式はなく、いずれも低い正答率になっている。そして中位群において「現在」の「動作の持続」が習得され、上位群になると「過去」「未来」の「動作の持続」、「現在」の「結果の状態」へと習得が進んでいる。崔はこの結果を、「R 時の認識」という観点から考察している。まず、下位群において、正答である「ている」「ていた」の代わりに選択された選択肢を見てみると、完結相の「る」「た」が多くなっていた。崔は「る」「た」は S と E によって表示されるとして、これを「ている」が習得される前段階に設定した。続いて、中位群になると、「動作の持続」（現在）の正答率が 86.3%となっているが、依然として「る」「た」の選択が多い。「動作の持続」（現在）は SRE では S=E=R と、3 点が一致した形で表示がされる。この段階では R が認識されるようになるが、それは S、E の 2 点と一致する場合に限られる。上位群になると、「動作の持続」（「過去」および「未来」）と、「結果の状態」（現在）の正答率が 80%を超えている。この段階になると、S あるいは E、いずれかと一致していれば R が認識されるようになる。しかし、R が S、E いずれとも一致しないもの、つまり「結果の状態」（「過去」および「未来」）はさらに先の段階となる。崔（2009）の「R 時の認識」からの習得段階は、(12) のようにまとめられる。

(12) 崔（2009）による習得段階の提案

³¹ テンスは、出来事が発話時を基準として、過去、現在、未来のどこに位置するのかを述語の形式によって表す文法カテゴリーであるため、同様にル形で表される現在と未来は「非過去」である。よって、崔（2009）がテンスの違いを現在、過去、未来としているのは用語の使い方として不適切である。

- 段階 1 S と E のみにより出来事を捉える。過去・非過去の区別のみ ($E \cdot S, E = S, S \cdot E$)。R が認識されないため、アスペクトは存在しない。
- 段階 2 R が S、E の両方と一致する場合のみ、R の認識が可能。現在の「動作の持続」($S = R \subset E$) が習得される。
- 段階 3 R が E または S (または両方) と一致する場合のみ、R の認識が可能。過去と未来の「動作の持続」($R \subset E \cdot S, S \cdot R \subset E$) と現在の「結果の状態」($E \cdot R = S$) が習得される。

さらに、崔 (2011) では、KY コーパスにおける中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者各 30 名の計 90 名の自然発話資料をもとに、テンス・アスペクト形式の正用数、正用率を調査している。その結果、R 時が、S と E が両方と一致しているもの ($S = R = E$: 「現在」の「動作の持続」) から、S と E いずれかと一致しているもの ($E = R \cdot S$: 「過去」の「動作の持続」、 $S \cdot E = R$: 「未来」の「動作の持続」、 $E \cdot S = R$: 「現在」の「結果の状態」) へと正用率が上昇している。しかし、自然発話を資料としているためか、「ていた」や非過去 (未来) の「ている」の使用は少なかった。

また、崔 (2012) では、中国の大学で日本語を専攻する大学 1~3 年生 179 名と日本語母語話者 55 名を対象に、イラスト付きの多肢選択式課題を行った。レベル分けテストの結果をもとに、学習者を、下位群 45 名、中位群 42 名、上位群 40 名の 3 群に分けた。調査の結果、やはり、第 1 段階においては S と E のみにより事態を捉える (テンスのみ)。また同時に、SRE の 3 点から事象を捉えようとするが、R を S や E と区別することができない (「現在」の「動作の持続」) 習熟度が上がるにつれて、R と E を S から区別できるようになる (「過去」「未来」の「動作の持続」)。さらに習熟度が上がると、R を S あるいは E と区別できるようになる (「現在」の「結果の状態」)。

3.3 稲垣 (2015)

この崔による習得段階の提案における問題点を指摘したのが稲垣 (2015) である。稲垣は、崔の SRE 理論からの説明を、母語の転移の観点から不自然であるとした。崔は、習得の第 1 段階 (下位群の結果) では、「動作の持続」「結果の状態」いずれの用法も習得されていないとして、アスペクトがない段階とした。つまり、テンスだけあり、発話

時と出来事時の前後関係のみで事態を捉えているとしている。しかし、中国語は繰り返し述べているように、文法カテゴリーとしてのテンスを持たない。稲垣はこの点について以下のように述べている。

つまり、習得の初期に、母語に存在しないテンスのみ存在し、母語に存在するアスペクトは存在しないとされている。これは、第二言語習得の初期段階に、母語にないものが習得されていて、逆に母語にあるものが習得されていないということになり、概念上不自然な説明であると言わざるを得ない。(pp.55-56)

そのうえで、稲垣(2015)では、崔(2009)の調査結果を、学習者の母語である中国語からの転移の観点から再解釈し、SRE理論による代案を提示している。稲垣の代案では、中国語を母語とする日本語学習者は、習得の初期段階において、母語にあるアスペクトのみで事態を捉えようとする。つまり、中国語におけるデフォルトのEとRのみの段階である³²。アスペクトのみということは、事態の捉え方は、完了か未完了の区別のみとなる。出来事(E)をRの時点において近視眼的に捉え、運動の一部分を言語化するのであれば、未完了(R⊂E、“在”“着”)となる。逆に、出来事を遠視眼的に捉え、運動全体を取り出すのであれば、完了³³(R=E、“了”)となる。また、習得の初期段階(第1段階)で、「ている」が習得されていない点について、稲垣は、「テイルという形式が学習者の中間言語に存在しないため」(p.56)とした。よって、この段階は「る」「た」のみの段階となるはずであるが、稲垣の代案では、回答の際に学習者が、非過去(未来)=ル形、過去=タ形というストラテジーを使用した可能性を指摘している。そ

³² テンスがないということは、SRE理論の観点から言えば、SとRの関係は問題にならないということである。Smith & Erbaugh (2005)では次のように述べている。

In tensed languages such as English, tense codes the relation between Reference Time and Speech Time. English forces a choice between present and past present tense for states (The Great Wall is/was impressive). Mandarin does not. What differentiates Mandarin from a tensed language, then, is that the grammatical forms relevant to temporal location do not relate Reference Time to Speech Time. (p.720)

(筆者訳：英語のようにテンスを有する言語では、テンスは参照時と発話時との関係を表す。英語では、状態を表すために現在と過去とを選択しなければならない。中国語ではそれが無い。中国語がテンスを有する言語と異なるのは、時間的位置に関する文法形式が、参照時と発話時に関与しないということである。)

³³ 井上・生越・木村(2002)が述べているように、「中国語における「完了」とは、「<閉じた形>を持った事象が現実とその形をとって時間軸上にある」ということである。「事象が参照時(haveが持つ時)と参照時以前の二つの時間領域にまたがって存在する」ことを表す英語の完了構文とは性質が異なる」(p.148)と言える。

の根拠として、テンスのない中国語においても、時を表す副詞などによって過去・非過去の概念を表し分けていることを挙げている。

さらに、「結果の状態」のテイルの文脈で、「現在」「過去」「未来」にかかわらずタ形の選択が多い理由として、稲垣は次の2点を挙げている。中国語の完了マーカ―“了”が変化動詞と結びつきやすいこと、日本語で「結果の状態」の「ている」を用いる場面で中国語は“了”を用いることが多いことである(例:「靴下が破れている」「袜子破了」)。

表 3-3 「結果の状態」における学習者の選択 (崔 2009 : 88 を改変、数字は%)

テンス	形式	下位群	中位群	上位群
過去	タ	52.0	63.4	45.2
	テイタ	13.3	31.2	42.9
現在	タ	33.3	34.4	16.7
	テイル	20.0	39.8	82.1
未来	ル	25.3	30.1	13.1
	タ	37.3	37.6	28.6
	テイル	24.0	14.0	48.8

以上をまとめて、「ている」の習得段階として稲垣 (2015) が提示したものが、表 3-4 である。

表 3-4 稲垣 (2015) による代案 (p.57 を一部改変)

段階	特徴	SRE	動作の持続		結果の状態	
			テンス	誤用	テンス	誤用
1	E と R のみにより出来事を捉える。テイルの形式未習得。過去=タ、非過去=ルの選択ストラテジー。変化動詞とタの結びつき。	R ⊂ E	×現在 ×過去 ×未来	ル タ ル	×現在 ×過去 ×未来	タ タ タ
2	E と R のみにより出来事を捉える。テイルの形式習得（プロトタイプ「動作の持続」(現在) の習得)。過去=タ、非過去=ルの選択ストラテジー。変化動詞とタの結びつき。	R ⊂ E	○現在 ×過去 ×未来	-- タ ル	×現在 ×過去 ×未来	タ タ タ
3	S が認識される。S、R、E により出来事を捉えるが、3 点のうち 1 点以上一致する場合に限られる。変化動詞とタの結びつき。	R ⊂ E=S R ⊂ E・S S・R ⊂ E E・R=S	○現在 ○過去 ○未来	-- -- --	○現在 ×過去 ×未来	-- タ タ
4	S、R、E により出来事を捉える。3 点を独立して認識できる。	R ⊂ E=S R ⊂ E・S S・R ⊂ E E・R=S E・R・S S・E・R	○現在 ○過去 ○未来	-- -- --	○現在 ○過去 ○未来	-- -- --

(注) ○: 習得 (80%以上の正答率)、×: 未習得 (80%未満の正答率)

稲垣（2015）は、崔の SRE 理論による説明に対して、母語の転移の観点から問題提起し、再解釈を試みた点で重要である。しかし、次の 3 点については依然、課題が残されたままである。

一つ目に、稲垣（2015）では崔同様、完結相の「る」「た」が「ている」の前段階と位置付けているが、崔（2009）を再解釈したものであるため、実際の「る」「た」に関する調査にもとづくものではない。義務的文脈においてどのような語形を選択するかについて調査して検証する必要がある。

二つ目に、稲垣が再解釈を加えた崔のデータには、習得段階を見るうえで、主張の信頼性にかかわる重大な問題が含まれている。それは、稲垣自身も注釈（p.51）において指摘している、崔による学習者の習熟度の分け方である。崔（2009）では、学習者の習熟度を、調査課題の得点をもとに下位群、中位群、上位群に分けている。調査課題の得点を低い順にグループをまとめたのでは、自然と習熟度の上昇とともに調査課題の得点が上がっていくのは当然と言える。しかし、学習者の習得過程において、ある段階でその前の段階より誤用が増すこともあり得る。よって、調査課題の得点から学習者の習熟度を判断するのは適切ではない。言い換えれば、崔による下位群、中位群、上位群のデータは、習熟度別の習得状況を反映したものとは言えない。そのため、崔（2009）の結果はもちろん、崔のデータをもとに SRE 理論から結果に再解釈を与えた稲垣の主張が妥当であるかどうか判断できない。そして、「過去」と「未来」に関しては稲垣においても差がないとしているが、この点についても、客観的なテストを用いて分けられた複数の学習者群を対象に検討する余地がある。

三つ目に、崔のデータにも現れているように（崔 2009：85）、中国語を母語とする日本語学習者に顕著な誤用として「結果の状態」の「ている」を用いるところでタ形を用いる誤用がある（例、あつ、靴下が破れた。）（張 2001：141；小山 2003 など参照）。このタイプの誤用は、中国語では対応する状況で完了マーカー“了”を用いるからであると指摘されているが（許 2005；張 2001；小山 2003）、崔の習得段階にはこのような母語の影響がまったく考慮されていない。また、「結果の状態」で、崔が調査に用いた動詞を見てみると、対応する中国語の動詞の中に性質の異なる二つのアスペクトマーカーが接続可能なものと、そうではないものが含まれている（詳細は後述）。こうした学習者の母語に見られる特徴は結果に影響していないのだろうか。

前章でまとめたように、中国語にはアスペクトを表すマーカーが豊富に存在する。(13)

は副詞の“(正) 在”を用いて「動作の持続」を表している。(14) と (15) は、“了”が完了を表している。“了”は通常、日本語の「た」に対応することが多いが、変化を表す動詞の場合、“了”と結びついて日本語では「結果の状態」の「ている」に訳す方が自然な場合もある(張 2001; 庵 2010; 稲垣 2013)。さらに、中国語には動詞に後接して行為や変化の持続を表す“着”が存在する。(16) は雪が降り続いていることを表している。また、一部の動詞は、“着”が付加されることで、動作が完了したあとの状態を表す。(17) ではドアが開いて、開いたままの状態であることを表している。(17) は“了”が後接すれば、ドアが開くという変化を表す。このように、動詞によっては“了”と“着”の両方と接続が可能である。

(13) 雨 (正) 在 下。

雨 (ちょうど) ZAI 降る

(雨が(ちょうど) 降っている。)

(14) 我 看 了 这 本 书。

私 読む LE この 本

(この本を読んだ。)

(15) 钱包 掉 了。

財布 落ちる LE

(財布が落ちた／落ちている。)

(16) 外头 下 着 大雪。

外 降る ZHE 大雪

(外は大雪が降っている。)

(17) 门 开 了／着 呢。

門 開く - LE/ZHE 文末助詞

(ドアが開いた／開いている。)

しかし、崔(2009)が調査に用いた動詞には、対応する中国語の動詞において日本語の「た」に対応する“了”しか取れないもの(“死”、“掉”、“结婚”)と、“了”に加えて、日本語の「ている」に対応する“着”とも接続できるもの(“开”)がある。母語の影響を考えると両者は区別して考える必要がある。

稲垣（2015）も、母語の転移の観点から「ている」の習得段階について考察しているが、「結果の状態」用法について触れる際、動詞のタイプによる差異については特に触れていない。日本語においては「ている」と共起して「結果の状態」を示すという点で共通であっても、中国語では異なる振る舞い（異なるアスペクトマーカ－との共起可否）を見せる。本論文の研究課題であるテンス・アスペクトの習得における母語の影響を探るためには、この点も考慮した項目の作成や分析がなされるべきである。

3.4 研究課題

以上、先行研究において残された課題 3 点を踏まえて、第 3 章および第 4 章で取り組む研究課題を、以下のように設定する。

- 研究課題 1 義務的文脈において、「る」「た」を正しく選択することができるか。
- 研究課題 2 「現在」「過去」「未来」におけるテイル形（「動作の持続」と「結果の状態」）に習得難易度の差があるか。
- 研究課題 3 対応する中国語の動詞のタイプによる「結果の状態」の難易度の差が見られるか。

研究課題 1 では、まず中国語を母語とする日本語学習者による「る」「た」の習得状況を明らかにする。先行研究においては「ている」の前段階に習得されるとされる「る」「た」であるが、義務的文脈における選択などは見られていない。そのため「る」「た」が正答となる項目を設置して検証を行う。

研究課題 2 では、中国語を母語とする日本語学習者による、「現在」「過去」「未来」の時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況を明らかにする。先行研究では、いずれの用法においても、正答率は「現在」が最も高く、次いで「過去」「未来」の順となるとしている。しかし、上述のように、習得段階を導くために重要な学習者の習熟度分けに重大な問題があるため、再検証を試みる。

研究課題 3 では、中国語を母語とする日本語学習者による、「結果の状態」用法における中国語からの影響を明らかにする。具体的には、対応する中国語における動詞タイプの差（“了”と“着”との共起可否）、日本語の習得の際にも影響しているのかを明ら

かにする。

3.5 調査紙の作成

以上の研究課題を明らかにするためには、当然ながら、妥当かつ信頼できる調査課題が必要になる。本節では、調査に用いた調査紙の概要について述べ、続いて、第4章の調査に先駆けて行った、予備調査の結果を報告する。

調査には、「る」「た」「ている」「ていた」が選択肢の多肢選択式課題を用いた。選択肢に用いた動詞は、(18)に示す12個である。研究課題で示したように、「る」「た」の習得状況を明らかにする必要があるため、同一の動詞で1)「る」が正解となる問題、2)「た」が正解となる問題、3)「現在」の文脈において「ている」が正解となる問題、4)「未来」の文脈において「ている」が正解となる問題、5)「ていた」が正解となる問題を用意した。よって、同一の動詞が、5つの異なる問題で使用されていることになる。動詞は12個あるため、計60問となる。問題文は、崔(2009)の調査問題を踏襲して作成した。さらにダミー問題として、使役や受身の形式を問う問題16問を加えて、計76問で調査を行った。12個の動詞は、テイル形が「動作の持続」「結果の状態」いずれを表すかによって以下のように分類できる(下線のあるものは崔と同様の動詞)。

(18) 調査に用いた動詞

a. テイル形が「動作の持続」を表す動詞

食べる、寝る、作る、勉強する

b. テイル形が「結果の状態」を表す動詞

死ぬ、落ちる、壊れる、結婚する、開く、停まる、(電気が)つく、座る

さらに、本研究では対応する中国語の動詞と中国語のアスペクトマーカ―“了”“着”との結びつきによる差を検証することを目的としている。この観点からテイル形が「結果の状態」を表す動詞をさらに二つに分類した。(19)に示した対応する中国語の動詞が“了”とだけ接続可能なもの(以下、タイプ1)と、(20)に示した“了”“着”いずれとも接続可能なもの(以下、タイプ2)の2種類である。(19)(20)の括弧内は対応する中国語の動詞を表している。

(19) タイプ 1：死ぬ（死）、落ちる（掉）、壊れる（坏）、結婚する（结婚）

(20) タイプ 2：開く（开）、停まる（停）、（電気が）付く（亮）、座る（坐）

調査問題の内訳を表 3-5 に、調査に用いた項目例を表 3-6 に示す（調査に用いた全問題は、付録①および付録②を参照）。問題はまずその状況を説明する文を与え、続く会話中に空所を設けた。すべての漢字にはルビを付した。

表 3-5 調査問題の内訳

アスペクト	テンス	形式	問題数（問）
完結相	非過去	る	12
	過去	た	12
継続相 (動作の持続)	非過去（現在）	ている	4
	過去	ていた	4
	非過去（未来）	ている	4
継続相 (結果の状態) タイプ 1	非過去（現在）	ている	4
	過去	ていた	4
	非過去（未来）	ている	4
継続相 (結果の状態) タイプ 2	非過去（現在）	ている	4
	過去	ていた	4
	非過去（未来）	ている	4
計			60

調査紙には全 76 問を均等に、各 38 問の A 問題と B 問題に分け、各問題間で項目を無作為に並べた。A 問題と B 問題の間には休憩時間を設けることとした。回答の際の順序効果をなくすため、対象者の半分には A 問題を先に、残りの半分には B 問題を先に回答してもらった。回答に際して、制限時間は設けなかった。

表 3-6 調査に用いた項目例

項目例 a ル形

パクさんは、朝、スーパーに買い物にきました。しかし…。

パク：あれ？おかしいなあ。ここに「9時開店」って書いてあるけど…。(近くの人に)
すみません、このお店、何時に_____か？

近くの人：ああ、今日は水曜日だから、休みですよ。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

項目例 b タ形

田中さんはレストランでお金を払っています。パクさんから電話です。

パク：もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか？

田中：ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。

パク：そうですか。わかりました。また今度行きましょう。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

項目例 c 動作の持続（現在）

田中さんは友達の家で電話をしました。すると、友達の子供が電話に出ました。

田中：もしもし、お母さんいる？

友達の子供：うん、台所でご飯を_____。ちょっと待ってください。お母さんに代わります。

- A. 作ります B. 作りました C. 作っています D. 作っていました

項目例 d 動作の持続（過去）

昨日パクさんはパーティーに行きました。翌日、パクさんはリーさんと話しています。

パク：昨日はどうしてパーティーに来なかったんですか？

リー：今日の漢字のテストがあるから、家でずっと_____。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

項目例 e 動作の持続（未来）

田中さんは食事会に遅刻しそうです。リーさんに電話しています。

田中：もしもし。すみません、アルバイトが遅くなって…。今から移動しますから、ちょっと遅くなりそうです。

リー：そうですか。じゃあ、先に_____から、気をつけて来てくださいね。

- A. 食べます B. 食べました C. 食べています D. 食べていました

項目例 f 結果の状態タイプ 1（現在）

リーさんとパクさんは買い物をしています。リーさんは自分の腕時計を見えています。

リー：もう 12 時だよ。そろそろ昼ご飯を食べようか。

パク：えっ？ 12 時？ 違いますよ。まだ 11 時ですよ。その時計は_____ね。

- A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

項目例 g 結果の状態タイプ 1（過去）

今、桜が満開です。田中さんはリーさんと桜について話しています。

リー：今年は桜が咲くのが早かったですね。

田中：そうですね。昨日家の近くの公園に行ったら、もう花びらが少し地面に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

項目例 h 結果の状態タイプ 1（未来）

田中さんとリーさんが、寮の玄関を掃除しています。

田中：だいぶ綺麗になりましたね。

リー：そうですね。でも、みんなが毎日使いますから、明日はまたごみが出でしょうね。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

項目例 i 結果の状態タイプ 2 (現在)

お母さんと子供が自宅に向かって歩いています。

子供：あれ？うちの前に車が一台_____よ。

お母さん：お父さんのお友達の車よ。きっとお父さんに会いに来たのよ。

- A. 停まる B. 停まった C. 停まっている D. 停まっていた

項目例 j 結果の状態タイプ 2 (過去)

田中さんが会社で同僚と話しています。

田中：今朝、会社に来るとき、救急車が道の真ん中に_____。何かあったんですね。

同僚：はい、交通事故があったんですよ。私はちょうど事故を見てびっくりしました。

- A. 停まります B. 停まりました C. 停まっています D. 停まっていた

項目例 k 結果の状態タイプ 2 (未来)

田中さんはリーさんと電話で話しています。

田中：じゃあ、明日の3時にあの喫茶店で会おうね。

リー：うん。私は早く着くと思うから、先に行って、いつもの席に_____ね。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

3.6 予備調査の実施

予備調査の調査対象者は中国語を母語とする上級日本語学習者 30 名である。習熟度は、日本語能力試験 N1 を取得済みであることから上級と判断した。全員が日本の大学あるいは大学院に在籍し、日本語を用いて専門分野を学んでいる³⁴。また、統制群として日本語母語話者 30 名にも同様の調査を実施した。学習者の属性を表 3-7 に示す³⁵。

³⁴ 学習者の滞日期間は 1 年未満が 4 名、1 年以上 3 年未満が 12 名、3 年以上 5 年未満が 5 名、5 年以上が 9 名で、平均 3 年 7 か月であった。

³⁵ 日本語母語話者は、フェイスシートの記入を行っていない。

表 3-7 調査対象者の属性

対象者	総人数（名）	年齢（歳） ³⁶		
		範囲	平均	標準偏差
中国語母語話者	30	22-37	26.07	3.16

以下、予備調査の結果をまとめる。その後、本調査へ向け、調査の実施手順、および調査紙における改善点がないか確認する。

3.7 結果と考察

分析では、ダミー問題を除いた調査項目 60 問において、統制群である日本語母語話者の選択が 85%以上一致したもの 55 問を対象とした。日本語母語話者の解答の一致率が 85%を下回った 5 項目は分析対象外とした³⁷。分析対象とした 55 問全体の、日本語母語話者による一致率は 97.9%で、ほぼ一致していると言えよう。この調査課題 55 問の内的一貫性は、 $\alpha = .814$ であった。

³⁶ 協力者の 1 名は本人の希望により年齢の記入を行わなかったため、29 名の集計結果を示す。

³⁷ 統制群である日本語母語話者による回答の一致率で分析対象項目を決定する場合、どの程度の一致率で区切るかは研究によって異なっている。同じく多肢選択式課題を用いた先行研究には、黒野（1995）、許（1997）、小山（2003）、菅谷（2004）、崔（2009）などがある。それぞれ日本語母語話者の回答の一致率が高いものを分析対象としているが、黒野（1995）は 75%、許（1997）は 85%、小山（2003）は 100%、菅谷（2004）は 90%、崔（2009）は 95%のように、研究によって異なる。

表 3-8 統制群（日本語母語話者）による回答の一致度

問題	動詞	想定正解	一致人数(名)	一致率(%)	問題	動詞	想定正解	一致人数(名)	一致率(%)
A1	落ちる	C	30	100	B1	勉強する	C	30	100
A2	勉強する	D	30	100	B3	落ちる	C	27	90
A3	死ぬ	C	30	100	B4	停まる	D	30	100
A4	寝る	B	30	100	B5	座る	B	29	96.7
A5	開く	B	30	100	B6	食べる	C	29	96.7
A6	死ぬ	A	28	93.3	B7	結婚する	C	30	100
A8	寝る	D	28	93.3	B8	つく	A	26	86.7
A9	結婚する	C	30	100	B9	勉強する	A	30	100
A10	作る	A	16	53.3	B11	停まる	B	28	93.3
A12	食べる	A	18	60	B12	壊れる	C	30	100
A13	停まる	C	30	100	B13	寝る	A	30	100
A14	結婚する	A	28	93.3	B14	死ぬ	C	30	100
A16	食べる	B	26	86.7	B15	開く	A	30	100
A18	作る	D	30	100	B17	つく	D	30	100
A19	座る	D	30	100	B18	食べる	C	29	96.7
A20	壊れる	A	30	100	B19	死ぬ	B	30	100
A22	作る	B	30	100	B20	作る	C	30	100
A23	死ぬ	D	30	100	B21	つく	B	30	100
A24	壊れる	B	30	100	B23	結婚する	B	30	100
A26	座る	A	29	96.7	B24	座る	C	30	100
A27	寝る	C	30	100	B26	開く	D	30	100
A28	座る	C	29	96.7	B27	勉強する	B	29	96.7
A29	勉強する	C	29	96.7	B29	開く	C	30	100
A30	停まる	C	25	83.3	B30	結婚する	D	29	96.7
A31	寝る	C	29	96.7	B32	壊れる	D	28	93.3
A32	落ちる	D	28	93.3	B33	つく	C	20	66.7
A34	壊れる	C	30	100	B34	落ちる	A	30	100
A35	つく	C	20	66.7	B35	食べる	D	30	100
A37	開く	C	30	100	B37	作る	C	29	96.7
A38	停まる	A	29	96.7	B38	落ちる	B	30	100

分析対象外とした 5 つの問題（A10, A12, A30, A35, B33）および、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の選択率を表 3-9 に示す。

表 3-9 分析対象外とした項目および選択率（数字は%）

分析対象外（1）

夜の7時です。ちょうどお母さんが帰ってきました。

子供：お母さん、お腹すいたよ。

お母さん：はいはい、ちょっと待ってね。今ご飯を_____から。

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

	A	B	C	D
統制群	53.3	0	46.7	0
学習者	83.3	0	16.7	0

分析対象外（2）

夕飯の時間です。子供はゲームで遊んでいます。お母さんが子供を呼んでいます。

お母さん：ご飯できたわよ。

子供：はい、もう少し待って、もうすぐ終わるから。

お母さん：もう。じゃあ、先に_____わよ。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

	A	B	C	D
統制群	60.0	0	40.0	0
学習者	96.7	0	3.3	0

分析対象外（3）

社長が秘書と話しています。

社長：タクシー呼んでくれた？

秘書：はい。9時に来ると言ったので、8時55分にはタクシーが会社の玄関に_____と思います。

社長：わかった。ありがとう。

- A. 停まる B. 停まった C. 停まっている D. 停まっていた

	A	B	C	D
統制群	16.7	0	83.3	0
学習者	63.3	3.3	33.3	0

分析対象外（４）

田中さんが家の玄関でお母さんと話しています。

田中：クラスのパーティーに行ってきます。

お母さん：帰り道は暗いから気をつけてね。遅くなるときは、大通りを通って帰って来るのよ。夜7時以降は電気が_____から。

A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

	A	B	C	D
統制群	33.3	0	66.7	0
学習者	33.3	0	66.7	0

分析対象外（５）

パクさんとリーさんは、先生の研究室の前に来ました。

パク：（ドアをノックして）あれ？先生いないみたいだね。

リー：おかしいなあ。電気が_____のに。

A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

	A	B	C	D
統制群	0	0	66.7	33.3
学習者	0	3.3	93.3	3.3

分析対象とした各項目において、学習者が選択した形式の割合を表 3-10、表 3-11 に示す。以下、研究課題ごとに結果を見ていく。

表 3-10 学習者の選択語形の割合（数字は%）³⁸

アспект		テンス	形式	対象者の選択	学習者	統制群
完結相		非過去	ル	ル	96.3	96.7
				タ	1	1.3
				テイル	2.3	2
				テイタ	0.3	0
		過去	タ	ル	1.1	0
				タ	80.8	97.5
				テイル	6.7	1.9
				テイタ	11.4	0.6
継続相	動作の持続	非過去 (現在)	テイル	ル	0	0.8
				タ	0	0.8
				テイル	100	98.3
				テイタ	0	0
		過去	テイタ	ル	0	0
				タ	4.2	0
				テイル	15.8	2.5
				テイタ	80	97.5
		非過去 (未来)	テイル	ル	28.3	1.7
				タ	4.2	0
				テイル	67.5	97.5
				テイタ	0	0.8

³⁸ 網掛け部分は正答を表す。

表 3-11 学習者の選択語形の割合（続き）（数字は%）

アспект		テンス	形式	対象者の選択	学習者	統制群
継続相	結果の状態タイプⅠ	非過去 (現在)	テイル	ル	0	0
				タ	24.2	0
				テイル	69.2	100
				テイタ	6.7	0
		過去	テイタ	ル	0	0
				タ	30.8	3.3
				テイル	15.8	0.8
				テイタ	53.3	95.8
		非過去 (未来)	テイル	ル	23.3	2.5
				タ	25.0	0
				テイル	48.3	97.5
				テイタ	3.3	0
	結果の状態タイプⅡ	非過去 (現在)	テイル	ル	0	0
				タ	1.1	0
				テイル	97.8	100
				テイタ	1.1	0
		過去	テイタ	ル	0	0
				タ	3.3	0
				テイル	12.5	0
				テイタ	84.2	100
		非過去 (未来)	テイル	ル	43.3	1.7
				タ	0	0
				テイル	56.7	98.3
				テイタ	0	0

3.7.1 「る」および「た」の習得難易度

まず、「る」が正解の問題、「た」が正解の問題の正答率を図 3-1 に示す。中国語を母語とする日本語学習者の正答率は、「る」が 96.3%、「た」が 80.8%であった。

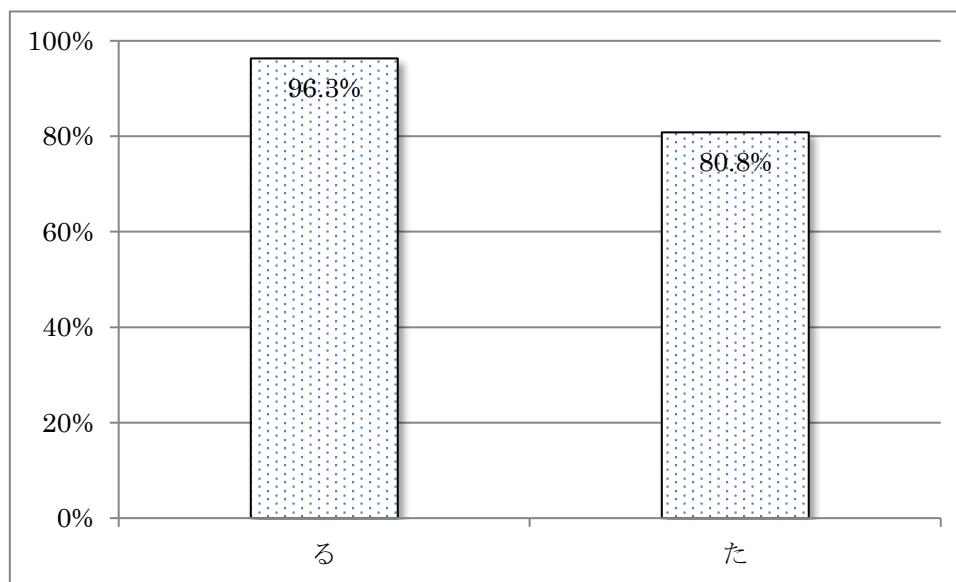


図 3-1 「る」「た」の正答率

両者の正答率について、対応のある t 検定を行った結果、「る」の正答率が有意に高かった ($t(29)=5.80, p<.001$)。表 3-10 で中国語母語話者の選択した語形を見てみると、日本語母語話者が「た」を正答としている文脈において、中国語母語話者は「ている」を 6.7%、「ていた」を 11.4%選択していることがわかる。「ている」を選択した学習者が多かった項目を (21) に示す。

(21) 日本語母語話者の多くが「た」を、学習者の多くが「ている」を選択した問題

田中さんはレストランでお金を払っています。パクさんから電話です。

パク：もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか？

田中：ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。

パク：そうですか。わかりました。また今度行きましょう。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

	A	B	C	D
統制群	0	86.7	10	3.3
学習者	6.7	53.3	33.3	6.7

日本語母語話者の 86.7% (26/30 名) が「た」を選択していたが、中国語母語話者の「た」選択は 53.3% (16/30 名) で、約 30% (10/30 名) が「ている」を選択した。これは空所直前の「ちょうど今」という語に引きずられたためであると考えられる。さらに (22) は「た」と「ていた」の混同が見られた項目である。

(22) 「た」と「ていた」の混同が見られた項目例

田中さんは学校でパクさんと話しています。

田中：昨日、喫茶店で SMAP の木村拓哉さんを見ましたよ。

パク：えっ？本当ですか？

田中：ええ、木村さんはお店に入って来て、私の席の近くに_____んです。びっくりしましたよ。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

	A	B	C	D
統制群	0	96.7	3.3	0
学習者	0	46.7	0	53.3

日本語母語話者の 96.7% (29/30 名) が「た」を選択したが (残り 1 名は「ている」を選択)、中国語母語話者の「た」の選択は 46.7% (14/30 名) で、53.3% (16/30 名) は「ていた」を選択していた。これは、日本語の「座る」に相当する中国語の“坐”は「座っている状態」そのものを指すのが基本 (荒川 2003 : 16) であり、この点で、身体移動を表す日本語の意味と異なるため、(22) の場面においても「座った」という変化ではなく、状態の意味を含む「座っていた」を選択したと考えられる。

崔 (2009) で習得の第一段階と位置付けられていた「る」と「た」であるが、今回の結果から「た」を選択すべき文脈において、小さな割合ではあるものの「ている」およ

び「ていた」と混同している様子が窺えた。また「る」に関しても、「る」を選択すべき文脈において正しく「る」を選択できていることから一見習得されているようにも見えるが、「る」を選択すべきではない文脈において「る」を選択していた。「未来」における「動作の持続」「結果の状態（タイプ 1）」「結果の状態（タイプ 2）」において、28.3%、23.3%、43.3%の選択をしており（表 3-10、表 3-11）、野田（2001）の言う文法項目の「対立の仕方」を習得しているとは言い難い。これは、「未来」における上記の用法が習得されていないことで、「未来」を表すもの、つまり非過去とだけ認識したためであると考えられる。

3.7.2 時点別の「動作の持続」「結果の状態」の習得状況

「現在」「過去」「未来」の各時点における「動作の持続」「結果の状態」用法の正答率を図 3-2 に示す。

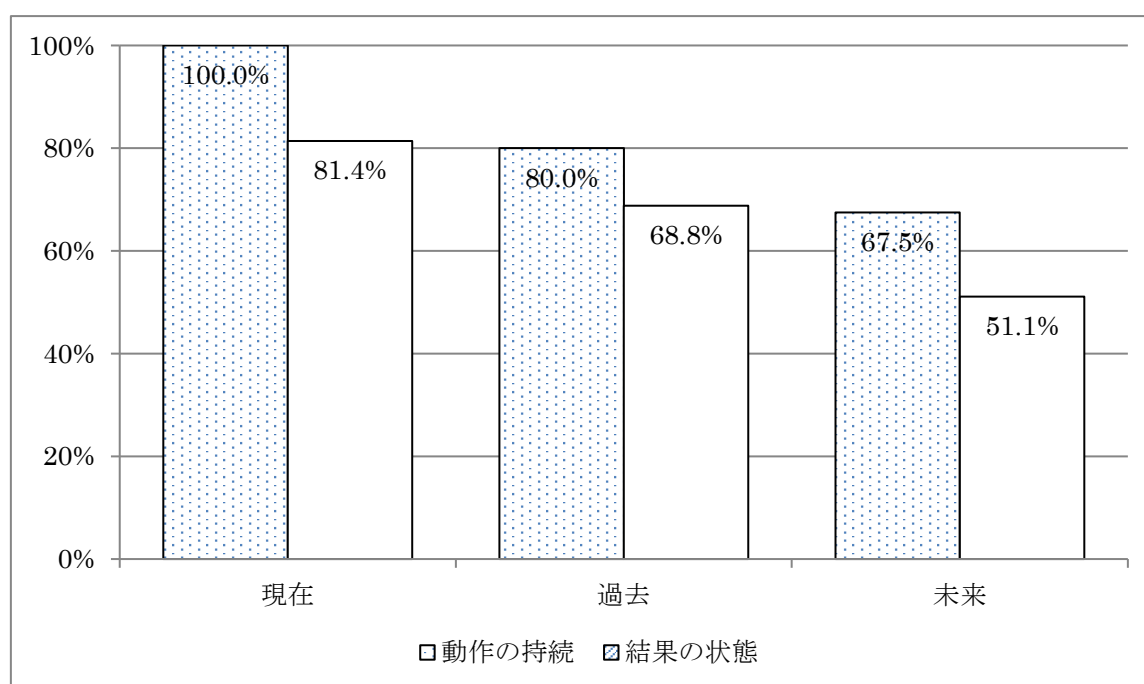


図 3-2 現在・過去・未来における「動作の持続」「結果の状態」の正答率³⁹

³⁹ 「結果の状態」の正答率はタイプ 1 とタイプ 2 を合算したものである。

いずれの時点においても「動作の持続」が「結果の状態」より高い正答率であった。この結果は、先行研究の章で触れたように、これまでの日本語のテンス・アスペクト習得研究において報告された結果と一致する結果である(黒野 1995; 許 1997; 小山 2003 など。)

中国語母語話者の各条件における正答率を従属変数とし 2 要因の分散分析⁴⁰を行った結果、用法の主効果は有意であり ($F(1, 29)=18.18, p<.001$)、「動作の持続」の正答率が「結果の状態」より有意に高かった。時点の主効果も有意であった ($F(2, 58)=46.60, p<.001$)。交互作用は有意ではなかった ($F(2, 58)=1.00, p=.373$)。

時点の主効果が有意であったため、時点(現在・過去・未来)の 3 水準についてライアンの方法による多重比較を行った結果、すべての水準間に有意差があり ($p<.001$)、未来→過去→現在の順に正答率が高かった。

研究課題 2 については、「動作の持続」と「結果の状態」の習得において、時点の違いによる難易度の差が見られた。具体的には、両用法とも「現在」の正答率が最も高く、続いて「過去」、そして正答率が最も低いのが「未来」であった。つまり、最も難易度が高いのは「未来」の「結果の状態」であると言える。先行研究においては、崔 (2009) では、「動作の持続」の習得は「現在」から始まり、その後「過去」「未来」へと同時期に広がった。一方、「結果の状態」では、上位群で「現在」の正答率が 80%を超えたが、「過去」「未来」の正答率は低いままであった(過去: 42.9%、未来: 48.8%)。「未来」の「動作の持続」は崔の上位群は 80%を超える正答率であったが、上級レベルの学習者を対象とした本研究では 70%に満たない正答率であった。「未来」の「動作の持続」の正答率を動詞別に見てみると、「寝る」は 100%、「勉強する」は 93.3%、「作る」は 66.7%であったのに対して、「食べる」のみ、10% (3/30 名) と極端に低い正答率であった。「食べる」を用いた「未来」の「動作の持続」の問題を (23) に示す。

(23) 「未来」の「動作の持続」の正答率が低かった項目

田中さんは食事会に遅刻しそうです。リーさんに電話しています。

田中: もしもし。すみません、アルバイトが遅くなって…。今から移動しますから、ちょっ

⁴⁰ 分散分析は ANOVA4 (<https://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4/about.html>) で行った。これはオンラインで統計処理が可能で、下位検定として Ryan 法による多重比較や、交互作用が有意な場合の単純主効果の検定も行うことができる。桐木建始氏によってオンラインで公開されている。

と遅くなりそうです。

リー：そうですか。じゃあ、先に_____から、気をつけて来てくださいね。

- A. 食べます B. 食べました C. 食べています D. 食べていました

	A	B	C	D
統制群	3.3	0	96.7	0
学習者	90.0	0	10.0	0

(23) では、「ている」の選択は、中国語母語話者が 10% (3/30 名) で、残りの 90% (27/30 名) は「る」を選択していた。日本語母語話者の「ている」の選択は 96.7% (29/30 名) で、3.3% (1/30) は「る」を選択していた。この項目がなぜ他の 3 つの問題と比べて極端に正答率が低かったのかは明らかでないが、この問題のため「未来」の「動作の持続」の正答率が低くなっていると言える。「過去」と「未来」の難易度の差については、後ほど研究課題 3 に関連づけて、さらに考察を行う。

3.7.3 動詞のタイプ別の「結果の状態」の習得状況

最後に「結果の状態」の習得における動詞タイプによる差を調べるため、動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率を図 3-3 に示す。

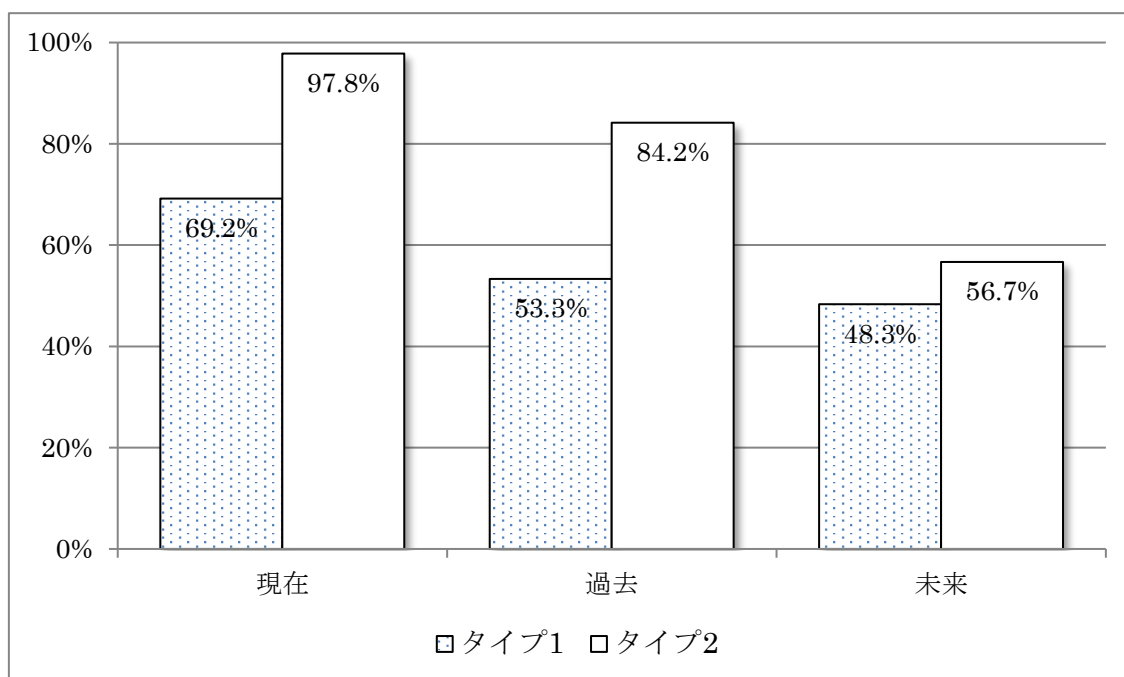


図 3-3 動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率

図 3-3 から、「現在」「過去」「未来」のいずれにおいても、タイプ 2 の正答率がタイプ 1 の正答率を上回っていることがわかる。特に、「現在」では 97.8%とほぼ 100%に近く、「過去」でも 84.2%と、高い正答率であった（「動作の持続」では「現在」が 100%、「過去」が 80%、「未来」が 67.5%であった）。

中国語母語話者の各条件における正答率を従属変数とし、2 要因の分散分析を行った結果、交互作用が有意であったため ($F(2,58)=6.10, p=.003$)、単純主効果の検定を行った。

時点の各水準における動詞タイプの単純主効果を見てみると、「現在」において、動詞タイプの単純主効果が有意であり ($F(1, 87)=23.96, p<.001$)、タイプ 2 の正答率がタイプ 1 より有意に高かった。「過去」においても、動詞タイプの単純主効果が有意であり ($F(1, 87)=27.83, p<.001$)、タイプ 2 の正答率がタイプ 1 より有意に高かった。しかし、「未来」においては、動詞タイプの単純主効果が有意ではなく ($F(1, 87)=2.03, p=.157$)、動詞タイプ間の正答率に有意差が認められなかった。ここでは、許 (1997) においても指摘されている、「結果の状態」の習得における、対応する中国語の動詞のタイプの差が、「現在」のみならず、「過去」の時点においても確認された。

次に、動詞タイプの各水準における時点の単純主効果を見てみると、タイプ 1 の動詞

において、時点の単純主効果が有意であった ($F(2, 116)=9.37, p<.001$)。ライアンの方法による多重比較を行ったところ、「現在」の正答率が「未来」より有意に高かった ($p<.001$)。また、「現在」の正答率が「過去」より有意に高かった ($p=.002$)。一方、「未来」と「過去」($p=.321$) には有意差がなかった。タイプ2の動詞においても、時点の単純主効果が有意であった ($F(2, 116)=34.76, p<.001$)。ライアンの方法による多重比較を行ったところ、時点のすべての水準間に有意差があり、未来→過去→現在の順で有意に正答率が高かった(「現在」と「未来」は $p<.001$ 、「現在」と「過去」は $p=.007$ 、「過去」と「未来」は $p<.001$)。

研究課題3については、「現在」と「過去」の「結果の状態」において母語である中国語の影響によるとと思われる、タイプ間の差が見られた。日本語においては「結果の状態」とされる用法でも、対応する中国語において異なる振る舞いを見せる動詞タイプで分けてみることで、その正答率に大きな開きが確認された。先行研究でもたびたび指摘があるように、「結果の状態」のほうが「動作の持続」より難易度が高いとされるが、タイプ2の正答率を見てみると、「現在」は97.8% (「動作の持続」は100%)、「過去」は84.2% (「動作の持続」は80%) と高かった。以下では、項目ごとの特徴と合わせて考察を行う。

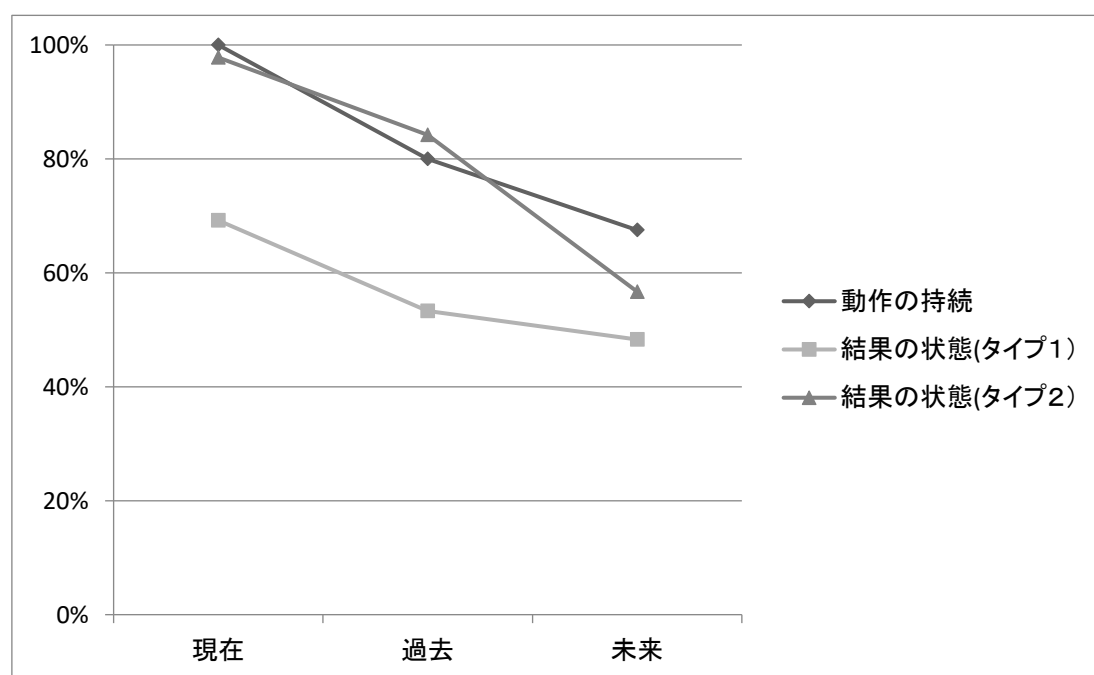


図 3-4 「動作の持続」とタイプ別の「結果の状態」の正答率の比較

まずタイプ1について述べる。「未来」における「結果の状態」においては、中国語母語話者のル形の選択率と、さらにタ形の選択率の高い項目があった。「未来」の「結果の状態」を表す問題で、「る」の選択率が高かったものを(24)に示す。

(24) タイプ1の「未来」の「結果の状態」において「る」の選択が多かった項目

田中さんとリーさんが、寮の玄関を掃除しています。

田中：だいぶ綺麗になりましたね。

リー：そうですね。でも、みんなが毎日使いますから、明日はまたごみが_____で
しょうね。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

	A	B	C	D
統制群	10.0	0	90.0	0
学習者	66.7	0	33.3	0

(24) では、日本語母語話者の 90.0% (27/30 名) が「ている」、10% (3/30 名) が「る」を選択していた。それに対して、66.7% (20/30 名) の中国語母語話者が「る」を選択していた (残り 10 名は「ている」を選択)。これは「未来」のことを表していることを認識したものの、「結果の状態」に必要な「変化」までは認識していないことによると考えられる。また、未来のことであっても「完了」と捉えたことによって「た」を選択したと思われる項目も見られた。(25) に例を示す。

(25) タイプ1の「未来」の「結果の状態」において「た」の選択が多かった項目

田中さんとリーさんは、未来の世界について話しています。

田中：2200年は、どんな世界かなあ。

リー：きっと、もっと便利な世界でしょうね。

田中：そうだね。でも、僕たちはもう_____から、その世界は見られないよね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

	A	B	C	D
統制群	0	0	100	0
学習者	0	56.7	43.3	0

この項目では、すべての日本語母語話者が「ている」を選択していたが、中国語母語話者の「ている」の選択は 43.3%（13／30 名）に留まっており、56.7%（17／30 名）が「た」を選択していた。

次にタイプ 2 について述べる。これは表 3-11 からわかるように、「未来」の「結果の状態」において「た」を選択している中国語母語話者はほとんど見られず、誤選択は「る」に集中している。「る」の選択が多かった項目を（26）に示す。

（26）タイプ 2 の「未来」の「結果の状態」において「る」の選択が多かった項目

田中さんはリーさんと電話で話しています。

田中：じゃあ、明日の 3 時にあの喫茶店で会おうね。

リー：うん。私は早く着くと思うから、先に行って、いつもの席に_____ね。

A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

	A	B	C	D
統制群	3.3	0	96.7	0
学習者	83.3	0	16.7	0

（26）の項目で、日本語母語話者の 96.7%（29／30 名）が「ている」を、3.3%（1／30 名）が「る」を選択している。しかし、中国語母語話者の「ている」の選択は 16.7%（5／30 名）であり、83.3%（25／30 名）は「る」を選択している。

これはタイプ 1 で「る」が選択されていたとき同様、「未来」の出来事と認識してはいるが、その「結果の状態」に必要な「変化」を捉えられていないことによると思われる。正答率においては差が見られなかった「未来」のタイプ 1 とタイプ 2 であるが、中国語母語話者の選択肢にはその差が現れていると言えよう。

以上見てきたような動詞タイプ間の差は、中国語母語話者による「結果の状態」の「て

いる」の習得における母語の動詞タイプの影響を示すものである。崔（2009）の習得段階では、このような母語の影響は考慮されておらず、その点において本研究は崔の研究を一步進めるものと言えよう。

では、研究課題 2 および研究課題 3 で見られた「未来」の「結果の状態」が最も習得が困難な理由についてはどのように説明できるだろうか。これは「ている」が「現在」「未来」いずれの文脈においても使用されることが原因として挙げられる。「ていた」は「過去」を表す「た」が含まれているため、「過去」を表すと認識するのは容易であると考えられる。一方、「未来」の文脈においては、「現在」の文脈において用いられるのと同じ「ている」を用いる。そのため学習者がインプットに触れたとしても、「現在」の「ている」との差異が認識されにくいと考えられる。そのため、「未来」の文脈において「ている」を選択すべき文脈であっても、中国語母語話者はその文脈を「未来」とのみ認識し、「る」を選択してしまったのであろう。この傾向は、「動作の持続」と「結果の状態」の違いや、「結果の状態」の動詞タイプの違いに関わらず、「未来」の「ている」全般に見られ、上級でも根強いものであることを示唆している。

3.8 予備調査のまとめと調査紙の改善点

本章では、中国語を母語とする学習者による日本語のテンス・アスペクト習得における先行研究において残された課題を明らかにすべく、問題点を指摘し、再検証するための調査課題を作成し、予備調査を行った。ここで、研究課題を再掲する。

研究課題 1 義務的文脈において、「る」「た」を正しく選択することができるか。

研究課題 2 「現在」「過去」「未来」におけるテイル形（「動作の持続」と「結果の状態」）に習得難易度の差があるか。

研究課題 3 対応する中国語の動詞のタイプによる「結果の状態」の難易度の差が見られるか。

以下に、研究課題ごとに結果をまとめる。

研究課題 1 「た」を選択すべき文脈において、「ている」「ていた」の選択が見られ

た。「る」については、選択すべき文脈において正しく選択できていたが、「る」を選択すべきでない文脈において「る」の選択が見られた。

研究課題 2 「未来」の「結果の状態」は、「過去」の「結果の状態」より習得が困難であることが明らかになった。

研究課題 3 「現在」と「過去」の「結果の状態」を習得する際、対応する中国語の動詞とアスペクトマーカ（“了” “着”）の結びつきの可否による差が見られた。「未来」ではその差が見られなかった。

本章における結果をまとめると、中国語母語話者は上級であっても「る」「た」「ている」「ていた」の対立の仕方を習得しているとはいえず、使い分けに混乱していると思われる結果が得られた。さらに用法別、時点別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」両用法において「未来→過去→現在」の順に正答率が上がるという、先行研究とは一部異なる結果も得られた。こうした習得の難易度は、「ていた」が「過去」のみを表すのに対して、「ている」が「現在」および「未来」の二つの時点を表す形式であることに起因している可能性を述べた。

このように、本章では、崔（2009）を出発点として、問題点を指摘したうえで、その問題点を克服可能な調査紙を作成し、調査を実施した。上で述べた結果から、本章において指摘した問題点が妥当なものであることがわかった。しかし、予備調査の結果、本調査に向けていくつかの点で修正が必要な点も明らかになった。

（27）本調査に向けての改善点

- a) 日本語母語話者の回答に揺れが見られた項目について
- b) 学習者の習熟度の判定について
- c) 調査に要した時間について

a) については、改めて問題文を検討し、日本語母語話者の回答が一致する項目とする。b) については、先行研究で本研究の目的が中国語を母語とする日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得過程を明らかにするということから、異なる習熟度の学習者を対象とする必要があり、習熟度の判定方法は妥当かつ信頼できる方法を採用しなければならない。最後に、c) については、今回、上級レベルと思われる日本語学習者 30

名を対象として予備調査を行った結果、調査紙の回答のみに必要な時間が 30～45 分であることがわかった。本調査においては、次章で述べるが、中国国内の大学で調査を実施する。より規模の大きな集団を対象とするため、今回対象とした学習者よりも日本語の習熟度がまだ低い学習者も含まれている可能性が高い。そのため、課題遂行には、より時間を要することが予想される。さらに、b) で述べたように、習熟度判定のためのテストも同時に行う必要がある。そのため、調査対象者の負担という点を考え、調査時間の短縮を図るため、i) 問題数、ii) ダミー問題の難易度、iii) 回答の方法、iv) 指示文の使用言語、これらの点を検討し直したうえで、続く第 4 章で本調査を実施する。

第 4 章

「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け —習熟度の異なる学習者の習得状況—

第 3 章では、中国語を母語とする日本語学習者の「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けの習得状況を明らかにするため、さらにその習得状況を説明するため、調査紙を作成し、予備調査を実施した。具体的には、「る」「た」の習得状況、「ている」「ていた」の習得難易度の違い、そして「結果の状態」における母語の動詞タイプの違いの影響を検討した。その結果、上級と思われる学習者であっても、「る」「た」「ている」「ていた」の対立関係の習得における困難さが見られた。本章では、修正を加えた調査紙を用いて、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け、習得状況を明らかにし、習得の難易度についてその要因を探る。

4.1. 研究課題

第 3 章で提示した研究課題を、こことで改めて確認する。

- 研究課題 1 義務的文脈において、「る」「た」を正しく選択することができるか。
- 研究課題 2 「現在」「過去」「未来」におけるテイル形（「動作の持続」と「結果の状態」）に習得難易度の差があるか。
- 研究課題 3 対応する中国語の動詞のタイプによる「結果の状態」の難易度の差が見られるか。

研究課題 1 では、まず異なる習熟度の学習者による「る」「た」の習得状況を明らかにする。先行研究において「る」「た」は、「ている」の前段階で習得されると言われている。しかし、実際に検証はなされていないため、具体的な項目を設定してその習得段階を明らかにする。

研究課題 2 では、崔（2009）の問題点であると指摘した習熟度の分け方を改善したうえで、異なる習熟度の学習者による、「現在」「過去」「未来」の時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況を明らかにする。

研究課題 3 では、異なる習熟度の学習者による、「結果の状態」用法における中国語からの影響を明らかにする。第 3 章は、「現在」と「過去」の文脈で、対応する中国語における動詞タイプの差（“了”と“着”との共起可否）と思われる差が見られた。この差が、異なる習熟度の段階においても見られるのかを明らかにする。。

4.2 調査方法

4.2.1 調査対象者

調査対象者は、中国語を母語とする日本語学習者 194 名である。全員が中国国内の 4 年制大学で日本語を専攻する大学 3～4 年生、あるいは大学院生である。調査は 2015 年 9 月に、江蘇省の 2 大学、安徽省の 1 大学、湖北省の 1 大学で行った。調査対象者 194 名のうち、14 名は日本の大学へ 5 か月以上の留学経験を持つ。

また、統制群として、日本語母語話者 54 名にも同様の調査を実施した。この 54 名は、全員、名古屋市の大学に通う学部学生である。

表 4-1 調査対象者の属性

対象者	総人数（名）	年齢（歳）		
		範囲	平均	標準偏差
中国語母語話者	194	18-26	21.2	1.18
日本語母語話者	54	18-26	19.2	1.10

4.2.2 調査対象者のレベル分け

本章における目的の一つは、学習者の習熟度が上がるにつれて、日本語のテンス・アスペクト形式の習得がどのように進むのかを明らかにすることである。よって、学習者を習熟度によって、いくつかの群に分ける必要がある。日本語の習得研究において、習熟度別にグループ分けする場合、①日本語能力試験、②OPI、③SPOT、④大学の学年やクラスなどが基準として用いられる。日本語能力試験は、国際交流基金が年 2 回実施している言語知識、読解、聴解、計 180 点からなるテストで、最も多くの日本語学習者が受けるテストであると言ってよいだろう。日本国内の大学院が、受け入れの基準として参考にすることもある。日本語能力試験について言えば、今回調査対象者であった中国の大学における日本語学習者が、最上位の N1 以外を受験することはあまり多くない。就職や留学の際、N1 に合格しているか、あるいはしていないかが重要であり、それ以外のレベルを受験することは多くないからであるとされる。この傾向が中国国内の傾向として断定できるかどうかは定かではないが、少なくとも今回調査を実施した 4 大学においては共通の傾向であった。OPI（Oral Proficiency Interview）は、OPI テスターの資格を有するインタビュアーが、最長 30 分のインタビューを通して、できるだけ信頼性のある発話資料を収集して口頭発話能力を測定する。今回の調査は、100 名以上の学習者を対象とする、日本国外での調査で調査可能期間が限られていたこと、さらに調査者自身は OPI テスターの資格を有しておらず、資格を有する協力者が必要となるため、この方法は採用していない。SPOT（Simple Performance-Oriented Test）は自然な速度で流れる文を聞いて、空欄箇所に平仮名一文字を書き入れる形式の熟達度テストである。SPOT の特徴を、李ほか（2015）では次のように述べている。

(1) SPOT の特徴

- a) 言語運用能力を間接的・客観的に測定するテストである。
- b) 短時間で実施できるテストである。
- c) 能力差が比較的大きな集団を 2～4 段階程度の能力別グループに分けるテストである。

(李ほか 2015 : 55)

本研究においては、中国の大学で一度に数十人の日本語学習者を対象に調査を行うため、上記の各方法の特性を考慮し、学習者の習熟度判定を SPOT で行うこととした。SPOT の結果を 4-2 に、ヒストグラム図 4-1 に示す。

表 4-2 SPOT (65 点満点) のテスト結果

平均得点	31.1
標準偏差	11.7
最低得点	5
最高得点	62

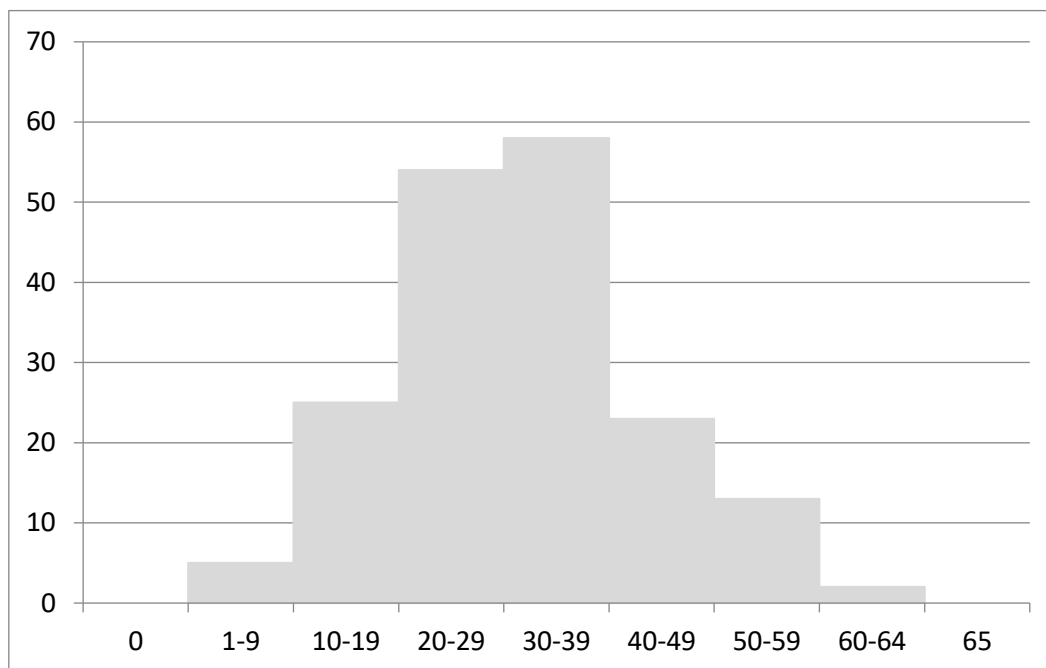


図 4-1 SPOT の得点のヒストグラム

この結果をもとに、学習者を 3 つの群に分けた。3 群にした理由としては、SPOT 自体が、上で述べたように 2～4 段階程度の集団に分けるために用いるのに適していること、各群の人数に偏りが出ないようにすること、各群の人数を可能な限り多く確保したかったこと、複数の形式の習得段階を検討するためには 3 群以上の分ける必要があると考えたこと、などがある。以上の理由から、学習者のレベルを、各 60 名の下位群、中位群、上位群の 3 群に分類した⁴¹。学習者のレベルと SPOT の点数を表 4-3 に示す。

表 4-3 学習者のレベルと得点

レベル	得点（点）	人数（名）
下位群	5-25	60
中位群	26-35	60
上位群	36-62	60

⁴¹ 留学経験のある 14 名は分析対象から除いた。

続いて、各習熟度群における SPOT の平均と標準偏差を表 4-4 に示す。

表 4-4 各群における SPOT の平均と標準偏差

レベル	人数 (名)	平均 (点)	標準偏差
下位群	60	18.70	4.994
中位群	60	30.43	2.836
上位群	60	44.18	7.131

分散分析の結果、グループ間に差が見られた ($F(2, 177)=343.46, p<.001$)。多重比較の結果、すべてのレベル間に有意な差が見られた ($p<.001$)。以上の結果から、下位群、中位群、上位群の 3 つグループは、習熟度が異なるグループであると判断した。

4.2.3 調査資料および手続き

日本語学習者への調査は、2015 年 9 月に、上記の 4 大学で実施した。実施の際は、すべて調査者の立会いのもと、大学の教室で 10~40 名ずつの規模で行われた。調査では、まずフェイスシートの記入および SPOT テストを行った後、調査課題を実施した。

日本語母語話者への調査は、2015 年 12 月から 2016 年 1 月にかけて実施した。SPOT テストの実施はなかったため、まずフェイスシートの記入を行い、そのあとで調査課題に回答してもらった。

調査には、予備調査同様、「る」「た」「ている」「ていた」が選択肢の多肢選択式課題を用いた。大部分の問題は前章の調査課題と同様の問題であるが、一部、変更を加えた。まず、全体の問題数を 76 問から 65 問に変更した。これは、上級日本語学習者を対象に行った予備調査で、課題の遂行に 30~45 分を要し、調査対象者への負担が大きかったためである。今回の調査では、より習熟度の低い学習者も対象者に含むため、対象者への負担を軽減するためにこの変更を行った。さらに、ダミー問題 16 問も 6 問を削減して 10 問としたうえで、問題の難易度も下げ、調査時間を短縮できるように努めた。また、回答の形式を、調査紙の選択肢に直接丸を記入する形式から、別紙の解答用紙に選択肢 (A、B、C、D) を記入する形式に変更した。

問題は、11 個の動詞それぞれにつき、「る」「た」「ている」(現在および未来)「てい

た」の 5 種類が正解となるものである。11 個の動詞は、テイル形が「動作の持続」「結果の状態」いずれを表すかによって (2) のように分類できる。

(2) 調査に用いた動詞

a. テイル形が「動作の持続」を表す動詞

食べる、作る、勉強する

b. テイル形が「結果の状態」を表す動詞

死ぬ、落ちる、壊れる、結婚する、開く、停まる、(電気が) つく、座る

予備調査では、「テイル形が「動作の持続」を表す動詞」に「寝る」が含まれていたが、本調査では削除した⁴²。その他の動詞は、予備調査と同様のものである。そして、テイル形が「結果の状態」を表す動詞は、対応する中国語において、“了”、“着”の異なる性質を有するアスペクトマーカとの共起可否によって、2つのグループに分けられる点も、予備調査と同様である。タイプ1は“了”とは共起でき、“着”とは共起できない。タイプ2は、“了”とも“着”との共起できる動詞である。(3)にタイプ別の動詞と、括弧内に対応する中国語の動詞をまとめる。

(3) 対応する中国語とアスペクトマーカとの共起関係からの分類

タイプ1: 死ぬ(死)、落ちる(掉)、壊れる(坏)、結婚する(结婚)

タイプ2: 開く(开)、停まる(停)、(電気が) つく(亮)、座る(坐)

調査に用いた項目の内訳を表 4-5 に示す。

表 4-5 調査項目の内訳

アスペクト	テンス	形式	問題数(問)
完結相	非過去	る	11
	過去	た	11

⁴² 「寝る」を対象から除いた理由は、まず、上述したように調査に要する時間を短縮するため調査項目を減らす必要があると判断したからである。次に、「寝る」がテイル形の際に「動作の持続」「結果の状態」いずれも表し得る動詞であり(それぞれ「睡眠をとっている」と「横になっている」などの意味を表せる)、調査項目として他の動詞と異質であると判断したためである。

継続相 (動作の持続)	非過去（現在）	ている	3
	過去	ていた	3
	非過去（未来）	ている	3
継続相 (結果の状態 1)	非過去（現在）	ている	4
	過去	ていた	4
	非過去（未来）	ている	4
継続相 (結果の状態 2)	非過去（現在）	ている	4
	過去	ていた	4
	非過去（未来）	ている	4
		計	55

予備調査の結果で、日本語母語話者の回答に揺れが見られた項目、具体的には日本語母語話者の回答の一致率が 85%を下回ったものについては、回答が一致するよう、問題の修正を行った（調査紙は付録③と付録④を参照）。

調査紙は、全 65 問を無作為に配列した後、二分して A 問題（33 問）と B 問題（32 問）とした。回答の際の順序効果をなくすため、対象者の半分は A 問題を先に、残りの半分は B 問題を先に回答した。まず調査を実施する教室内の対象者を半分に分け、半分の対象者には A 問題を配布し、残り半分の対象者には B 問題を配布した。一斉に回答を開始し、各自、回答を終えたら挙手し、調査者から残りの調査課題（先に A 問題を解いた対象者は B 問題を、先に B 問題を解いた対象者は A 問題を）を受け取り、回答を行った。フェイスシート、SPOT を除き、調査紙回答のみの所要時間は、休憩時間も含めて、中国語母語話者は 20～50 分、日本語母語話者は 10～20 分程度であった。

4.3 結果と考察

分析では、予備調査同様、調査項目 55 問において、統制群である日本語母語話者の解答が 85%以上一致した 54 問を対象とした。日本語母語話者による解答の一致率が 85%を下回った 1 項目は分析対象外とした。分析対象とした 54 問全体の、日本語母語話者による一致率は 97.2%で、ほぼ一致していると言えよう。この調査課題 54 問の内

的一貫性は、 $\alpha=.729$ であった。統制群である日本語母語話者による回答の一致度を表 4-6 に示す。右端の一致率が 85%以上のものが分析対象である。

表 4-6 統制群（日本語母語話者）による回答の一致度

問題	動詞	想定正解	一致人数(名)	一致率(%)	問題	動詞	想定正解	一致人数(名)	一致率(%)
A1	落ちる	C	54	100	B1	勉強する	C	54	100
A2	開く	B	54	100	B3	つく	A	46	85.2
A3	死ぬ	C	54	100	B4	停まる	D	53	98.1
A4	つく	B	54	100	B5	座る	B	48	88.9
A5	勉強する	D	53	98.1	B6	食べる	C	53	98.1
A6	死ぬ	A	54	100	B7	結婚する	C	53	98.1
A8	結婚する	C	54	100	B8	勉強する	A	54	100
A9	作る	D	53	98.1	B9	落ちる	C	47	87
A10	食べる	A	52	96.3	B11	停まる	B	52	96.3
A11	停まる	C	52	96.3	B12	壊れる	C	54	100
A12	結婚する	A	51	94.4	B13	死ぬ	C	53	98.1
A14	食べる	B	36	66.7	B14	開く	A	54	100
A15	停まる	C	48	88.9	B15	つく	D	54	100
A16	座る	D	54	100	B16	食べる	C	52	96.3
A17	壊れる	A	54	100	B17	死ぬ	B	51	94.4
A19	作る	B	54	100	B18	作る	C	54	100
A20	座る	C	51	94.4	B20	結婚する	B	53	98.1
A21	壊れる	B	54	100	B21	勉強する	B	52	96.3
A23	座る	A	46	85.2	B22	開く	D	53	98.1
A24	落ちる	D	53	98.1	B23	座る	C	54	100
A25	勉強する	C	53	98.1	B25	開く	C	54	100
A26	作る	A	50	92.6	B26	結婚する	D	51	94.4
A27	つく	C	53	98.1	B27	壊れる	D	52	96.3
A29	壊れる	C	53	98.1	B28	つく	C	53	98.1
A30	死ぬ	D	52	96.3	B29	落ちる	A	54	100
A31	開く	C	54	100	B30	食べる	D	53	98.1
A32	停まる	A	54	100	B32	作る	C	54	100
					B33	落ちる	B	54	100

分析対象外とした項目（A14）を（4）に示す。

(4) 分析対象外とした問題（数字は%）

田中さんはレストランでお金を払っています。パクさんから電話です。

パク：もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか？

田中：ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。

パク：そうですか。わかりました。また今度行きましょう。

A. 食べる

B. 食べた

C. 食べている

D. 食べていた

	下位群	中位群	上位群	統制群
る	18.3	11.7	0	0
た	43.3	55.0	56.7	66.7
ている	23.3	21.7	36.7	29.6
ていた	15.0	11.7	6.7	3.7

各項目において、学習者が選択した形式の割合を表 4-7、表 4-8 に示す。以下、研究課題ごとに結果をまとめ、考察を加えていく。

表 4-7 各群における学習者の選択語形の割合（数字は%）

アспект		テンス	形式	学習者の 選択	下位群	中位群	上位群	統制群
完結相		非過去	る	る	59.8	70.0	85.3	95.8
				た	13.8	9.8	5.3	0.7
				ている	21.4	17.0	7.6	3.4
				ていた	5.0	3.2	1.8	0.2
		過去	た	る	7.8	5.8	3.5	0.2
				た	61.5	65.5	73.3	97.2
				ている	14.7	11.2	10.5	0.4
				ていた	16.0	17.5	12.7	2.2
継続相	動作の持続	非過去 (現在)	ている	る	12.8	5.0	1.7	0.6
				た	5.0	3.9	0.0	0.0
				ている	78.9	89.4	96.7	98.8
				ていた	3.3	1.7	1.7	0.6
		過去	ていた	る	3.3	2.2	0.6	0.0
				た	10.0	8.9	2.8	1.2
				ている	14.4	13.9	16.7	0.6
				ていた	72.2	75.0	80.0	98.1
		非過去 (未来)	ている	る	15.6	8.9	17.2	1.2
				た	8.3	6.7	1.7	0.0
				ている	68.9	75.6	77.8	98.8
				ていた	7.2	8.9	3.3	0.0

表 4-8 各群における学習者の選択語形の割合（数字は%）（続き）

アспект		テンス	形式	学習者の 選択	下位群	中位群	上位群	統制群
継続相	結果の状態 タイプ 1	非過去 (現在)	ている	る	5.8	5.0	4.2	0.0
				た	56.7	63.3	60.8	0.9
				ている	14.6	9.2	17.1	98.6
				ていた	22.9	22.5	17.9	0.5
		過去	ていた	る	2.9	2.5	1.3	0.0
				た	60.8	66.7	62.5	3.7
				ている	5.8	3.3	7.5	0.5
				ていた	30.4	27.5	28.8	95.8
		非過去 (未来)	ている	る	25.0	28.8	31.7	3.2
				た	42.9	42.9	40.4	0.0
				ている	17.9	12.9	14.2	96.3
				ていた	14.2	15.4	13.8	0.5
	結果の状態 タイプ 2	非過去 (現在)	ている	る	10.4	12.1	4.2	0.0
				た	14.2	11.3	4.6	0.9
				ている	65.8	67.5	89.2	98.6
				ていた	9.6	9.2	2.1	0.5
		過去	ていた	る	2.1	1.3	0.4	0.0
				た	22.1	20.0	12.1	0.5
				ている	14.6	12.5	22.1	0.9
				ていた	61.3	66.3	65.4	98.6
		非過去 (未来)	ている	る	28.8	37.5	36.7	4.2
				た	8.8	4.2	2.1	0.0
				ている	54.6	52.5	59.6	95.4
				ていた	7.9	5.8	1.7	0.5

4.3.1 習熟度別に見た「る」および「た」の習得

まず習熟度別の「る」「た」の習得状況をまとめる。習熟度別の「る」「た」の正答率を図 4-2 に示す。

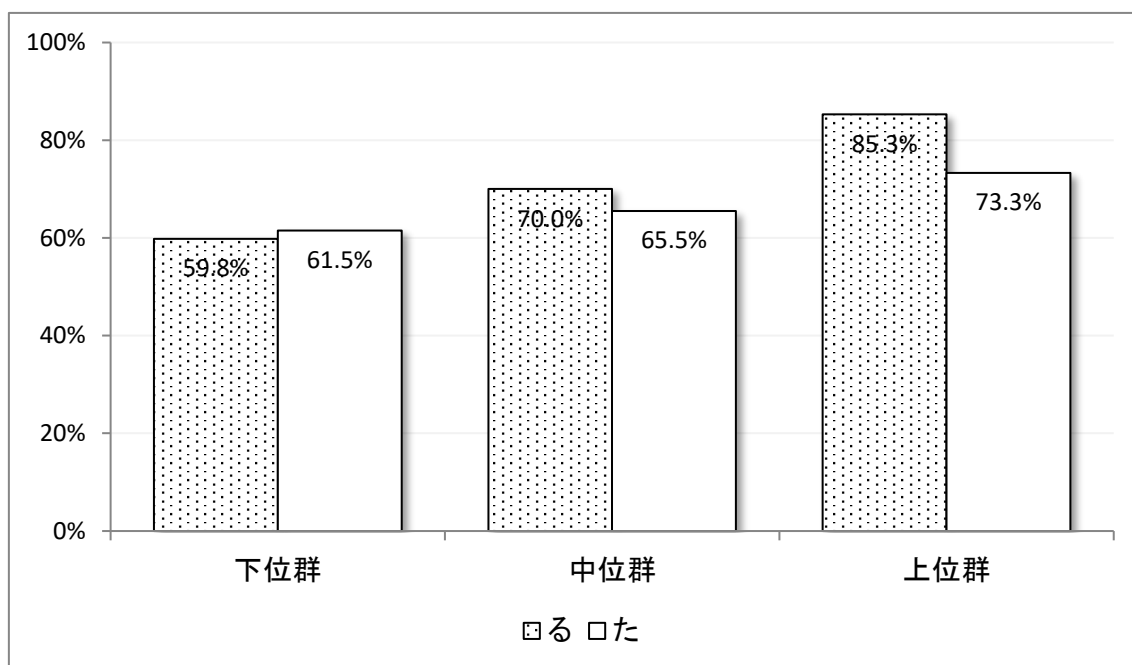


図 4-2 習熟度別の「る」「た」の正答率

図 4-2 から明らかなこととして、3 つのことが挙げられる。まず、a) 下位群においては「た」の正答率が、「る」を多少上回っている。しかし、b) 中位群、上位群では「る」の正答率が上回っている。そして、c) 正答率の差は、習熟度が上がるにつれて広がっている。

習熟度（対応なし：下位群・中位群・上位群）×完結相（対応あり：「る」・「た」）の 2 元配置分散分析を行った結果、習熟度および完結相の主効果（習熟度： $F(2, 177)=22.89$, $p<.001$ ；完結相： $F(1, 177)=11.55$, $p<.001$ ）および交互作用（ $F(2, 177)=7.34$, $p<.001$ ）が有意であった。交互作用が有意であったため、それぞれの要因について、単純主効果の検定を行った。その結果、習熟度の上位群において、「る」「た」の間に有意差が見られた（ $p<.001$ ）。しかし、下位群、中位群では有意差がなかった。ライアンの方法による多重比較の結果、完結相の「た」では、下位群と中位群の間に有意差は無かったが（ $p=0.226$ ）、下位群と上位群（ $p<.001$ ）、中位群と上位群（ $p=.018$ ）、「る」ではすべての習熟度間に有意差が見られた（中位群と下位群： $p<.001$ 、上位群と下位群： $p=.002$ 、

上位群と中位群： $p<.001$ ）。この結果から、習熟度が低い段階（下位群、中位群）においては「る」「た」の正答率に差は見られず、習熟度が上がるにつれて、まず「る」の正答率が上がっていき、上位群になると「る」のほうが「た」より正答率が高くなっていると言える。習熟度の上昇に伴い正答率が上昇した「る」の項目例と習熟度別の選択語形を（5）に示す。

（5）習熟度の上昇に伴い正答率が上昇した「る」の項目例と習熟度別の選択語形

（数字は%）

田中さんは同僚と居酒屋へ行って、たくさんお酒を飲みました。帰り道、二人は駅で電車を待っています。

同僚：大丈夫ですか。もうすぐ電車が来ますよ。

田中：大丈夫です。すみません。

同僚：あっ、それ以上進むと線路に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

	下位群	中位群	上位群	統制群
る	23.3	46.7	78.3	100
た	30.0	13.3	15.0	0
ている	33.3	28.3	6.7	0
ていた	13.3	11.7	0.0	0

（5）の項目においては、日本語母語話者の「る」の選択は 100%（54／54 名）であった。学習者の結果については、まず、下位群の選択において、「る」の 23.3%（14／60 名）、「た」の 30.0%（18／60 名）、「ている」の 33.3%（20／60 名）、「ていた」の 13.3%（8／60 名）と、判断のばらつきが見て取れる。「る」か「た」の判断という点から見れば、非過去を表す「る」「ている」が 56.6%、過去を表す「た」「ていた」が 43.3% となる。しかし、習熟度が上がるにつれ、「た」「ていた」の選択が減少していき、上位群において「る」の選択率が 78.3%（47／60 名）となっている。「た」の選択率が目立って低かった項目を（6）に示す。

（6）「た」の文脈で「ている」の選択が多い項目例と習熟度別の選択語形（数字は%）

パクさんとリーさんが朝、建物の外から先生の研究室を見えています。

パク：先生まだ来ていないみたいね。

リー：そうだね。あっ、今電気が_____よ。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

	下位群	中位群	上位群	統制群
る	16.7	8.3	5.0	0
た	21.7	18.3	30.0	100
ている	56.7	63.3	61.7	0
ていた	5.0	10.0	3.3	0

(6) も日本語母語話者の選択は 100%、「た」で一致していた。一方の中国語を母語とする日本語学習者は、下位群においても「ている」の選択が 56.7% (34/60 名) と最も多く選択されていた。その後、習熟度が上がっても、「ている」選択の割合が下がることはなかった。これは空欄直前の「今」という副詞に引きずられて「現在」の状態を述べている可能性もある。また、4.3.3 で見るように「つく」という動詞が変化動詞ではあるが、対応する中国語“亮”は、状態的な意味が強く、「ている」に対応するアスペクトマーカ―“着”との結びつきが強いことなども要因として考えられるが、この点については現時点では断定できない。

4.3.2 習熟度別の「ている」「ていた」の習得

次に、「現在」「過去」「未来」の異なる時点における「動作の持続」と「結果の状態」用法の習得状況の結果について述べる。まず、「現在」「過去」「未来」、それぞれの文脈における、学習者の「動作の持続」と「結果の状態」の正答率を見える。図 4-3 に「現在」の文脈における「ている」の正答率、図 4-4 に「過去」の文脈における「ていた」の正答率、図 4-5 に「未来」の文脈における「ている」の正答率を示す。

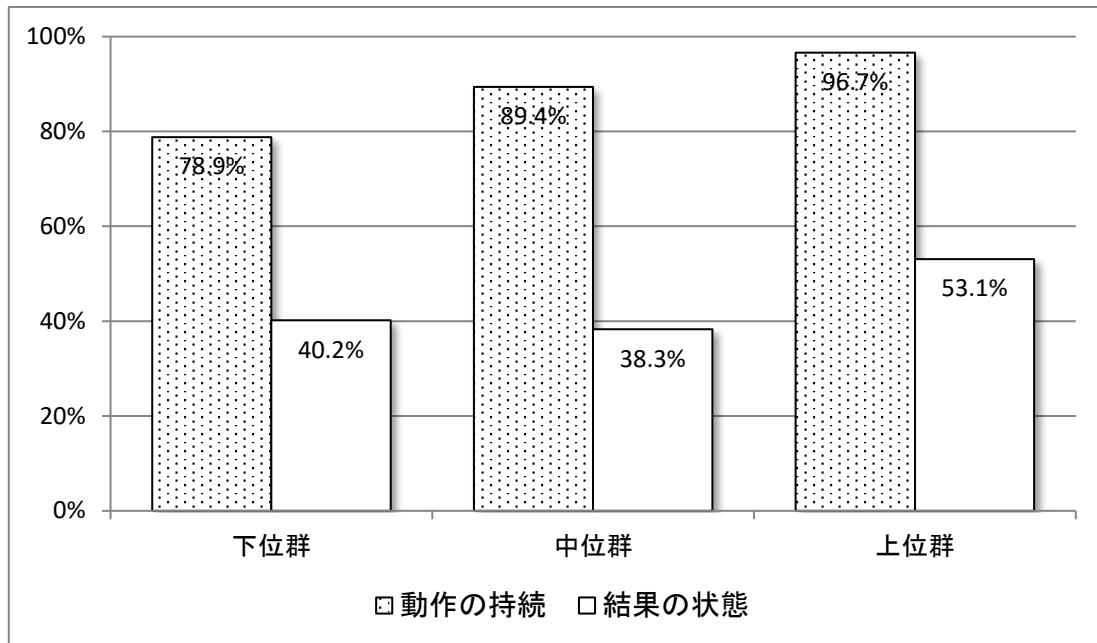


図 4-3 「ている」の正答率（「現在」の文脈）

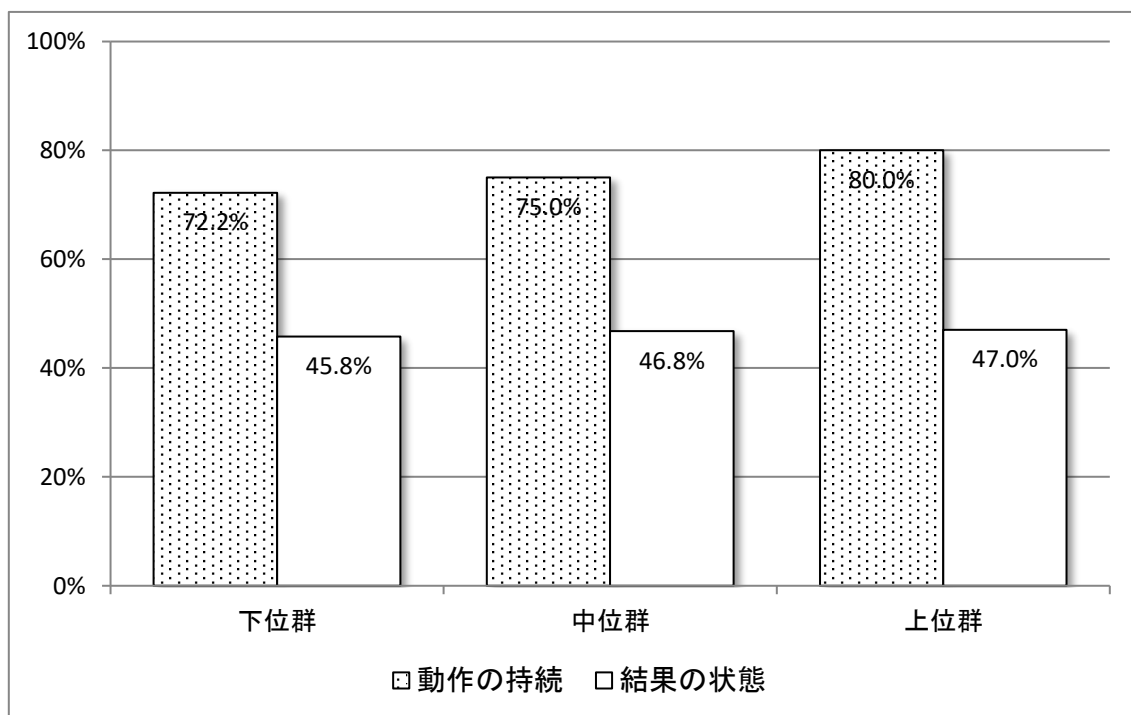


図 4-4 「ていた」の正答率（「過去」の文脈）

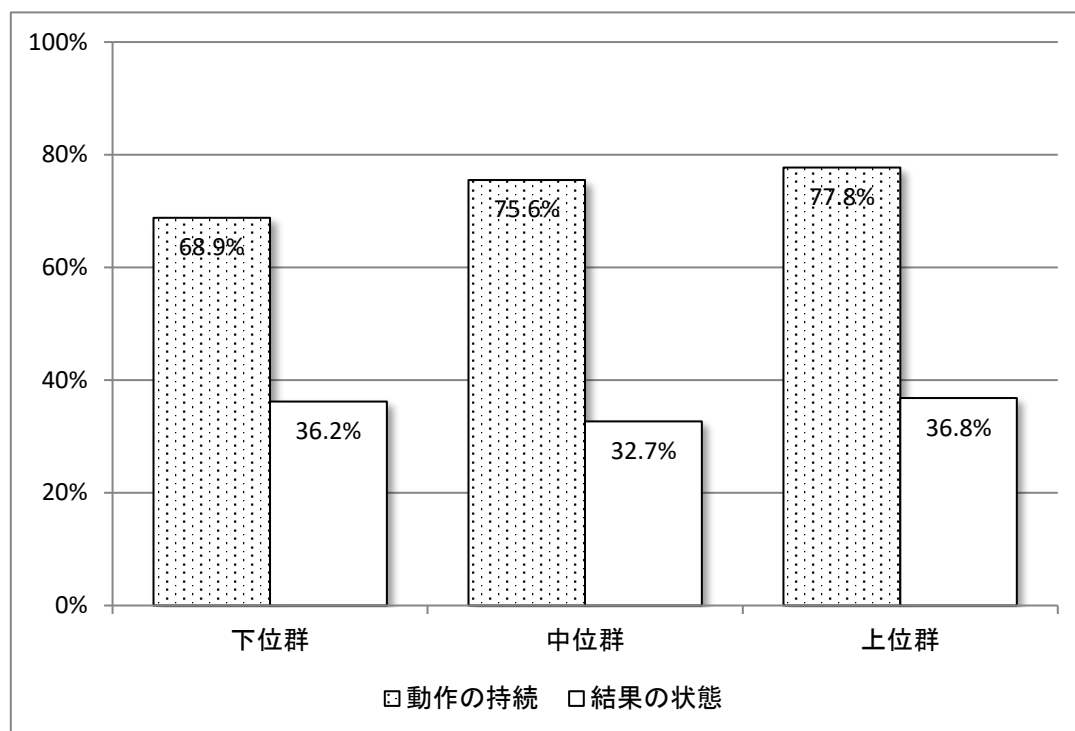


図 4-5 「ている」の正答率（「未来」の文脈）

「現在」「過去」「未来」のいずれの時点を表す文脈においても、「動作の持続」の正答率が、「結果の状態」の正答率を大きく上回っている。先行研究でも繰り返し述べられているように、「動作の持続」＞「結果の状態」という結果が、指し示す時点の違いに関わらず得られることがわかった。

次に、「動作の持続」用法の「現在」「過去」「未来」における正答率を、習熟度別にまとめたものを図 4-6 に示す。

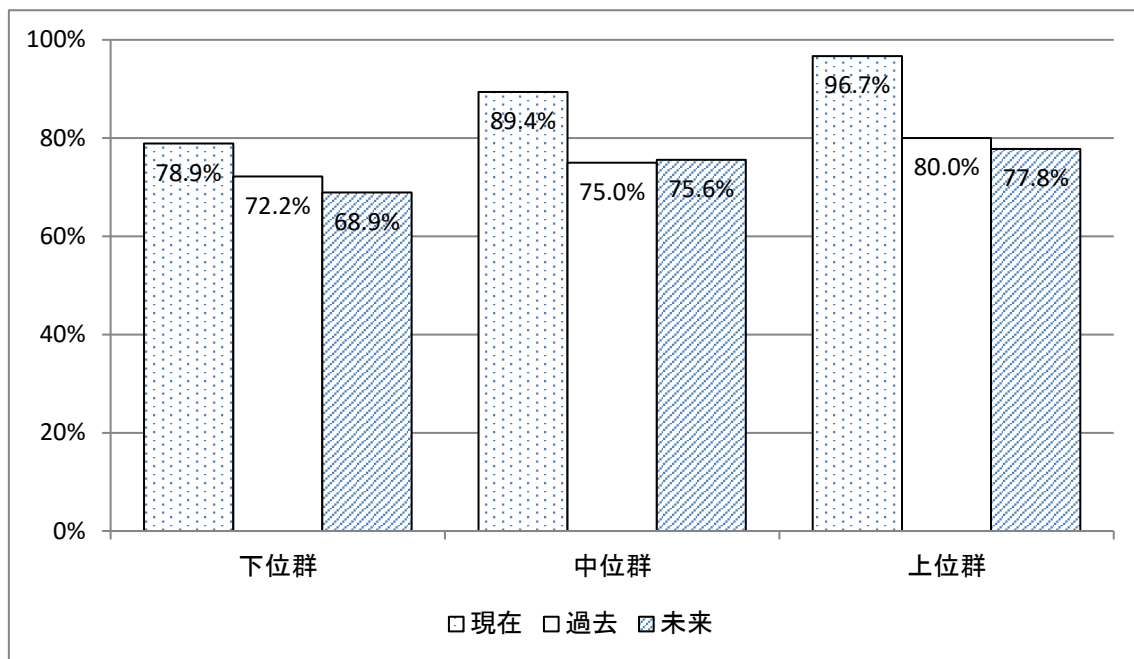


図 4-6 習熟度別に見た「現在・過去・未来」の「動作の持続」の正答率

「動作の持続」の正答率は、下位群でも、「現在」「過去」「未来」それぞれの文脈において 78.9%、72.2%、68.9%と比較的高い正答率を示している。「現在」については、習熟度の上昇とともに正答率も上がっている（78.9%→89.4%→96.7%）。しかし、「過去」「未来」については、習熟度の上昇とともに正答率が上がってはいるが、上り幅は「現在」より小さいと言える（過去：72.2%→75.0%→80.0%、未来：68.9%→75.6%→77.8%）。

「動作の持続」の正答率について、習熟度（対応なし：下位群・中位群・上位群）×時点（対応あり：現在・過去・未来）の 2 元配置分散分析を行った結果、習熟度および時点の主効果（習熟度： $F(2, 177)=5.65, p<.004$ ；時点： $F(2, 354)=18.11, p<.001$ ）が有意であった。交互作用は有意ではなかった（ $F(4, 354)=0.85, p=.493$ ）。

習熟度的主効果が有意であったため、習熟度の 3 水準についてライアンの方法による多重比較を行った。その結果、下位群と上位群の間に有意差（ $p<.001$ ）が見られたが、下位群と中位群（ $p=.162$ ）、中位群と上位群（ $p=.053$ ）には有意差がなかった。次に、時点の主効果も有意であったため、時点の 3 水準についてライアンの方法による多重比較を行った。その結果、「現在」と「過去」、「現在」と「未来」の間に有意差が見られた（ともに $p<.001$ ）。しかし、「過去」と「未来」に差はなかった（ $p=.520$ ）。つまり、3 つの時点の難易度は、「未来」「過去」が難しく、現在が易しいという結果が得られた。

次に、「結果の状態」についてまとめる。「結果の状態」用法の「現在」「過去」「未来」における正答率を、習熟度別にまとめたものを図 4-7 に示す。

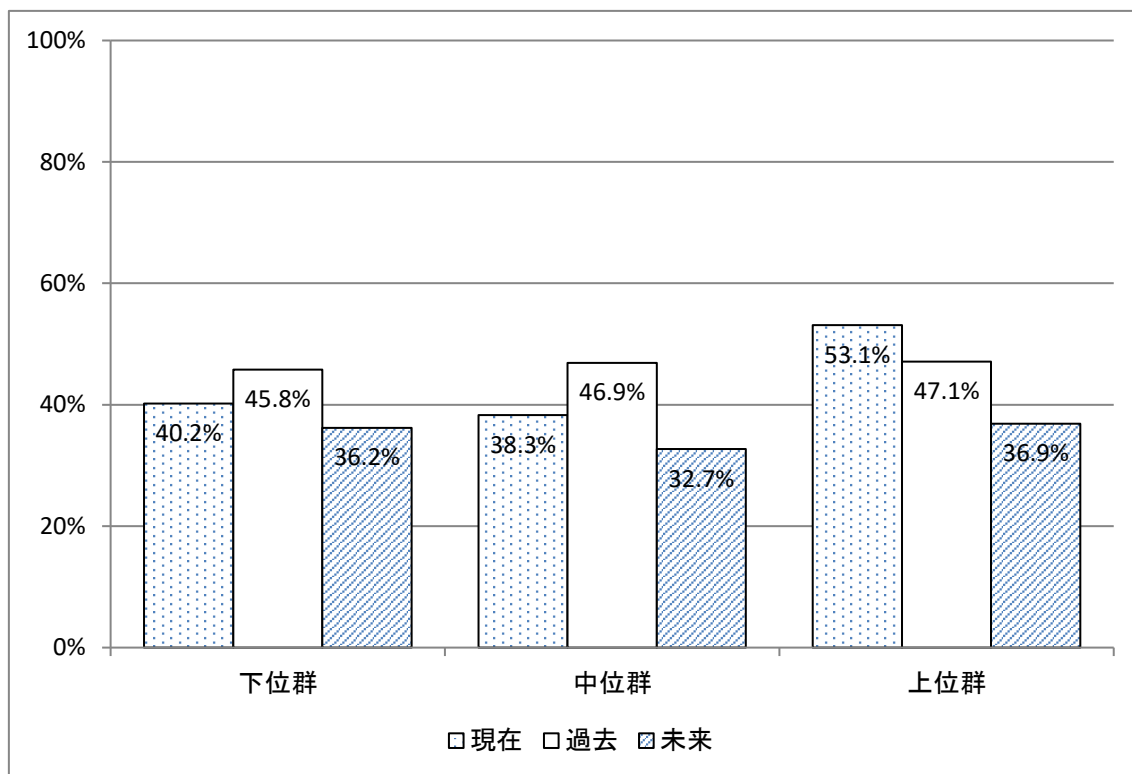


図 4-7 習熟度別に見た「現在・過去・未来」の「結果の状態」の正答率

上位群において「現在」が 53.1%を示している以外は、すべて正答率が 5 割に満たないことがわかる。下位群、中位群においては、「過去」の正答率が「現在」「未来」より高くなっているが、習熟度が上がっても、正答率自体にはほとんど変化がない（45.8%→46.9%→47.1%）。下位群と上位群の間に正答率の変化が見られない点では、「未来」も同様であると言える（36.2%→32.7%→36.9%）。

「結果の状態」の正答率について、習熟度（対応なし：下位群・中位群・上位群）×時点（対応あり：現在・過去・未来）の 2 元配置分散分析を行った。その結果、習熟度および時点の主効果（習熟度： $F(2, 177)=4.42, p=.013$ ；時点： $F(2, 354)=23.96, p<.001$ ）が有意であり、さらに交互作用も有意であった（ $F(4, 354)=4.19, p=.002$ ）。交互作用が有意であったため、下位検定を行った。

まず、習熟度の各水準における時点の単純主効果の検定を行ったところ、すべての水準において有意差が認められた（下位群： $F(2, 354)=5.30, p=.005$ ；中位群： $F(2,$

354)=11.63, $p<.001$; 上位群 : $F(2, 354)=15.42, p<.001$)。各水準に対して、ライアンの方法による多重比較を行ったところ、下位群においては、「過去」の正答率が「未来」より高かった ($p=.001$)。中位群においては「現在」と「過去」、「過去」と「未来」の間に有意差が見られた(「現在」と「過去」は $p=.004$ 、「過去」と「未来」は $p<.001$)。そして上位群においては、「現在」の正答率が「未来」より高く ($p<.001$)、「過去」の正答率が「未来」より高かった ($p<.001$)。しかし、「現在」と「過去」の正答率の差は有意でなかった ($p=.041$)。

時点の各水準において、習熟度の単純主効果の検定を行った結果、「現在」において、習熟度の有意な単純主効果が認められた(現在 : $F(2, 531)=11.90, p<.001$; 過去 : $F(2, 531)=0.08, p=.921$; 未来 : $F(2, 531)=0.92, p=.396$)。ライアンの方法による多重比較を行ったところ、上位群の正答率が下位群、中位群より有意に高かった(ともに $p<.001$)。一方、下位群と中位群には有意差がなかった ($p=.570$)。

習熟度の上昇に伴う正答率の上昇は、「現在」においてのみ見られた。つまり、「過去」「未来」に比べて、「現在」の習得のほうが進みやすいと言える。正答率のみに注目すれば、いずれの習熟度においても「過去」のほうが「未来」より高い正答率を示している。しかし、習熟度が上がっても正答率に変化がないことから、「過去」「未来」の難易度は、「結果の状態」における3つの時点の難易度は、「未来」「過去」が難しく、現在が易しいと言える。

SRE の観点から見れば、「動作の持続」では、参照時 (R) において認識すべきものは、動きのあるものである。例えば、「ご飯を食べている」であれば、「食べる」という動作が起こっており、「勉強している」であれば、本を読んだり、書いたりしているという動作が起こっている。さらに、中国語においても $R=E$ であることから、「動作の持続」の正答率が高くなっていることが説明できる。稲垣 (2015) では、「動作の持続」の「ている」で、「現在」が最も先に習得される(崔 (2009) において正答率が 80% を超えることを指す) 理由を、「テイルの用法のうちプロトタイプ性が最も高いのが「動作の持続」(現在) であるため」としている。SRE で「現在」を表すのは $S=R$ の関係であることを既に述べたが、テンスがないとされる中国語を母語とする日本語学習者の場合、「現在」における「動作の持続」を習得するには、 $R=E$ を、発話時 (S) に置く必要がある。しかし、中国語においても“在”(同時) や“已经”(既に) など、話者がある時点を基準として相対的な時間関係を表す副詞を用いるような場合や、経験を表す“过”を用いる場合など、最も一般的には事態を発話時に置くと言われる(木村 1982、

Smith & Erbaugh 2005)。このことから、 $R=E$ を S と一致させ、 $S=R=E$ によって表される「現在」の「動作の持続」が最も正答率が高くなると考えられる。

「動作の持続」に関しては、下位群の学習者でも「現在」「過去」「未来」それぞれの文脈において 78.9%、72.2%、68.9%と比較的高い正答率を示していた。崔（2009）では、同じく「動作の持続」で、「現在」「過去」「未来」それぞれの文脈における正答率は、32.0%、14.0%、26.0%と、本研究の結果とは大きく異なっている。崔（2009）ではこの項目で 4 つの動詞を用いて調査しており、そのうちの 3 つの動詞を用いて課題を作成した本研究とは厳密には比較できないとは言え、この下位群における正答率の開きはどのように説明できるだろうか。ここでは、既に述べた、学習者の習熟度の判断の仕方がその一因として考えられる。崔は、調査課題の得点によって下位群、中位群、上位群を分けており、課題と別の習熟度判断用のテストを用いてはいない。よって、崔（2009）における下位群とは、「調査課題の正答率が低かった対象者のグループ」を指している。よって、本研究の結果との開きが大きくなっていると考えられる。ただし、中位群でも本研究のほうが高い正答率が得られていることから、習熟度の分け方を差し引いたとしても、崔（2009）より本研究の対象者による結果のほうが高くなることが予想される。しかし、これ以上の要因については、課題の構成⁴³や、学習者の特性⁴⁴などが影響している可能性が考えられるため、これ以上の検証はできない。

「結果の状態」については、習熟度の上昇とともに正答率も上昇したのは「現在」のみであった。 SRE で表示すれば、「結果の状態」では $E-R$ となり、出来事時に起った変化の結果生じたなんらかの状態を、 E 時より後に置かれる R 時に認識しなければならない。「動作の持続では、 E と R が同時であり ($R=E$)、 E 時においては、動きのある事態であるわけであるから、話者が E 時を認識しやすいとも考えられる。一方の「結果の状態」では、 R 時において認識しなければならないものは、変化後の、なんらかの「状態」である。それは静的なものであるため、「結果の状態」の成立に必要な、変化が起こる出来事時 (E) のほうが、話者にとっては目立つものであると言える。中国語でも $R=E$ が基本であることから、この二つを切り離す必要がある「結果の状態」の習得は困難であると言える。

「現在」のみ、正答率が習熟度とともに上昇したことについては、「動作の持続」で

⁴³ 本研究の調査課題は一つの会話文において一つの空欄を設けている。崔（2009）の調査課題では、一つの会話のなかでいくつかの空欄が設けられているものがあるため、ある項目の選択が他の項目の選択に影響することもあると考えられる。

⁴⁴ 崔（2009）では日本語学習歴 8 年以上の超級学習者も対象者に含まれていた。

も述べたように、プロトタイプ性が最も高いこと（許 2005、稲垣 2015）、テンスのない中国語においても、基本的には事態を発話時現在から見て述べること（木村 1982、Smith & Erbaugh 2005）などが考えられるが、「過去」「未来」で、ほとんど正答率に変化が見られない点はどのように説明できるだろうか。まだ習熟度が低いから、というのでは説明したことにならないだろう。これについては、崔（2009）や稲垣（2015）が述べているように、SRE の観点から見れば、SRE の 3 点がそれぞれ独立しているため、すべての点を同時に認識するのが難しいためであると考えられる。日本語の「ている」「ていた」は、「てい-」がアスペクトを、「る」「た」がテンスを表しており、テンスとアスペクトを同時に表す際に、いずれかの点が一致している方が、話者の負担が軽いことを想像することはそう難しくないだろう。ここでは、先行研究でも指摘されているように、「結果の状態」習得の困難さが改めて確認されたと言える。

4.3.3 学習者の母語の動詞タイプから見た「結果の状態」の習得

続いて最後に、「結果の状態」習得における、中国語の動詞タイプの違いによる影響について検討する。まず、習熟度別に、各時点（現在・過去・未来）における動詞タイプ 1、動詞タイプ 2 の正答率をまとめる（下位群：図 4-8、中位群：図 4-9、上位群：図 4-10）。

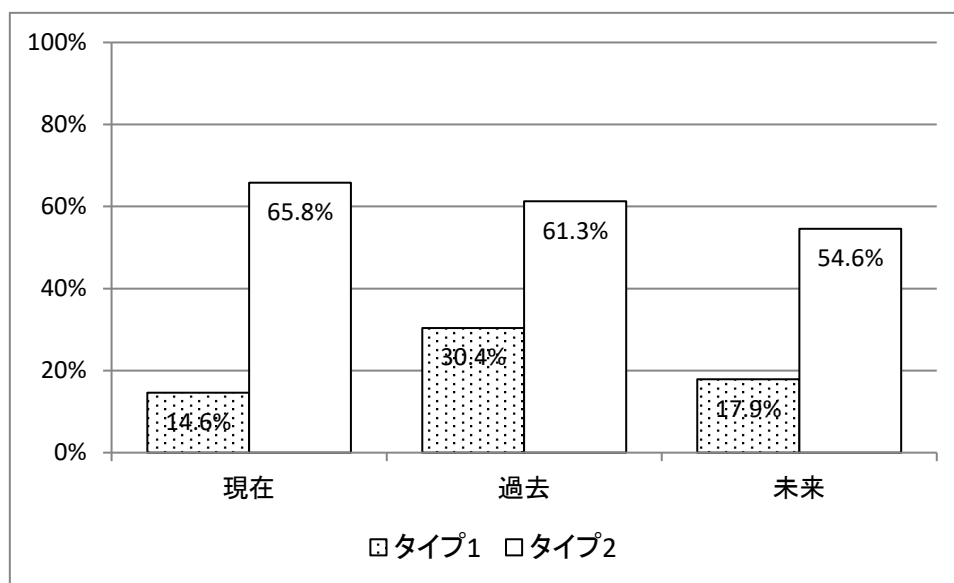


図 4-8 下位群における動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率

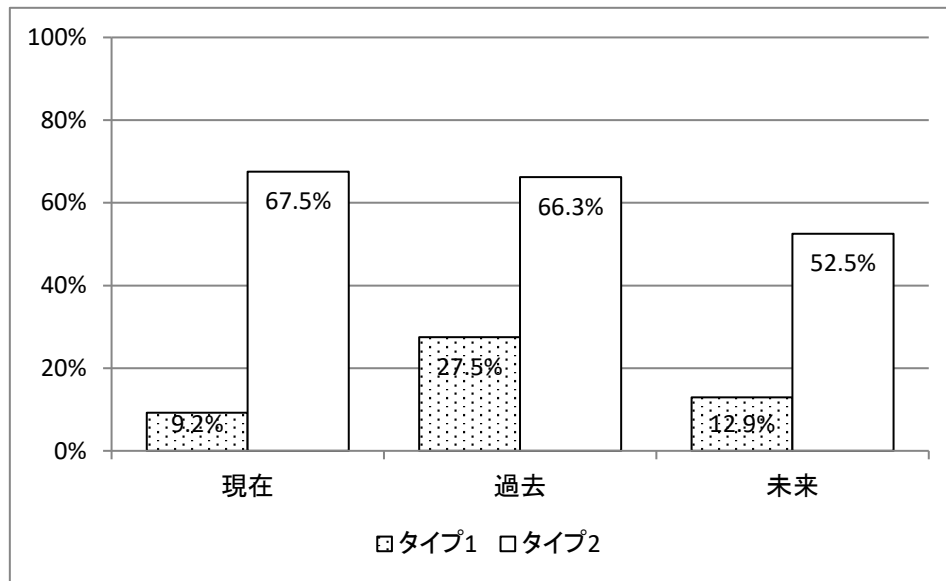


図 4-9 中位群における動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率

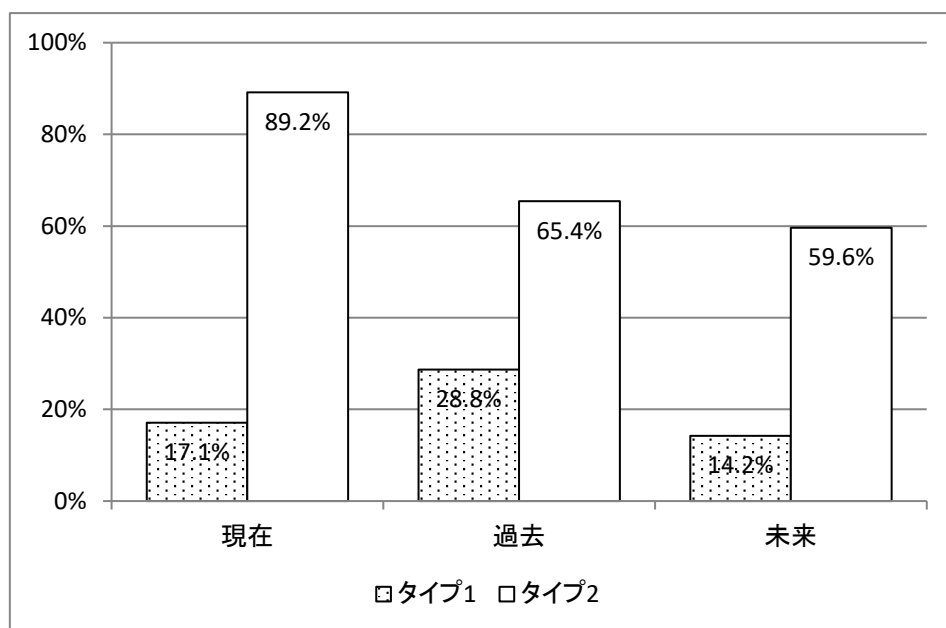


図 4-10 上位群における動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率

いずれの習熟度においても、さらには、いずれの時点（現在・過去・未来）においても、動詞タイプ2が動詞タイプ1を大きく上回る正答率であることが見て取れる。

前節で、「動作の持続」より「結果の状態」のほうが、難易度が高い、と述べたか、日本語で「結果の状態」とされるものでも、中国語において対応する動詞のタイプによって、正答率に開きがあることがわかる。図 4-11 に「現在」における、「動作の持続」「結果の状態（タイプ1）」「結果の状態（タイプ2）」の正答率の比較を示す。図 4-12 に、

「過去」における、「動作の持続」「結果の状態（タイプ1）」「結果の状態（タイプ2）」の正答率の比較を示す。そして、図 4-13 に「未来」における、「動作の持続」「結果の状態（タイプ1）」「結果の状態（タイプ2）」の正答率の比較を示す。

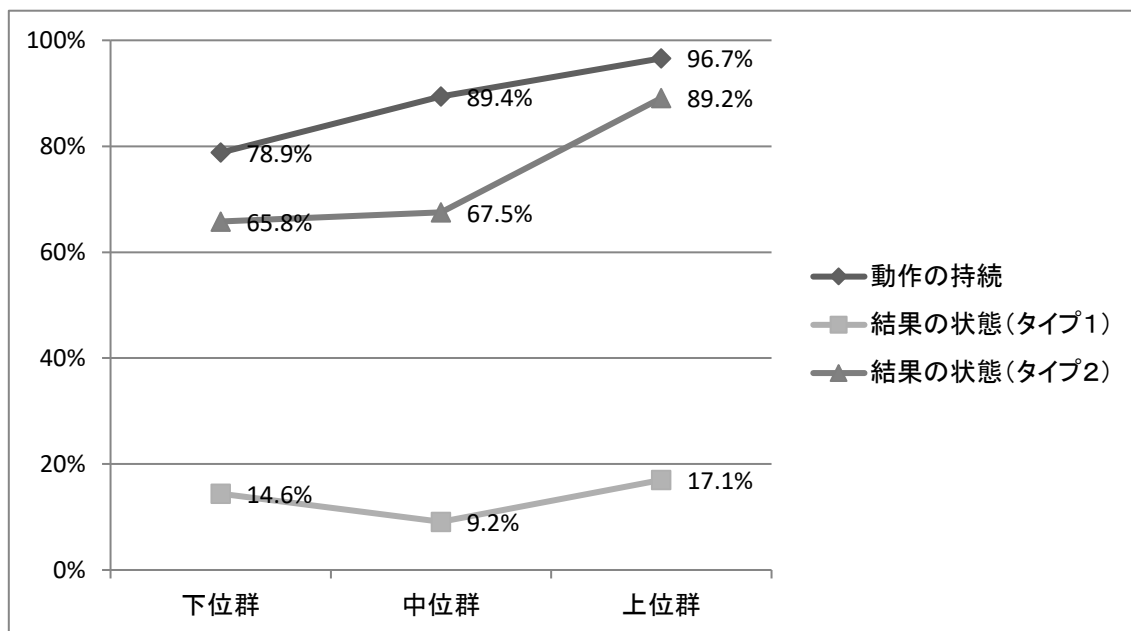


図 4-11 「ている」（「現在」）の正答率

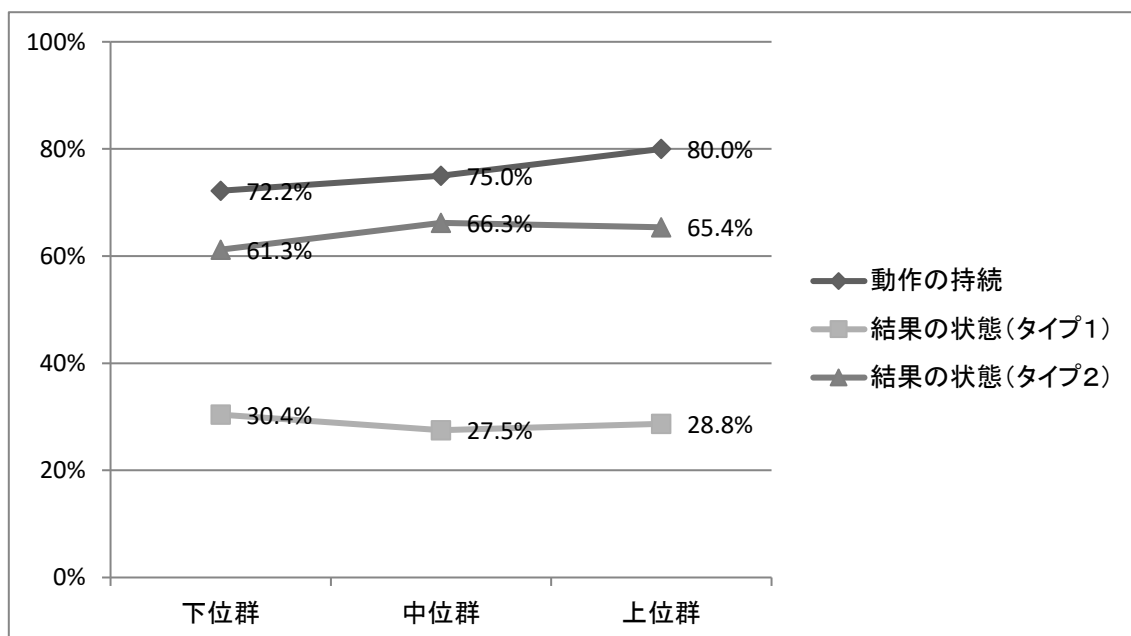


図 4-12 「ていた」（「過去」）の正答率

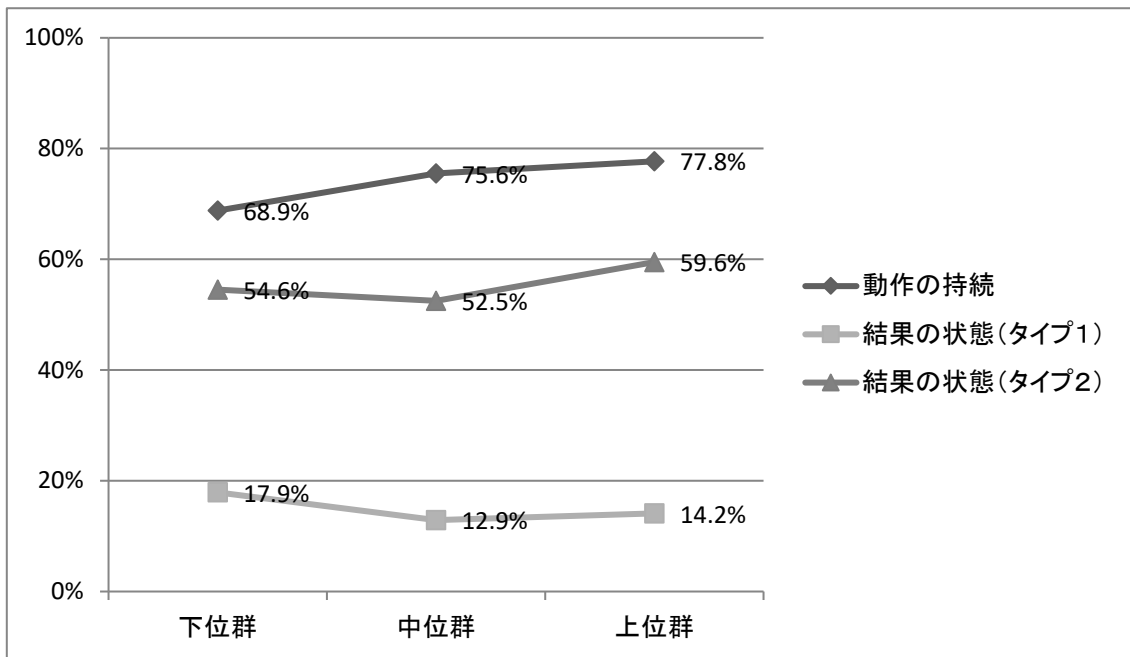


図 4-13 「ている」(「未来」)の正答率

「現在」「過去」「未来」いずれの時点においても、「動作の持続」の正答率が最も高く、タイプ1動詞の「結果の状態」の正答率が最も低いことがわかる。日本語における「結果の状態」と同様の用法であっても、対応する中国語の動詞のタイプによって、大きく正答率に差があることがわかる。

習熟度(対応なし：下位群・中位群・上位群)、動詞タイプ(対応あり：タイプ1・タイプ2)、時点(対応あり：現在・過去・未来)の3要因の分散分析を行った。すべての主効果(習熟度： $F(2, 177) = 4.42, p = .013$ ；時点： $F(2, 354) = 23.96, p < .001$ ；動詞タイプ： $F(1, 177) = 831.65, p < .001$)、1次の交互作用が有意であった。2次の交互作用は有意ではなかった($p = .194$ ns)。1次の交互作用が有意であったため、下位検定を行った

まず、習熟度の各水準における時点の単純主効果を検定した。時点の各水準における動詞タイプの単純主効果が有意であった（現在： $F(1, 531)=640.61, p<.001$ 、過去： $F(1, 531)=219.13, p<.001$ 、未来： $F(1, 531)=287.336, p<.001$ ）。習熟度の各水準における動詞タイプの単純主効果も有意であった（下位： $F(1, 177)=209.72, p<.001$ 、中位： $F(1, 177)=277.78, p<.001$ 、上位： $F(1, 177)=353.47, p<.001$ ）。このことから、いずれの時点においても、いずれの習熟度においても動詞タイプ 2 のほうが動詞タイプ 1 より高い正答率であることがわかる。

次に、動詞タイプ 2 において、習熟度の単純主効果が有意であったので（ $F(2, 354)=7.81, p<.001$ ）、多重比較を行った。その結果、下位群と上位群（ $p<.001$ ）、中位群と上位群（ $p<.001$ ）の間に差が見られた。動詞タイプ 2 に関しては、習熟度の上昇とともに、「結果の状態」の正答率が上がると言える。

また、動詞タイプの各水準における時点の単純主効果が有意であったため（動詞タイプ 1： $F(2, 708)=26.72, p<.001$ 、動詞タイプ 2： $F(2, 708)=32.46, p<.001$ ）、時点の各水準における動詞タイプの多重比較を行った。その結果、「現在」と「過去」（ $p<.001$ ）、「過去」と「未来」（ $p<.001$ ）の間には有意に差があったが、「現在」と「未来」の間には差がなかった（ $p=.548$ ）。このことから、動詞タイプ 1 については、未来＝過去→現在であると言える。しかし、動詞タイプ 2 に関しては、多重比較の結果、「現在」と「過去」、「過去」と「未来」、「現在」と「未来」の間に差が見られ（ $p<.001$ ）、未来→過去→現在の順で正答率が高くなることがわかった。

研究課題 3 については、対応する中国語の動詞のタイプによって、「結果の状態」の難易度が変わることが明らかになった。具体的には、いずれの習熟度においても、また「現在」「過去」「未来」いずれの時点においても、タイプ 1 よりタイプ 2 の正答率が高くなっていた。まずタイプ 1 について述べる。タイプ 1 の動詞では、最も正答率が高いものでも 30%ほどと、全体として低く、適切な形を選択できていなかった。「ている」以外に選択されていた主な選択語形を 4-9 に示す。

表 4-9 「結果の状態」タイプ 1 において選択の多かった語形（数字は%）

結果の状態	テンス	形式	下位群	中位群	上位群
タイプ 1	非過去（現在）	た	56.7	63.3	60.8

		ている	14.6	9.2	17.1
		た	60.8	66.7	62.5
	過去	ていた	30.4	27.5	28.8
		る	25.0	28.8	31.7
	非過去（未来）	た	42.9	42.9	40.4
		ている	17.9	12.9	14.2

「現在」「過去」の文脈においては学習者の習熟度にかかわらず、60%前後でタ形が選択されていることがわかる。「未来」の文脈においては、「る」の選択も25～31.7%見られるものの、「た」の選択が40%を超えている。これは、中国語を母語とする日本語学習者にとって、「た」が「過去」を表すマーカーという認識はありながらも、「た」＝“了”という、「完了」マーカーとしての認識も強いためであると思われる。続いて、「未来」の文脈において「た」の選択が多かった項目と習熟度別の選択語形の割合を（7）に示す。

（7）「未来」の文脈で「た」の選択が多い項目と習熟度別の選択語形（数字は%）

学校が終わりました。田中さんとパクさんはいつも自転車と一緒に帰ります。でも、今日パクさんには、自転車がありません。

田中：パクさん、自転車は？

パク：昨日、リーさんに貸しました。

田中：あの人は物を大切にしないから、返してもらうときには、自転車が_____か
もしませんよ。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

	下位群	中位群	上位群	統制群
る	18.3	28.3	28.3	0
た	68.3	51.7	46.7	0
ている	5.0	8.3	11.7	98.1
ていた	8.3	11.7	13.3	1.9

日本語母語話者の 98.1% (53/54 名) が「ている」を選択していたのに対して、中国語を母語とする日本語学習者は、習熟度が上がるにつれ割合が下がってはいるものの、上位群においても 46.7% (28/60 名) が「た」を選択している（下位群→中位群→上位群：68.3%→51.7%→46.7%）。習得の初期において、学習者はテンスだけ有するとした崔（2009）では、未来の文脈における、「た」の高い選択率を説明できない。この項目については、さらに「る」の選択も 2～3 割程度見られ、単に「未来」と取るか、「完了」と取るかで学習者の選択が分かれていることがわかる。

続いてタイプ 2 について述べる。タイプ 1 とは対照的に、タイプ 2 では、「ている」の選択が低いものでも 50%を超えており、「現在」に関しては上位群で 89.1%と高い正答率となっている。タイプ 1 においては顕著であった、「現在」「未来」における「た」の選択率はタイプ 1 より低く、さらに習熟度が上がるにつれてその選択率も徐々に低くなっている（「現在」における「た」の選択率：14.2%→11.3%→4.6%、「未来」における「た」の選択率：8.8%→4.2%→2.1%）。

R 時において、捉えなければならないものは、 $R \subset E$ と $E = R$ の場合、「動作」で動きのあるものである。一方、 $E \cdot R$ は変化の結果生じた「状態」で、動きのないものである。中国語の変化動詞は、完了を表す“了”とは共起できても、持続を表す“着”とは共起できない動詞に大別されることはこれまで既に繰り返し触れてきたが、“着”と共起できる動詞か否かというのは、中国語の発想として、結果状態が維持し得るものかどうかにかかわっている。井上（2002：16）の言葉を借りれば、「中国語の感覚からすれば、「死ぬ」に継続形「死んでいる」が存在することは決して「あたりまえ」のことではない」。「死ぬ」のように変化の局面を点でしか持たないような動詞の場合、中国語で“着”が表すような変化を前提とした持続を表すことはできないのである。逆に考えると、“着”と共起可能な変化動詞は、母語においても、変化の結果生じた状態を捉えて言語化していると言えるため、日本語習得においても、類似した捉え方をする「ている」の正答率が上昇すると言える。

“着”は、身体移動を表す動詞や、定位動詞と共起し、出来事の結果状態を述べることができる。しかし、その表す意味は、極めて状態に近いとされる。参照時以前の変化を前提としながらも、出来事時（E）は参照時（R）における「存在／状態」とであるとされる。この点において、参照時以前の変化に視点を置きながら（ $E \cdot R$ ）、参照時における

(結果の) 状態を言語化する日本語の「結果の状態」の「ている」と、中国語の“着”とは異なる(下地 2004)。Smith & Erbaugh (2005) も、“着”(および“在”)においては、E と R は同時であると述べており、こうした点からも、先行研究で指摘されている「ている」を用いる文脈における「た」の選択が、本研究におけるタイプ 2 では少なくなると考えられる。習熟度が上がるにつれて「た」選択がなくなった項目を(8)に示す。

(8) タイプ 2 の「結果の状態」の項目例と習熟度別の選択語形(数字は%)

夜の 8 時です。リーさんはまだ食事をしていません。そこで、近くのレストランに電話しています。

リー：もしもし、今からそちらで食べたいんですが、お店はまだ_____か？

店員：はい、当店は夜 10 時までの営業となっております。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

	下位群	中位群	上位群	統制群
る	20.0	20.0	10.0	0
た	8.3	5.0	0.0	0
ている	60.0	73.3	86.7	100
ていた	11.7	1.7	3.3	0

(8) では、下位群の段階において既に 60% (36/60 名) が「ている」を選択しており、習熟度が上がるにつれて正答率の上昇が見られる (60.0%→73.3%→86.7%)。変化を前提としているためか、下位群においては多少の「た」の選択が見られはするものの、タイプ 1 に比べてその傾向は強くなく、習熟度の上昇とともに割合は減少し、上位群においては「た」の選択は 0%となっている。

4.4 第 4 章のまとめ

本章では、習熟度の異なる日本語学習者を対象に、「現在」「過去」「未来」における「動作の持続」と「結果の状態」の習得に関する調査を行った。まず研究課題を再掲す

る。

- 研究課題 1 義務的文脈において、「る」「た」を正しく選択することができるか。
- 研究課題 2 「現在」「過去」「未来」におけるテイル形（「動作の持続」と「結果の状態」）に習得難易度の差があるか。
- 研究課題 3 対応する中国語の動詞のタイプによる「結果の状態」の難易度の差が見られるか。

以下に、本章で明らかになったことをまとめる。

- 研究課題 1 「る」「た」の選択に誤りが見られる。しかし、習熟度の上昇に伴い、義務的文脈における正答率は上がっていく。しかし、「現在」「過去」「未来」にかかわらず「結果の状態」における「た」、「未来」の「ている」文脈における「る」の選択傾向は上位群においても強い。
- 研究課題 2 「動作の持続」では、未来＝過去→現在、「結果の状態」では未来＝過去→現在の順に正答率が上がっていく。下位群における正答率の高低にかかわらず、習熟度が上がるにつれて正答率が上がっていくのは、「現在」である。「過去」「未来」の難易度の差は、テンスの関係を表す S と R の関係において、R を S から切り離すことの困難さに起因する。
- 研究課題 3 いずれの習熟度においても、対応する中国語の動詞のタイプによって、「結果の状態」の難易度が変わる。タイプ 1 では、「現在」「過去」「未来」にかかわらず正答率は低く「た」の選択が多い。タイプ 2 では、下位群から正答率は高く、「た」の選択率も低い。

中国語を母語とする日本語学習は、習熟度の低い段階においては、「る」「た」の義務的文脈においてテンス的（過去か非過去か）にも、アスペクト的（完結か継続か）にも判断にばらつきが見られた。しかし、習熟度の上昇に伴い、過去か非過去かという判断の揺れは解消されていった。

また、「現在」「過去」「未来」の時点の間に見られる難易度の差については、「動作の持続」においても「結果の状態」においても未来＝過去→現在の順に正答率が上がると

いう結果が得られた。習得の早い段階（本章の下位群）においては「現在」「過去」の間に差が見られず、次の段階においては「過去」のほうが高い正答率を示してはいたものの、習熟度の上昇という点から見れば、「現在」のみに伸びが見られた。

さらに、「結果の状態」の習得においては、学習者の母語である中国語の分類に基づく動詞タイプ間に差が見られた。日本語においては「結果の状態」とまとめられるものでも、対応する中国語の動詞の性質によって差が見られたことは、「結果の状態」の習得において母語の影響があることを示している。中国語の発想において変化の局面に焦点が当たるタイプ 1 と、変化後の結果状態が維持しうるタイプ 2 の区別が、母語の影響を指摘するのに有効な分類であったと言える。その差は、R 時において捉えるものの性質の違いによるものであると考えられることを述べた。

第5章

「ている」「た」「ある／いる」の使い分け

－調査紙作成と日本語・中国語の母語話者データの収集－

第3章および第4章では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、「る」「た」の習得状況、「現在」「過去」「未来」におけるテイル形の習得難易度の違い、そして、「結果の状態」のテイル形における母語の影響について考察した。本研究の後半部に当たる本章（第5章）および第6章では、本研究におけるもう一つの核をなす「ている」「た」「ある／いる」の使い分けを、日本語母語話者、中国語母語話者、そして中国語を母語とする日本語学習者の産出タスクの結果から探っていく。

5.1 先行研究と研究課題

日本語のアスペクト形式「ている」には様々な用法があり、その基本的な用法は「動作の持続」と「結果の状態」の2つである。この2つのうち、先行研究（黒野 1995; 許 1997; 小山 2003 など）では、日本語学習者にとって習得が困難なのは「結果の状態」のほうであると指摘されている。「ている」の習得に関しては、これまでにその普遍性と同時に、母語による影響も報告されている。中国語を母語とする日本語学習者の「ている」習得に目を向けてみると、「ている」習得の際に見られる顕著な誤用として、(1a) および(2a) のように状態変化動詞と共起する「結果の状態」の「ている」を用いるべきところで、(1b) および(2b) にようにタ形を用いるものがある。このことは既に繰り返し述べた通りである(張 2001; 小山 2003; 許 1997; レビューは稲垣 2011 を参照)。

(1) (靴下に穴が開いていることに気付いて)

a. 靴下が破れている。

b. *靴下が破れた。

(2) (皿が割れていることに気付いて)

a. 皿が割れている。

b. *皿が割れた。

先行研究では、こうした誤用の原因として、中国語では同様の場面で、日本語のタ形に相当する“了”（袜子破了、盘子破了）を用い、「ている」に相当する“着”は使えない（*袜子破着、*盘子破着）という指摘がなされている。こうした先行研究からも、日本語の「結果の状態」の「ている」を習得する際、問題となるのは「た」との対立であるということが広く認識されてきたことがわかる。

しかし、タ形のほかに、中国語を母語とする日本語学習者にとっては、「ている」と「ある／いる」の使い分けが問題になるとする論考も見られる。陳（2009）は、(3)、(4)のように日本語で「結果の状態」の「ている」を用いるべき場面であっても、中国語母語話者は、母語である中国語の発想から見て、「存在」を表す「ある／いる」を用いる傾向があると主張した。

(3) （机の下に財布を見つけて）

a. 財布が落ちている。（*钱包掉着。）

b. ?財布がある。（有钱包。）

(4) （玄関で見慣れない靴を見て）

a. お客が来ている。（*客人来着。）

b. ?お客がいる。（有客人。）

こうした問題意識から、陳は、どのような「結果の状態」の「ている」が「ある／いる」との使い分けで問題になるのかを明らかにするための調査を行った。

調査は日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象に、提示した場面に発話を記入する方法で行われた。調査の結果、日本語母語話者が「結果の状態」の「ている」、学習者が「ある／いる」を使用する傾向にある場面があることがわかった。両者の使用に違いが見られた場面の特徴について、陳は、日本語母語話者の使用において「来る、落ちる、入る」などの移動を表す動詞が「ている」と用いられているという点を挙げている。この点について陳は、移動を表す動詞の場合、中国語母語話者は移動後の「存在」に注目するため、中国語で「存在」を表す“有”に対応する日本語の「ある／いる」を用いると主張している。このような観察に基づき、陳は移動動詞と共起する「結果の状態」の「ている」は「ある／いる」と類義関係にあると主張した。

庵 (2010) は、陳 (2009) の提案を発展させ「存在型」「非存在型」という二つの区別を用いることで、移動動詞以外の場合なぜ中国語母語話者は「結果の状態」の「ている」の代わりに「た」を用いるのかも説明できる枠組みを提案した。庵 (2010) は、「変化動詞」(Vendler 1957 の到達動詞) のテイル形を、変化が起こった後、主体(ガ格)が存在するようになるかどうかで二分している。(3a)、(4a) では「財布が落ちた結果、財布が道に存在する」、「お客さんが来た結果、お客さんが家に存在する」という関係が成立するので、このような位置変化を表す移動動詞のテイル形は「存在型」と呼ばれる。一方、(1a)、(2a) では同様の関係が成立しないので、このような状態変化動詞のテイル形は「非存在型」と呼ばれる。庵は、中国語母語話者がテイル形の代わりにタ形を使いやすいのは、「非存在型」の場合であり、「存在型」の場合は、「移動」に伴う位置変化の結果、移動先に存在することが注目されやすいため」(p.47)、中国語母語話者は「ている」の代わりに「ある／いる」を使いやすい、と述べている。

このように、庵 (2010) は「存在型」と「非存在型」の区別により、中国語母語話者が「結果の状態」の「ている」を習得する際の異なる誤用パターン(「ある／いる」と「た」)を統一的に説明しており、前者のみを扱った陳 (2009) を一歩進めたものである。

稲垣 (2013) は、日本語で「結果の状態」の「ている」が使われる状況で、中国語では「非存在型」動詞の場合は「変化」が着目され“了”(盘子破了)が用いられ、「非存在型」の場合は「存在」が着目され“有”(有客人)が用いられるとする庵 (2010) の提案に修正を加えた。稲垣はまず、「結果の状態」の「ている」は状態／位置「変化」(割れ、来て-)と「変化」した結果としての「状態」／「存在」を同時に言語化する形式であるのに対し、中国語では、「変化」と「状態」／「存在」を同時に表すことができず、どちらか一方(“了”または“有”)のみが言語化される(客人来了 “お客が来た”／有客人 “お客がいる”)と分析した。この分析に基づき、中国語母語話者が「結果の状態」の「ている」を習得する際の困難点は、この2つの意味要素を同時に言語化することであると主張した。その根拠として、稲垣は、陳 (2009) のデータには、「存在型」であっても“了”を用いる誤用(*財布が落ちた)も見られること、「非存在型」であっても中国語で“着”(电灯亮着)が使える(つまり日本語の「ている」と同様に「変化」と「状態」が同時に表せる)場合、「ている」(電気がついている)の使用率が高いことを挙げている。

このように、稲垣の提案は、中国語母語話者の「結果の状態」の「ている」の習得における誤用パターンを、中国語との対照に基づき、より包括的に説明していると言える。

上記したように、陳（2009）の研究は、中国語母語話者が「移動動詞＋ている」の場面において「ている」の代わりに（「た」ではなく）「ある／いる」を用いる傾向にあるという新たな視点を提供した点で意義深い。そして、陳はこれを中国語の転移としている。しかし、実際に陳が調査に用いた場面で、中国語母語話者はどのような中国語を用いるのかは必ずしも明白ではない。陳はこの点を確認するために、中国語母語話者 19 名を対象に同様の調査を行い、その結果を注釈に提示している（陳 2009:11）。しかし、その提示の仕方は、“有”と“着”の使用頻度に関わる断片的なものである。特に、庵（2010）と稲垣（2013）の主張の観点からは、「た」に対応し「変化」のみを表す“了”の使用も問題になるが、これに関するデータは示されていない。

さらに、この中国語の調査が、もとの日本語の調査と同等な条件で行われたのかに疑問を呈するデータも存在する。陳（2009:11）は日本語の「手紙が来ている」と「電話が入っている」に対応する場面で、それぞれ 13 名の中国語母語話者が、「信」と「電話」を使用したと述べている。しかし、日本語の調査では、このような一語の回答を避けるため、これらの名詞のガ格が下線部の直前に置かれていた（「手紙が_____」、「電話が_____」）。名詞のガ格が下線部の直前にあることで、下線部には動詞を記入するのだということが調査対象者に伝わり、動詞の解答が得られる。日本語のこれらの項目においては、動詞部分の解答を得るための配慮がなされていると言えよう。しかし、中国語で一語文の回答が見られたことは、中国語調査では同様の配慮がなされておらず、得られたデータは、日本語調査と同様の状況で中国語ではどのような表現が用いられるかを正確に反映していないことになる。そうであれば、この母語データは、中国語母語話者の日本語習得における母語の影響を議論する際のベースラインとしては不十分である。

陳（2009）の中国語調査にはこのような問題があった。そのため、中国語では「移動動詞＋ている」の場面で「ある／いる」を用いるという陳の主張は説得的とはいえない。本研究では、陳（2009）の産出タスクを参考に、日本語と中国語における比較可能なデータ収集を可能にする調査タスクを開発した。さらに、そのタスクを用いて両言語の母語データを収集し、比較検討を試みる。

本研究における研究課題は、「ている」と「ある／いる」との使い分けができるかを明らかにすることであり、母語の影響という観点から分析を行う。ここでは特に、「結果の状態」

の「ている」の文脈において、「ある／いる」の誤用が見られるのか。見られるとすれば、陳（2009）の主張するような中国語の影響なのかを探る。そこで、上述した先行研究の問題点を踏まえて以下の 2 つを研究課題とした。

研究課題 1 日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語母語話者は「存在」を表す“有”を用いるのか。あるいは“有”だけでなく「変化」を表す“了”も用いるのか。

研究課題 2 日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用いる場面で、中国語で「結果の状態」を表す“着”が使用可能な場合、中国語母語話者は“着”を用いるのか、あるいは「変化」を表す“了”を用いるのか。

研究課題 1 に関して、もし“有”（有客人）が使われれば、陳（2009）／庵（2010）の主張が支持され、もし“有”と“了”（客人来了）の両方が使われれば、稲垣（2013）の主張が支持される。研究課題 2 に関して、もし“着”（电灯亮着）が使われれば、稲垣（2013）の主張が支持され、もし“了”（电灯亮了“電気がついた”）が使われれば庵（2010）が支持される。なぜならば、庵の枠組みでは“亮”のような状態変化動詞は「非存在型」と考えられ、中国語では「変化」に視点が置かれ“了”が用いられると考えられるのに対し、稲垣の枠組みでは“着”と共起可能な状態変化動詞であれば、中国語でも“着”を用いて「変化」とその結果としての「状態」を同時に表せると考えられるからである。

5.2 調査方法

5.2.1 調査に用いた問題

この研究課題を明らかにするためには、上述したように、比較可能で妥当性の高い日本語と中国語の母語話者のデータが必要になる。調査文作成に際して、陳（2009）の問題点を踏まえて、以下の 2 点を考慮した。

まず、語順の問題である。本研究の目的は、日本語で「移動動詞＋ている」を用いる場面で中国語では“有”を用いるのか、あるいは“了”も用いるのかを明らかにすることである。そのため、調査文は、“有”も“了”も回答可能である必要がある。例えば (5) のように、日本語で「あ、財布が [落ちている／ある]」という場面を考えた場合、中

国語に同じ語順で訳すと“啊，钱包 [掉了／*有]”となり、“有”は使用できない。つまり、“啊，钱包_____”の形で空所補充させると、日本語の「財布がある」にあたる“有钱包”という回答はできなくなる。この語順の問題を解決するため、本調査では、形式的には“有”と“了”が両方使用できる（啊，地上 [钱包掉了／有钱包]）、存現文（場所句＋動詞＋名詞）を用いた。つまり、(5)のように、場所句の後ろを空所とし、「変化」／「存在」の対象となる語（钱包）を文外の括弧内に提示し、この語を使って文を完成させるようにした。

二つ目に、名詞一語による回答を避ける必要があった。本調査においては、日中両言語における動詞部分の回答が分析対象となるため、動詞部分の回答を確保する必要があった。陳の調査では、例えば、「あ、_____」のように下線のみが与えられていることによって、「あ、財布」といった名詞一語による回答が多くなっている項目があった。この問題を解決するため、本調査では、日本語では「主語＋ガ」（財布が）を与えることで、中国語では「場所句」（地上）を与えたうえで、日本語の主語に対応する語（钱包）を文外に示し、この語を用いて回答するように指示することで、動詞部分の回答の確保を試みた。

(5) 調査問題例⁴⁵

あなたが友人と道を歩いていたら、前に...	假设你和朋友走在路上，突然发现前方...
-----------------------	----------------------



あなた：あ、財布が_____。

你：啊，地上_____。（钱包）

⁴⁵ 調査に用いた絵は、陳（2009）同様、足立他（2004）のものを用了。

5.2.2 調査対象者および調査項目

調査の対象者は、中国語母語話者は中国の大学生 136 名、日本語母語話者は日本の大学生 58 名であった。中国語母語話者は、大学に入学したばかりで日本語学習の経験はなかった。中国語母語話者および日本語母語話者の属性を表 5-1 にまとめる。

表 5-1 調査対象者の属性

対象者	総人数 (名)	年齢 (歳)		
		範囲	平均	標準偏差
中国語母語話者	136	17-22	18.2	0.87
日本語母語話者	58	18-20	19.1	0.59

調査項目は、日本語の回答を想定して 2 タイプを含めた。タイプ a は日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、4 項目（財布が落ちている、お客が来ている、まっげが入っている、手紙が来ている）より成っていた。タイプ b は日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用いる場面で、4 項目（花が咲いている、席が空いている、電気がついている、ドアが開いている）より成っていた。これらの 4 場面は、対応する中国語において、少なくとも形式としては「結果の状態」を表す“着”も「変化」を表す“了”も使用可能（花开着／了、座位空着／了、灯亮着／了、门开着／了）であるものを選んだ。両言語における全 10 項目を図 5-2 に示す⁴⁶。ダミー問題として、日本語で「ある／いる」を用いる場面（2 項目）を加えた。さらに、日本語の調査では、「ている」の回答に片寄ることが予想されたため、ル形またはタ形を用いる場面（5 項目）を追加した。中国語の調査では同様の片寄りはないと考えられたため、これら 5 項目のダミー問題の追加はしなかった（調査に用いた全項目は付録⑤⑥を参照）。中国語の調査

⁴⁶ 実際はタイプ a にさらに 5 つの調査項目 i) 絵が掛かっている、ii) 電話が来ている、iii) 星が出ている、iv) 電話が入っている、v) 頭に何かついている）が存在したが、分析から除いた。理由はそれぞれ、i) 「掛かる」には対象の移動に動作主の関与が含意される点で特殊であったため（影山 2009）、ii) 中国語話母語話者の回答のほとんどが名詞一語（电话）であったため、iii) 日本語母語話者の回答に「星が見える」が多かったため、iv) 「時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化」（松本 1997 : 128）という典型的な移動ではないという点で他の項目と異なるため、v) 中国語母語話者の回答に用いられた動詞“粘”に移動の意味合いが希薄なためであった。

タスクの作成にあたっては、中国語母語話者 4 名の協力を得て、なるべく自然な中国語になるようにした。質問紙は、無作為に項目を配列した A 版と、A 版の配列を逆にした B 版とを用意し、各グループ間で均等に配布した。回答に要した時間は、各グループともに 10 分から 15 分程度であった。

表 5-2 調査に用いた項目

タイプ a 「移動動詞＋ている」を用いる場面	
あなたが友人と道を歩いていたら、前に…	假设你和朋友走在路上，突然发现前方……
あなた：あ、財布が_____。 你：啊，地上_____。(钱包)	
放課後、家に帰ると、玄関で…	假设你放学之后，回家。在门口…
あなた：ただいま。	你：我回来啦。
<玄関に見たことのない靴がある>	<看到了陌生人的鞋子>
お母さん：<玄関に迎えにきて>	妈妈：<走到门口>
おかえり。	你回来啦。
あなた：お客さんが_____。	你：家里_____吗？(客人)
お母さん：うん、お父さんの友達よ。	妈妈：嗯，是爸的朋友。
あなたは朝起きると目が痛くて、病院に行きました…	假设由于眼睛很痛，你去医院看医生…
あなた：朝から目が痛くて…	你：早上起来眼睛很痛。
医者：ちょっと見せてください。	医生：让我看。
あ、まつげが_____。	啊，眼睛里_____。(眼睫毛)
あなたが郵便受けをのぞいたら、お母さん宛の手紙が一通…。あなたはそれを持ってお母さんに声をかけて…	假设你发现邮箱里有一封寄给你母亲的信，你拿着那封信喊母亲的时候……
あなた：<お母さんに>お母さん、	你：<对妈妈>妈，
ポストに手紙が_____。	信箱里_____。(信)
タイプ b 「状態変化動詞＋ている」を用いる場面	
あなたは友人と山登りをしています。道を歩いていると…	假设你在登山，走在路上…

<p>あなた：あっ！見て見て、 珍しい花が_____。 友人：本当だ。なんという名前の花だろうね。</p>		<p>你：诶，你看！ 这里_____。(罕见的花) 朋友：真的耶。不知道叫什么花</p>	
<p>あなたが友人とバスに乗ったら、一番後ろに誰もいませんでした...</p>		<p>假设你和朋友上了公交车，发现最后一排没人坐...</p>	
<p>あなた：あ、席が_____。 友人：本当だ。ラッキーだね。</p>		<p>你：啊，后面_____。(坐位) 朋友：运气真好！</p>	
<p>あなたは日曜日に友人と学校へサッカーの練習に行ったとき、先生の研究室からあかりが見えて...</p>		<p>假设星期天的傍晚，你和朋友在学校踢完足球回家的时候路过老师的办公室……</p>	
<p>友人：先生、いらっしゃるのかな？ あなた：みたいだね。 電気が_____。</p>		<p>朋友：老师，应该在研究室吧？ 你：也许吧。 屋里_____。(灯)</p>	
<p>あなたは家の前で鍵を取り出してドアを開けようとしたとき...</p>		<p>假设你拿出钥匙准备开门的时候……</p>	
<p>あなた：おかしいなあ！ ドアが_____。 鍵をかけ忘れたのかなあ</p>		<p>你：奇怪！ _____。(门) 我忘了锁门？</p>	

5.3 結果

以下、各タイプの調査結果を全体的傾向と項目別の観点から示し、考察を加える⁴⁷。

5.3.1 タイプ a (「移動動詞＋ている」の場面)

⁴⁷ 得られた回答で、明らかに問題文の場面を取り違えていると思われるものは分析から除いた。

タイプ a は、陳（2009）が、日本語では移動を表す動詞と「ている」を用い、中国語では“有”を用いると主張した場面である。回答の平均を図 5-1 に示す。日本語では「ている」の回答率が 93.5% で、陳の主張を裏づけるものである。一方、中国語では、確かに陳の主張するように“有”の使用が 62.2% と多いが、“了”の使用も 34.7% あった。

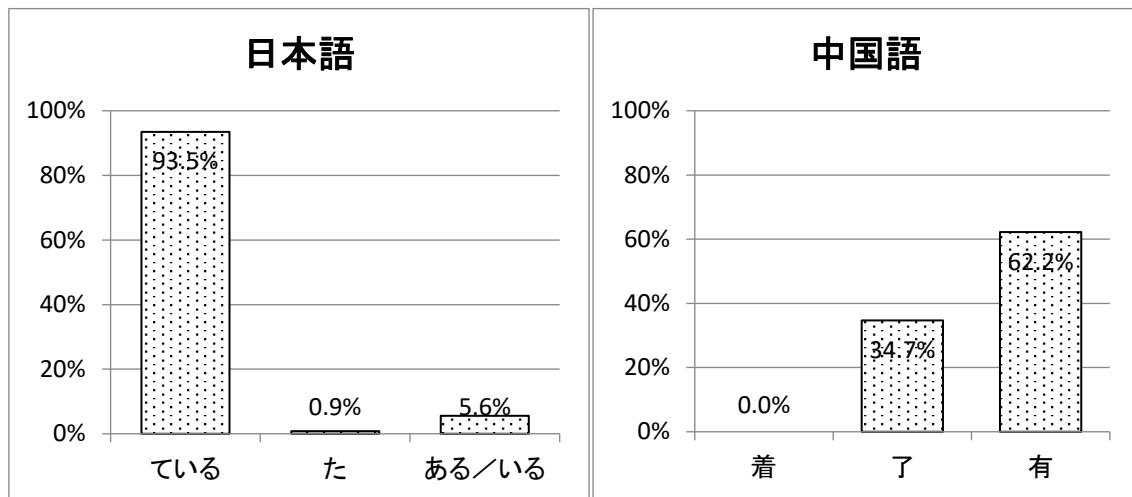


図 5-1 タイプ a の結果

次に、項目別の回答率を表 5-3⁴⁸に示す。日本語では予想通りどの項目においても「ている」の使用が最も多かった⁴⁹。中国語では、まず、項目 4 では、“有”の使用（有信、有电话）が大部分（97.1%）を占め、“了”の使用は見られなかった。これは陳の主張に沿うものである。ところが、項目 2 と 3 では“了”の使用（来客人了、进／掉／掉进了眼睫毛）が、“有”の使用（有客人、有眼睫毛）より多かった（68.4% 対 26.5%、59.6% 対 39.7%）。また、項目 1 においては、“有”の使用（有钱包）がほとんどであったが、“了”の使用（掉了钱包）も散見された（86.0% 対 10.3%）。このように、日本語で「移動動詞＋ている」を用いて「変化」と「存在」を同時に表す状況で、中国語では「存在」を表す“有”と「変化」を表す“了”の選択で揺れが見られるのは、稲垣（2013）の主張に沿うものであり、陳（2009）／庵（2010）では説明できない⁵⁰。

⁴⁸ 表 5-3 および 5-4 に示した数値は西坂・稲垣（2016）の表 1(p.36,)および表 2 (p.38,)の値と一部異なるが、これは不注意な計算間違いと記載ミスによるものであり、ここに示したものが正しい数値である。

⁴⁹ 項目 4 には「ある/いる」の回答がかなり見られた。この理由の解明は今後の課題としたい。

⁵⁰ 日本語で「移動動詞＋ている」が使われる状況における中国語話者の“有”と“了”の選択に影響を与える要因の解明は重要であり、今後の課題としたい。

表 5-3 タイプ a の項目別結果（数字は%）

項目 1 財布が落ちている			
日本語		中国語	
ている	100	着	0
た	0	了	10.4
ある／いる	0	有	85.8
その他	0	その他	3.7
計	100	計	100
項目 2 お客が来ている			
日本語		中国語	
ている	94.8	着	0
た	3.4	了	68.4
ある／いる	1.7	有	26.5
その他	0	その他	5.1
計	99.9	計	100
項目 3 まつげが入っている			
日本語		中国語	
ている	100	着	0
た	0	了	59.6
ある／いる	0	有	39.7
その他	0	その他	0.7
計	100	計	100
項目 4 手紙が来ている			
日本語		中国語	
ている	79.3	着	0
た	0	了	0
ある／いる	20.7	有	97.1
その他	0	その他	2.9
計	100	計	100

5.3.2 タイプ b（「状態変化動詞＋ている」の場面）

タイプ b は日本語において「状態変化動詞＋ている」が用いられる場面であるが、庵（2010）によると中国語では「変化」に焦点が当たり“了”が用いられると考えられる場面である。日本語、中国語における回答率の平均を図 5-2 に示す。日本語では予想通り「ている」の使用率が 91.0%と高く、「ある／いる」の使用は 4.7%と低く、「た」の使用は 0.4%と皆無であった。一方、中国語では、「ている」に対応する“着”が 37.9%、「ある／いる」に対応する“有”が 43.6%とほぼ同程度に使用され、「た」に対応する“了”の使用は 3.3%と低かった。

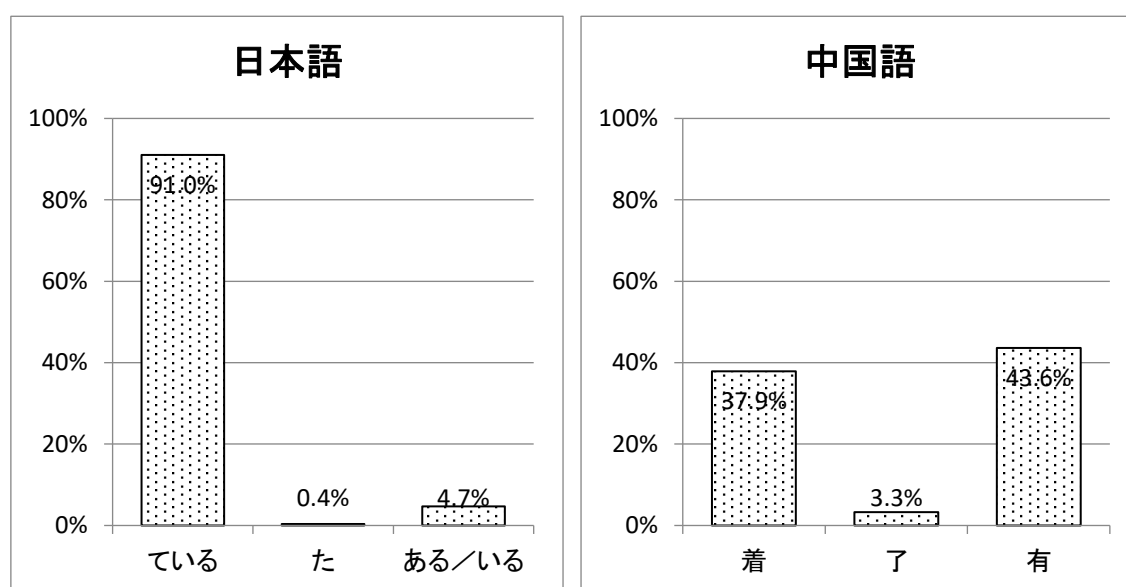


図 5-2 タイプ b の結果

次に、項目別の回答率を表 5-4 に示す。日本語では、すべての項目において「ている」の使用が大部分を占めていた。項目 1 で「ある」の使用（花がある）が 19.0%見られた以外は、ほぼ「ている」のみが使われていた⁵¹。中国語では、項目 1 と 2 で“有”の使用（有罕见的花、有座位）が多く（86.8%、85.3%）、“着”と“了”の使用は少なかったのに対し、項目 3 と 4 では、“着”の使用（亮着灯、门开着）が多く（79.4%、64.7%）、“有”と“了”の使用は少なかった。この結果は、庵（2010）にも稲垣（2013）にも沿わないものである。庵は状態変化動詞と“了”の結びつきを予想するが、“了”の使用は少なかった。稲垣は項目 3、4 における“着”の使用は説明できるが、項目 1、2 における“有”の使用は説明できない。

⁵¹ なぜ項目 1 でのみ「ある」の使用が多少見られたのかは明らかではない。

表 5-4 タイプ b の項目別結果（数字は%）

項目 1 花が咲いている			
日本語		中国語	
ている	81.0	着	4.4
た	0	了	3.7
ある／いる	19.0	有	86.8
その他	0	その他	5.1
計	100	計	100
項目 2 席が空いている			
日本語		中国語	
ている	98.3	着	2.9
た	1.7	了	0
ある／いる	0	有	85.3
その他	0	その他	11.8
計	100	計	100
項目 3 電気がついている			
日本語		中国語	
ている	98.3	着	79.4
た	0	了	2.9
ある／いる	0	有	2.2
その他	1.7	その他	15.5
計	100	計	100
項目 4 ドアが開いている			
日本語		中国語	
ている	87.5	着	64.7
た	0	了	6.6
ある／いる	0	有	0
その他	12.5	その他	28.7
計	100	計	100

5.4 考察

研究課題 1 に関して、日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語母語話者は「存在」を表す“有”だけでなく「変化」を表す“了”も用いることが明らかになった。具体的には、“有”のみで“了”は用いられない項目（例. 有信）、“有”の使用が大部分であったが“了”の使用も見られた項目（例. 有钱包、掉了钱包）、“有”の使用より“了”の使用のほうが多かった項目（例. 来客人了、有客人）が存在した。このような中国語における“有”と“了”の揺れは、日本語で「移動動詞＋ている」が用いられる場面で、中国語では「変化」と「存在」を同時に表すことができず、どちらか一方（“了”または“有”）のみが言語化されるとする稲垣（2013）の主張を支持するもので、同様の場面で中国語では「存在」を表す“有”を用いると主張する陳（2009）／庵（2010）では説明できない。

次に、研究課題 2 に関して、日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用い、中国語で「結果の状態」を表す“着”が使用可能な場面で、中国語母語話者は「存在」を表す“有”を用いる場合（有罕见的花、有座位）と、「結果の状態」を表す“着”を用いる場合（亮着灯、门开着）があることが明らかになった。庵（2010）が予測する「変化」を表す“了”は少なかった。稲垣（2013）では「変化」と「状態」を同時に表す“着”の使用は説明できても、「存在」を表す“有”の使用は説明できない。なぜならば状態変化動詞は「非存在型」と考えられ、「変化」の結果としての「存在」は想定できないからである。

このように中国語母語話者が「状態変化動詞＋ている」の場面で、項目により“有”と“着”を使い分けていたのはなぜだろうか。“有”の使用率が高い項目 1 と 2 に共通しているのは、「咲く」（“开”）、「空く」（“空”）という状態変化の結果、眼前に「花」（“花”）、「席」（“座位”）が存在しており、話し手がその存在を認識できるということである。これは庵（2010）が指摘する「存在型」と同様であると言える。一方、“着”の使用率が高い項目 3 と 4 では、「電気」（“灯”）、「ドア」（“门”）はもともと存在しており、「つく」（“亮”）、「開く」（“开”）という変化の結果存在するようになるのではない。これは庵の「非存在型」に相当する。つまり、「存在型」と「非存在型」の区別は、状態変化動詞の中にも存在し、この違いが、中国語母語話者による“有”と“着”の使

い分けに反映していると考えられる。そうであれば、項目 1 と 2（「存在型」）における“有”の使用は、庵（2010）でも稲垣（2013）でも説明可能である。しかし、項目 3 と 4（「非存在型」）における“着”の使用は、稲垣でのみ説明可能である。

まとめると、「移動動詞＋ている」場面での“有”と“了”の使用の揺れ、ならびに「状態変化動詞＋ている」場面における“有”と“着”の使い分けは稲垣（2013）に沿ったもので、陳（2009）／庵（2010）では説明できない。

5.5 第 5 章のまとめ

本章では、「ている」と「ある／いる」との使い分けができるかを明らかにすることであり、母語の影響という観点から分析を行うため、以下の研究課題に取り組んだ。

研究課題 1 日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語母語話者は「存在」を表す“有”を用いるのか。あるいは“有”だけでなく「変化」を表す“了”も用いるのか。

研究課題 2 日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用いる場面で、中国語で「結果の状態」を表す“着”が使用可能な場合、中国語母語話者は“着”を用いるのか、あるいは「変化」を表す“了”を用いるのか。

まず、陳（2009）が日本語習得の調査に用いたタスクに基づき、日本語と中国語における比較可能なデータ収集を可能にする調査タスクを作成した。そして、このタスクを用い両言語の母語データを収集したところ、日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語母語話者は“有”だけでなく“了”も用いること、日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用い、中国語で“着”が使用可能な場面で、中国語母語話者は“着”だけでなく“有”も用いることが明らかになった。この結果は、日本語が「ている」を用いて状態／位置「変化」と結果としての「状態」／「存在」を同時に言語化するのに対して、中国語は（“着”が可能な場合を除いて）「変化」と「状態」／「存在」のどちらか一方のみを言語化する、とする稲垣（2013）の分析を支持するものである。本章における貢献は、日中両言語で平行なデータを収集し、陳（2009）では明らかでなかった中国語における「ている」場面の表し方の実態を明らかにした

ことにある。さらに、庵（2010）が移動動詞と状態変化動詞のテイル形の違いに関して提案した「存在型」と「非存在型」の区別が、状態変化動詞のテイル形の分類にも有効であり、それが中国語の状態変化動詞における“有”と“着”の使い分けに反映されていることを示した点も意義深い。

次章では、本章と同一のタスクを用いて、中国語を母語とする日本語学習者のデータを収集し、日本語習得の際の、「変化」と「状態」／「存在」の表し方における母語の転移を検証する。

第6章

「ている」「た」「ある／いる」の使い分け ー母語話者データと学習者データの比較ー

第5章では、日本語母語話者と中国語母語話者を対象に、同一場面における両言語での「変化」と「存在／状態」の表し方について調査・考察を行った。その結果、以下のことを明らかにした。1) 日本語で「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語では変化を表す“了”あるいは存在を表す“有”のいずれかを用いて表現する 2) 「状態変化動詞＋ている」を用いる場面にも、「存在型／非存在型」の区別が存在し、存在を表す“有”が用いられる。3) 非存在型の場合、“着”が共起可能な動詞であれば（“了”ではなく）“着”が用いられる。第5章で提示した結果は、中国語母語話者の日本語習得を考える際のベースラインとなるものと言える。そこで第6章では、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、「移動動詞＋ている」場面および、「状態変化動詞＋ている」場面の習得状況を調査し、第5章の母語データと比較しながら、母語の転移の観点から説明を試みる。

6.1 陳（2009）の結果および問題点

まず、改めて陳（2009）が日本語学習者を対象に行った調査および、その主張となる根拠を確認する。陳の研究の出発点は、次の通りである。日本語で移動を表す動詞が「ている」と共起する場면을、中国語では存在を表す“有”を用いる。よって、中国語を母語とする日本語学習者は、同様の場面で「ている」ではなく、日本語で存在を表す「ある／いる」を用いる、というものであった。しかし、第5章の結果から、日本語で「移動動詞＋ている」を用いる場面と、中国語で“有”を用いる場面とが必ずしも対応するとは言い切れないことがわかった。

第5章の結果を基に、日本語で「結果の状態」の「ている」が用いられる場면을、中国語で表現する場合、表6-1のようにまとめることができる。

表 6-1 「結果の状態」の「ている」を使用する場面と対応する中国語の表現

変化動詞の種類	“着”の共起	存在型／非存在型	形式	例
移動動詞 “来” “掉” etc.	不可	存在型 (タイプ A)	了	来客人了
			有	有信
状態変化動詞 “亮” “开” etc.	可	存在型 (タイプ B)	有	有罕见的花
		非存在型 (タイプ C)	着	亮着灯

まずは移動動詞であるが、中国語において、移動動詞（“来”、“掉”など）は、基本的には持続を表すアスペクトマーカ―“着”と共起できない。日本語で「移動動詞＋ている」の場面は、存在型であれば稲垣（2013）の指摘しているように「変化」と「存在／状態」を同時に言語化し、第 5 章の結果から中国語では変化を表す“了”か、存在を表す“有”の選択で揺れが見られる（表 6-2）。

表 6-2 「移動動詞＋ている」（存在型）場面の

日本語と中国語の対照（稲垣 2013 : 37）

	変化	存在
日本語	V	ている
中国語	V 了	有

続いて状態変化動詞の場合を見る。状態変化動詞は、移動動詞と異なり、動詞によっては持続を表す“着”と共起可能である。第 5 章で、状態変化動詞においても、庵（2010）が導入した存在型／非存在型の区別が有効であることがわかった。そして、存在型に該当する場面であれば、中国語において結果の持続を表す“着”を用いるか、変化後の存在に注目して“有”を用いる（表 6-3）。一方、非存在型に該当する場面であれば、“有”が用いられることはなく、“着”が用いられるか、あるいは「変化」に注目して“了”を用いる（表 6-4）。タイプ B およびタイプ C では、学習者の母語である中国語において“着”の使用が

確認されている。“着”が持つ性質を、動作や行為が完了し（「変化」し）、その結果が持続している（「存在している」）ことにあると考えれば、日本語で「変化」と「存在」を同時に言語化する表現である「ている」を産出することはそう難しいことではないと考えられる。これは先行研究においても指摘されている（許 1997; 張 2001）。しかし、存在型（タイプ B）において「ている」ではなく、「ある／いる」を用いることまでは、先行研究においては指摘していない。

表 6-3 「状態変化動詞+ている」（存在型）場面の日本語と中国語の対照

	変化	存在
日本語	V	ている
中国語	V	着
		有

表 6-4 「状態変化動詞+ている」（非存在型）場面の日本語と中国語の対照

(稲垣 2013 : 35)

	変化	状態
日本語	V	ている
中国語	V	着
	V了	

6.2 研究課題

本章では、これら日本語母語話者および中国語母語話者の L1 データの対照から得られた差異が、中国語を母語とする日本語学習者による、「結果の状態」の「ている」の習得状況を説明する際にどの程度有効かを明らかにすることを目的とする。第 5 章では、先行気乳の問題点を克服し、日本語と中国語を比較可能にするタスクを作成した。このタスクによる調査で、学習者の「ている」「た」「ある／いる」の使用状況について、より信頼性の高い結果が得られると考える。そこで、第 5 章で得た、日本語と中国語のパラレルデータの結果から、以下の 3 つの研究課題を設定した。研究課題 1～3 は、表 6-1 のタイプ A～C

に対応している。

- 研究課題 1 「移動動詞＋ている」(存在型)の場面で、「ている」以外の使用は「た」と「いる／ある」に分かれるか。その割合は中国語の「存在／状態」と「変化」の割合を反映したものとなるか。
- 研究課題 2 「状態変化動詞＋ている」(存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多ければ、「ている」の使用率は高くなるか。そして、“着”の使用が少なく、“有”の使用が多い場面では、「ている」の使用率は低くなり「ある／いる」を用いるか。
- 研究課題 3 「状態変化動詞＋ている」(非存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多い場面では、「ている」の使用率が高くなるか。非存在型のため、「ある／いる」の使用は見られず、「ている」以外では「た」を使用するか。

6.3 調査方法

以上の仮説を検証するため、中国語を母語とする日本語学習者⁵²を対象に、第 5 章と同様のタスクを用いた調査を実施した。調査は 2016 年 5 月から 6 月にかけて実施した。調査対象者の日本語学習者は、日本在住の大学生、大学院生、社会人の計 31 名である⁵³。データ収集は筆者あるいは協力者 1 名の立会いのもと、一対一で個別に行った。調査は、まず学習者の日本語の習熟度を測るため、SPOT テストを行い、調査タスク、そして最後に学習者の背景に関するフェイスシート記入の順番で進めた。時間の制限は設けず、わからない言葉などがあれば調査者（筆者あるいは協力者）に尋ねても構わないとした。調査紙の回答に要した時間は、10～20 分程度であった。調査対象者の属性を表 6-5 に示す。

⁵² 陳（2009）では、台湾の日本語学習者を対象としているが、本調査においては、台湾出身の学習者は含まれておらず、全員が中国大陆の出身者である。

⁵³ 学習者の滞日期間は 1 年未満が 1 名、1 年以上 3 年未満が 8 名、3 年以上 5 年未満が 13 名、5 年以上 10 年未満が 5 名、10 年以上が 3 名である。1 名の対象者は未記入であった。

表 6-5 調査対象者の属性

		日本語学習者	日本語母語話者
年齢（歳）	範囲	23-32	18-20
	平均	26.4	19.1
	標準偏差	2.6	0.5

次に、SPOT の得点の記述統計（表 6-6）、得点のヒストグラム（図 6-1）を示す。

表 6-6 SPOT（65 点満点）のテスト結果

平均得点	59.8
標準偏差	3.5
最低得点	52
最高得点	65

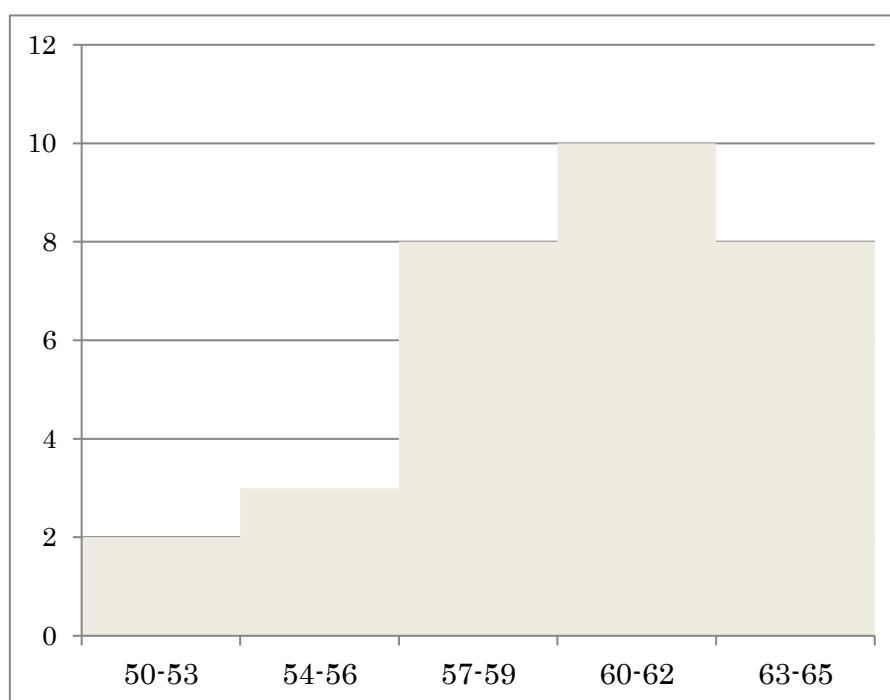


図 6-1 SPOT の得点のヒストグラム

SPOT テストの結果を見ると、多くが満点に近い点数であったことから、上級レベルの日

本語学習者群であると判断した。

6.4 結果

以下、各研究課題を明らかにするため、調査結果を全体的傾向と項目別にまとめ、さらに第5章の中国語母語話者のL1データと比較しながら考察を加えていく。

6.4.1 タイプAの場合（日本語母語話者が「移動動詞+ている」を使用する場面）

研究課題1は、「移動動詞+ている」を用いる場面である。中国語では母語話者の使用が、項目によって“了”あるいは“着”に偏っていた。また、ある項目では、両者が約半々の割合で使用されていた。この場面においては、中国語は「変化」と「存在」を同時に言語化することはできず、「変化」のみを述べるか、あるいは「存在」のみを述べるかである。よって、中国語を母語とする日本語学習者は、母語で別々に表している意味要素を、同時に表さなければならないことが予想される。回答の平均を図6-2に示す⁵⁴。

⁵⁴ 「頭になにかついている」の場面については、松本（1997）が「日本語では移動に伴う移動物の状態変化（付帯変化）が移動動詞に包入するケースが比較的多い」（p.144）と述べ、「つく」も移動動詞に分類している。しかし、中国語で使用されていた“粘”“沾”は、“着”が後接可能なことから、移動動詞とは言にくい。日本語と中国語いずれにおいても移動を表す他項目と異質と考えたため、ここでは「移動動詞+ている」場面から除いた。

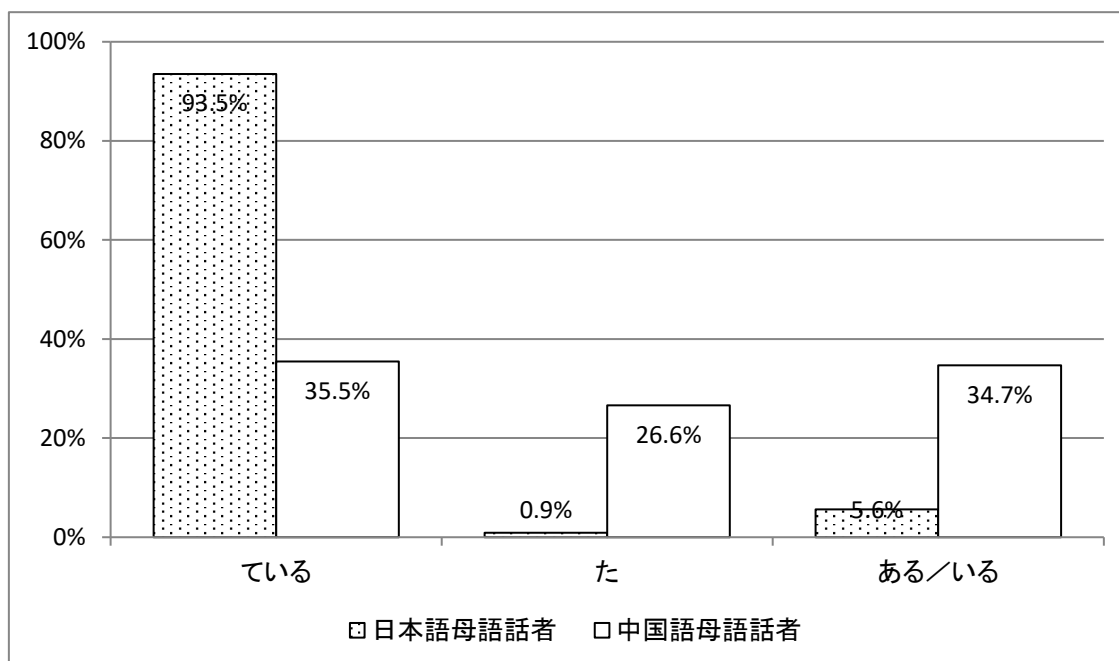


図 6-2 「移動動詞+ている」(存在型) 場面の結果

第5章の結果から、日本語母語話者による「ている」の使用は93.5%で、高い使用率が確認されている。「た」および「ある/いる」の使用も見られてはいるものの、いずれも低い割合である。中国語を母語とする上級日本語学習者は、「ている」の使用が35.5%と、上級レベルとした学習者であっても、日本語母語話者との使用割合の間に大きな開きが見られる。一方、日本語母語話者には使用が少なかった「た」「ある/いる」の使用は、26.6%、34.7%であり、いずれも日本語母語話者より高い割合であった。

次に、項目別の回答率を表6-7に示す。項目4では日本母語話者に「ある/いる」の使用が20.7%見られるが、項目1～3では概ね「ている」で一致している(94.8%,100%,100%)。一方、中国語母語話者の回答は、日本語母語話者の回答が「ている」ではほぼ一致していた項目1～3であっても、41.9%、12.9%、54.8%であった。「ている」以外の形式の使用割合は一樣ではなく、項目1では、「た」と「ある/いる」が比較的近い割合を示しており(25.8%対29.0%)、項目2では「た」と「ある/いる」両者の使用があるものの、割合には開きがある(25.8%対61.3%)。また、項目3では「ある/いる」の使用はなく、「ている」以外には「た」に集中している。このように、日本語母語話者が「移動動詞+ている」を使用する場面において、項目ごとに、その比率は一樣ではないが、「た」と「ある/いる」の使用が確認された。

表 6-7 「移動動詞＋ている」(存在型) 場面の結果 (数字は%)

項目 1 財布が落ちている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	100	41.9
た	0	25.8
ある／いる	0	29.0
その他	0	3.3
計	100	100
項目 2 お客が来ている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	94.8	12.9
た	3.4	25.8
ある／いる	1.7	61.3
その他	0	0
計	99.9	100
項目 3 まつげが入っている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	100	54.8
た	0	38.7
ある／いる	0	0
その他	0	6.5
計	100	100
項目 4 手紙が来ている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	79.3	32.3
た	0	16.1
ある／いる	20.7	48.4
その他	0	3.2

計	100	100
---	-----	-----

これらの L2 の結果は、L1 である中国語の表現方法を反映しているのだろうか。2 つの場面について、中国語母語話者の L1 データと L2 データを比較する。表 6-8 は、中国語母語話者から得られた日本語の結果と、前章で中国語母語話者から得られた中国語の結果をまとめたものである。日本語の結果は「ている」「た」「ある／いる」、中国語は通常日本語の「ている」「た」「ある／いる」に相当することが多い“着”“了”“有”を並列させている。

項目 1 において、日本語では「た」と「ある／いる」がほぼ同じ割合で使用されていた (25.8% 対 29.0%)。一方、中国語においては、存在を表す“有”の使用が 85.8% と多く、「変化」を表す“了”の使用は 10.4% と少ない。また、項目 2 においては、日本語の「た」対「ある／いる」の割合 (25.8% 対 61.3%) と、中国語の“了”対“有”の割合 (68.4% 対 26.5%) がほぼ逆転している。さらに、項目 3 においては、中国語で“了”と“有”の使用割合が 59.6% 対 39.7% となっているが、日本語においては“有”に対応する「ある／いる」の使用はなかった。

表 6-8 中国語母語話者の L2 データと L1 データの比較 (数字は%)

項目 1 財布が落ちている			
日本語		中国語	
ている	41.9	着	0
た	25.8	了	10.4
ある／いる	29.0	有	85.8
その他	3.3	その他	3.7
計	100	計	100
項目 2 お客が来ている			
日本語		中国語	
ている	12.9	着	0
た	25.8	了	68.4
ある／いる	61.3	有	26.5
その他	0	その他	5.1
計	100	計	100
項目 3 まつげが入っている			
日本語		中国語	
ている	54.8	着	0
た	38.7	了	59.6
ある／いる	0	有	39.7
その他	6.5	その他	0.7
計	100	計	100
項目 4 手紙が来ている			
日本語		中国語	
ている	32.3	着	0
た	16.1	了	0
ある／いる	48.4	有	97.1
その他	3.2	その他	2.9
計	100	計	100

6.4.2 タイプ B の場合（日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」（存在型）を使用する場面）

続いて、研究課題 2 の検証を行う。研究課題 2 では、「状態変化動詞＋ている」で、状態変化後に、変化の結果として、「席」や「花」のように眼前に存在物が認識できる場面である。中国語においては、変化後の存在に注目し、“有”の使用が多い場面である。ここでは 2 つの場面が該当する。母語である中国語において存在を表す“有”の使用が多いことから、「ている」の代わりに「ある／いる」の使用が多くなることが予想される。さらに“了”の使用は少ないことから（項目 5、6 でそれぞれ 3.7%と 0%）、“了”に対応する「た」の使用も少なくなることが予想される。まず、2 項目の平均を図 6-3 に示す。

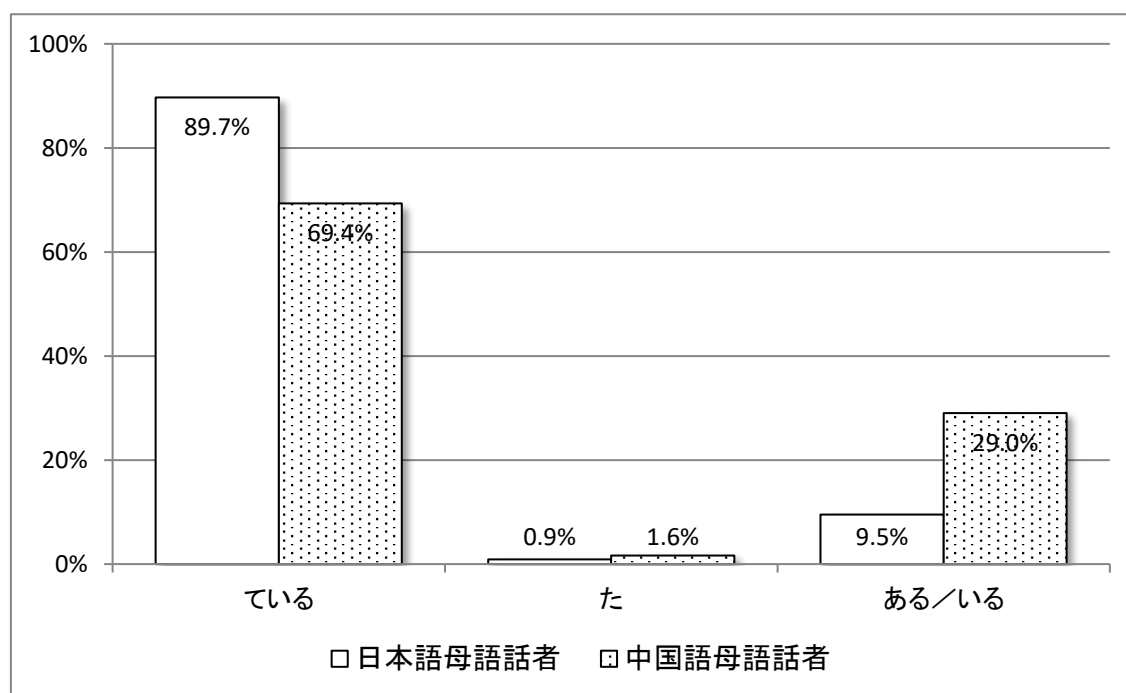


図 6-3 「状態変化動詞＋ている」（存在型）場面の結果

予想通り、「ている」以外の使用は、「ある／いる」に集中しており、「た」とする誤用は 1.6%と低い割合であった。学習者は「花が咲いていない状態→花が咲いている状態」や「席が空いていない状態→席が空いている状態」の変化に注目するよりも、眼前に「花がある」「席がある」という存在に注目して言語化していると言える。2 つの場面で使用された「て

いる」「た」「ある／いる」の割合を、項目別に見てみる（表 6-8）。項目 5 については、日本語母語話者の使用においても「ある／いる」が 19.0%確認されており、日本語母語話者でも存在のみに注目する場面があることがわかる。中国語母語話者の日本語の使用においては、その割合が近接しており、存在への注目がより強いと言える。一方、項目 6 では、日本語母語話者の使用は「ている」に集中しており、「ある／いる」の使用は見られなかった。しかし、中国語母語話者の回答においては、「ある／いる」の使用が 12.9%となっている。「ている」「た」「ある／いる」以外での回答は、ここではなかった。

表 6-8 「状態変化動詞＋ている」（存在型）場面の結果（数字は%）

項目 5 花が咲いている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	81.0	51.6
た	0	3.2
ある／いる	19.0	45.2
その他	0	0
計	100	100
項目 6 席が空いている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	98.3	87.1
た	1.7	0
ある／いる	0	12.9
その他	0	0
計	100	100

これらの L2 の結果は、L1 である中国語の表現方法を反映しているのだろうか。2 つの場面について、中国語母語話者の L1 データと L2 データを比較する。項目別の結果を、表 6-9 に示す。中国語においては、“着”の使用が可能な場面ではあるものの、ともに“有”の使用割合が高く（項目 5：86.8%、項目 6：85.3%）、存在のみを表現している。母語において存在のみに注目して事態を捉えていると考えられることから、L2 においても、母語によ

る事態の捉え方が反映され、「ある／いる」の使用割合が高くなっていると考えられる。

表 6-9 中国語母語話者の L2 データと L1 データの比較 (数字は%)

項目 5 花が咲いている			
日本語		中国語	
ている	51.6	着	4.4
た	3.2	了	3.7
ある／いる	45.2	有	86.8
その他	0	その他	5.1
計	100	計	100
項目 6 席が空いている			
日本語		中国語	
ている	87.1	着	2.9
た	0	了	0
ある／いる	12.9	有	85.3
その他	0	その他	12.5
計	100	計	100

6.4.3 タイプ C の場合（日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」（非存在型）を使用する場面）

最後に 3 つ目の研究課題の検証を行う。「状態変化動詞＋ている」の場面で、非存在型の場合、正答率が高くなること、非存在型のため、「ある／いる」の誤用は見られないことが予測される。該当する場面は 2 つであった。まず、2 つの場面を合わせて、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の結果を図 6-8 に示す。日本語母語話者、学習者ともに「た」「ある／いる」の回答はなく、「ている」の回答が 92.9%と 83.9%と高くなっていることがわかる。一方、「ている」以外の使用の予測については、「た」「ある／いる」の回答がなかったことから検証はできなかった。この点については、習熟度の異なる学習者を対象として改めて検証する必要がある。

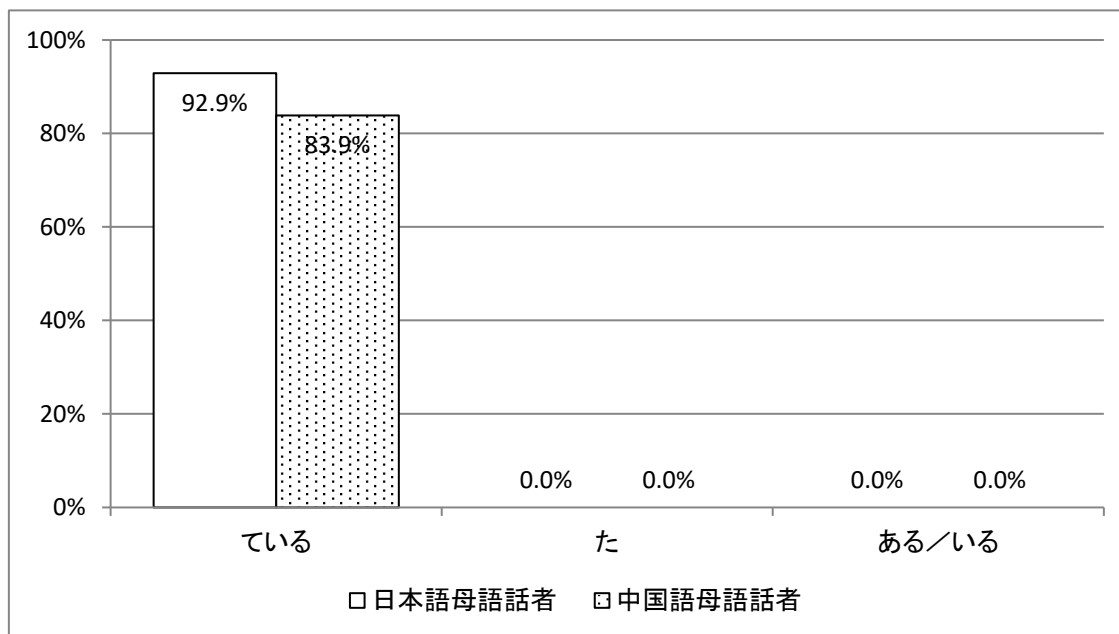


図 6-5 「状態変化動詞+ている」(非存在型) 場面の結果

続いて、項目別の結果を表 6-10 に示す。項目 7 については、98.3%の日本語母語話者、96.8%の日本語学習者が「ている」を使用している。第 5 章の中国語母語話者の回答と照らし合わせてみると、日本語の「ている」に相当する“着”が 79.4%使用されている。この場面における日本語学習者の「ている」の高い使用率は、許（1997）などで指摘されているように、中国語から正の転移を起こしている可能性が高いと言える。一方、もう一つの場面である項目 8 では、日本母語話者の使用は 87.5%が「ている」であったが、学習者の使用は 71.0%となっていた。この場面においても「た」「ある/いる」の使用はなく、その他の回答として、「ドアが開いたまま」「ドアが閉まっていない」などが見られた。

表 6-10 「状態変化動詞+ている」(非存在型) 場面の結果 (数字は%)

項目 7 電気がついている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	98.3	96.8
た	0	0
ある/いる	0	0

その他	1.7	3.2
計	100	100
項目 8 ドアが開いている		
日本語	日本語母語話者	中国語母語話者
ている	87.5	71.0
た	0	0
ある／いる	0	0
その他	12.5	29.0
計	100	100

中国語母語話者の L1 データおよび L2 データのを表 6-11 に示す。いずれの項目でも、中国語では“着”の使用が大きな割合を占めていることがわかる。“有”“了”の使用が散見される項目 7、“了”の使用が見られる項目 8 であるが、「た」「ある／いる」の使用は一つもない。「ている」「た」「ある／いる」の対立という点では、このグループの習得は日本語母語話者の使い分けに近いレベルまで到達できるものであると言えるだろう。ただし、項目 8 については、日本語で「ている」の 71.0%、中国語においても、“着”が 64.7%、“了”が 6.6%が示しているように、今回分析対象とした形式以外の回答も日本語と中国語ともに 3 割程度確認された。日本語では「ドアが開いたまま」「ドアが閉まっていない」などであり、中国語では、“门没锁”“门怎么没关”などであった。日本語では肯定形を用いて表現する場面を、中国語では否定形を用いて表現するなど、肯定否定の決定要因についてはここでは踏み込まない。重要なのは、L1 データから得られた、「ている」の高い使用率、「ある／いる」の不使用がともに確認された点であると言える。

表 6-11 中国語母語話者の L2 データと L1 データの比較（数字は%）

項目 7 電気がついている			
日本語		中国語	
ている	96.8	着	79.4
た	0	有	2.9
ある／いる	0	了	2.2

その他	3.2	その他	15.5
計	100	計	100
項目 8 ドアが開いている			
日本語		中国語	
ている	71.0	着	64.7
た	0	有	6.6
ある／いる	0	了	0
その他	29.0	その他	28.7
計	100	計	100

6.5 考察

研究課題 1 に関して、日本語母語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面で、中国語を母語とする上級日本語学習者が同様に「ている」を用いることは困難であることが明らかになった。「結果の状態」を構成する意味要素の「変化」あるいは変化後の「存在／状態」に注目して「た」あるいは「ある／いる」を用いていた。しかし、同一場面における中国語母語話者の L1 データと照らし合わせてみると、その使用割合は、母語である中国語で変化を表す“了”、存在を表す“有”の使用割合を反映したものとは言い難いものであった。これは、日本語母語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面における、中国語母語話者の「ある／いる」使用は、単純に中国語の影響とは言えないことを示している⁵⁵。

次に、研究課題 2 に関して、日本語母語話者が「状態動詞+ている」を用い、変化後に眼前に「花」「席」が存在しており、話し手がその存在を認識できる場面において、中国語を母語とする上級日本語学習者による「ている」の高い使用率が確認された。加えて、学習者の「ある／いる」の使用は、日本語母語話者より高い割合を示していた。一方、「た」の使用は日本語母語話者、学習者ともにほとんどなかった。これらはすべて、第 5 章の中

⁵⁵ 母語からの影響で説明できないとすれば、他の要因によることを実証しなければならない。しかし、本章のアプローチは、第 5 章で得られた日本語母語話者の L1 データ、中国語母語話者の L1 データの調査結果をベースラインとして、母語である中国語の影響が見られるかどうかを仮説検証することに目的としたものであった。そのため、母語以外の要因の検証を今後行う必要がある。しかし、これは、母語の影響がないと主張しているわけではないことも付け加えておく。何らかの形で母語が影響している可能性も十分に考えられるため、母語の影響という観点からの研究もさらに行っていく必要があると言える。

国語母語話者による L1 の使用傾向から予測可能なものと言える。

最後に、研究課題 3 に関して、日本語母語話者が「状態動詞＋ている」を用い、非存在型に該当する場面で、中国語を母語とする上級日本学習者にも「ている」の高い使用率が確認された。ここでも、中国語母語話者による L1 データの傾向を反映する結果が得られた。しかしながら、同時に予測された「た」の使用は見られず、この点については未確認のままである。今回対象とした学習者は、いずれも上級レベルと言える学習者であったが、研究課題 3 に該当する場面に関して言えば、日本語母語話者に近いレベルに到達可能と見えそうである。

6.6 第 6 章のまとめ

本章では、第 5 章で日本語母語話者と中国語母語話者に対して行った L1 データの調査結果をもとに、中国語を母語とする日本語学習者に「結果の状態」の「ている」の習得に関する調査を行った。まず、本章における研究課題を確認する。

- 研究課題 1 「移動動詞＋ている」(存在型)の場面で、「ている」以外の使用は「た」と「いる／ある」に分かれるか。その割合は中国語の「存在／状態」と「変化」の割合を反映したものとなるか。
- 研究課題 2 「状態変化動詞＋ている」(存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多ければ、「ている」の使用率は高くなるか。そして、“着”の使用が少なく、“有”の使用が多い場面では、「ている」の使用率は低くなり「ある／いる」を用いるか。
- 研究課題 3 「状態変化動詞＋ている」(非存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多い場面では、「ている」の使用率が高くなるか。非存在型のため、「ある／いる」の使用は見られず、「ている」以外では「た」を使用するか。

以下に、本章で明らかになったことをまとめる。

- 研究課題 1 「移動動詞＋ている」(存在型)の場面で、「ている」以外の使用は「た」と「いる／ある」に分かれる。しかし、その割合は中国語の「存在／状態」

と「変化」の割合を反映しているわけではない。

研究課題 2 「状態変化動詞＋ている」(存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多ければ、「ている」の使用率は高くなる。一方、“着”の使用が少なく、“有”の使用が多い場面では、「ている」の使用率は低くなり「ある／いる」を用いる傾向にある。

研究課題 3 「状態変化動詞＋ている」(非存在型)の場面で、中国語において“着”の使用が多い場面では、「ている」の使用率が高くなる。

中国語母語話者は、上級であっても日本語母語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面において、同様に「移動動詞＋ている」を用いることは困難であることが明らかになった。この場面においては、「た」あるいは「ある／いる」の使用傾向が見られ、先行研究の議論を踏まえて行った第 5 章の結果を裏付けるものであったと言える。

その一方、日本語母語話者が「状態変化動詞＋ている」を用いる場面については、「存在型／非存在型」にかかわらず、中国語母語話者の高い「ている」使用の傾向が見られた。さらに、「存在型」の場面においては、第 5 章で得られた、「ている」の代わりに「ある／いる」を使用するという結果であり、母語からの影響で説明可能であることを示した。

本論文における 2 つ目の研究課題であった「ている」「た」「ある／いる」における使い分けを調査した結果、母語の影響によると思われる習得の困難さが一部明らかになった。移動を表す動詞を用いる場合に誤用が生じやすかった。同じ場面で中国語では「ている」に対応するアスペクトマーカ―は使用できず、「結果の状態」に含まれる「変化」か「存在」のいずれかを言語化して誤用となることがわかった。しかし、状態変化動詞の場合には、習得が進みやすいことが明らかになった。その要因として、中国語の動詞とアスペクトマーカ―の結びつきの強さから説明できることを指摘した。

第 7 章 結論

7.1 本研究のまとめ

本研究では、対立関係の習得という観点から、中国語母語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得状況を記述し、それがどのような何に起因しているのかを明らかにすることを目的とした。これまでの日本語のテンス・アスペクト習得研究においては、「ている」がその中心的位置を占めており、対立する項目の習得までを扱った研究の手薄さを指摘するところから本研究は出発した。

ここで、改めて第 2 章で提示した本研究の研究課題を確認し、本研究で得られた結果をまとめる。

- (研究課題 1) 中国語を母語とする日本語学習者は、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。
- (研究課題 2) 中国語を母語とする日本語学習者は、「ている」と「ある／いる」との使い分けができるか。できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

まず、研究課題 1 について、本研究から得られた結果をまとめる。第 3 章で行った、上級日本語学習者への多肢選択式課題の結果から、中国語母語話者は上級であっても「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けを習得しているとは言い難く、使い分けに混乱していると思われる結果が得られた。具体的には、「る」を選択すべきところで「る」を選択できてはいるものの、未来の文脈で「ている」を用いる場面で、「ている」の代わりに「る」を使用するという傾向が見られた。さらに用法別、時点別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」両用法において「未来→過去→現在」の順に正答率が上がるという結果も得られた。本研究においては、この難易度の差を、次のように考えた。つまり、日本語においては、未来の文脈において用いる形式と、現在の文脈において用いる形式がともに「ている」である。そのため、学習者にとっては、「ている」が未来

の文脈においても用いられると言うことを認識しづらい。このように、「未来」の文脈における「ている」選択の難しさは、「ている」が「現在」および「未来」の二つの時点を表すのに対して、「ていた」が「過去」のみを表すという違いに起因するものである可能性を述べた。

続く第4章では、異なる習熟度の学習者による習得段階を検討するため、中国の大学で日本語を専攻する学習者180名を、SPOTの結果にもとづいて60名ずつの3グループに分け、多肢選択式課題を実施した。その結果、先行研究では「ている」の前段階に習得されるとされてきた「る」「た」に関しては、習熟度が低い段階から、選択の誤りが見られた。しかし、習熟度の上昇とともに正答率は上がっていった。しかし、「現在」「過去」「未来」にかかわらず「結果の状態」における「た」、「未来」の文脈における「る」の選択傾向は上位群においても依然として強い。「動作の持続」と「結果の状態」における「現在」「過去」「未来」の間の難易度の差については、両用法ともに、「未来＝過去→現在」の順に正答率が上がっていくことが確認された。習熟度が上がるにつれて正答率が上がっていくのは、「現在」のみであった。「過去」「未来」の難易度の差は、テンスの関係を表す発話時（S）と参照時（R）のうち、RをSから切り離すことの困難さに起因すると考えられる。最後に、習熟度が異なっても、対応する中国語の動詞のタイプによって、「結果の状態」の難易度が変わることが明らかになった。タイプ1の動詞では、「現在」「過去」「未来」にかかわらず正答率は低く「た」の選択が多く、タイプ2の動詞では、下位群から正答率は高く、「た」の選択率も低い。このことは、「結果の状態」における母語の影響の存在を示すものである。

次に、研究課題2について、本研究から得られた結果をまとめる。第5章ではまず、陳（2009）が日本語習得の調査に用いたタスクに基づき、日本語と中国語における比較可能なデータ収集を可能にする調査タスクを作成した。そして、このタスクを用い両言語の母語データを収集したところ、日本語話者が「移動動詞＋ている」を用いる場面で、中国語話者は“有”だけでなく“了”も用いること、日本語話者が「状態変化動詞＋ている」を用い、中国語で“着”が使用可能な場面で、中国語話者は“着”だけでなく“有”も用いることが明らかになった。この結果は、日本語が「ている」を用いて状態／位置「変化」と結果としての「状態」／「存在」を同時に言語化するのに対して、中国語は（“着”が可能な場合を除いて）「変化」と「状態」／「存在」のどちらか一方のみを言語化する、とする稲垣（2013）の分析を支持するものである。日中両言語でパラレルな

データを収集し、陳（2009）では明らかでなかった中国語における「ている」場面の表し方の実態を明らかにすることに成功した。さらに、庵（2010）が移動動詞と状態変化動詞のテイル形の違いに関して提案した「存在型」と「非存在型」の区別が、状態変化動詞のテイル形の分類にも有効であり、それが中国語の状態変化動詞における“有”と“着”の使い分けに反映されていることを示した点も意義深いと言えよう。

第6章では、第5章の結果を、中国語母語話者による日本語習得における母語の転移を考える際のベースラインとして、同様のタスクによる調査を上級日本語学習者31名に対して行った。その結果、中国語母語話者は、上級レベルであっても日本語母語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面において、「移動動詞+ている」を用いることは困難であることが明らかになった。この場面においては、「ある／いる」あるいは「た」の使用傾向が見られ、先行研究の議論を踏まえて行った第5章の結果を裏付けるものであったと言える。その一方、日本語母語話者が「状態変化動詞+テイル」を用いる場面については、「存在型／非存在型」にかかわらず、中国語母語話者の高い「ている」使用の傾向が見られた。さらに、「存在型」の場面においては、第5章で得られた、「ている」の代わりに「ある／いる」を使用するという仮説を支持する結果であり、母語からの影響で説明可能であることを示した。

7.2 本研究の意義

第二言語としての日本語の習得研究において、テンス・アスペクトは、最も研究が盛んなトピックの一つと言え、これまでに多くの研究がなされてきた。しかし、その多くが「ている」習得における普遍性や個別性、「ている」の用法間の習得に注目したものであり、「ている」を、他形式と対立関係を成す形式と捉える視点は少なかった。

本研究は、こうした日本語のテンス・アスペクト習得研究における「ている」に集中しているとも言える先行研究の問題点を指摘し、非過去と過去、完結相と継続相というテンスおよびアスペクトの対立をなす「る」「た」「ている」「ていた」の習得状況を明らかにし、その結果に対して、学習者の母語である中国語の影響、目標言語である日本語の形態的な特徴、記号論的な観点から考察を加えた。さらに、「結果の状態」の「ている」と「ある／いる」「た」との対立を、先行研究の議論を踏まえた上で、日本語母語話者、中国語母語話者、中国を母語とする日本語学習者の3つのデータを比較した。

そして、その使用傾向の違いが母語の影響から説明可能なものとそうでないものがあることを示し、先行研究の議論に一つの回答を与えることにも成功した。

もう一点、本研究に学術的意義を付け加えるとすれば、本研究で行われた4つの調査が、調査タスクの作成、データの収集といった点において、方法論的な手続きを踏んでおり、そのデータが信頼のおけるものであると言える点である。本研究において大きく関連する崔（2009）、陳（2009）といった研究は、その研究の着眼点としては大変興味深く、研究上の新たな視点を提示するという点において、大変重要なものである。しかし、既に指摘したように、方法論的な面においては改善の余地が少なくなかった。これら先行研究のもつ問題点を解消し、信頼のおける、妥当なデータ収集の上に立つ本研究は、第二言語としての日本語のテンス・アスペクト習得研究を、一歩先に進めるものであると言える。

7.3 今後の展望

本研究では、「ている」に関連する項目を取り上げ、その対立関係の習得状況を明らかにし、その結果を引き起こしている要因を探ってきた。しかし、今回の調査で扱えなかった点、不十分であった点は少なくない。

まずは方法論的な面について述べる。本研究においては、その要因が、学習者の母語である中国語の転移という観点から説明可能かというアプローチを用いている箇所がある。しかし、本調査が対象とした日本語学習者は、中国語母語話者に限られている。坂本（2005）では、真に母語からの影響かを判定するための基準として次の5つを挙げている。a) 母語獲得過程の幼児に現れない誤りか。b) 他言語を母語とする学習者に見られない誤りか。c) その誤りが他言語話者より長期にわたって現れる、消えにくい誤りか。d) その誤用が他言語話者より高頻度で出現するか。e) 誤りを含む日本文と同じ意味内容のことを学習者の母語で表現させてみて、それが日本語の言語表現に似ているか。今後は、「ている」に関連する項目との対立関係における母語の影響について、こうした観点も取り入れていく必要がある。特に、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者を対象とすることは、日本語のテンス・アスペクト習得における普遍性と個別性を明らかにすることにも繋がるだろう。例えば、第5章、第6章では、「移動動詞＋ている」の場面に関して、「ている」以外の形式の使用、つまり「た」「ある／いる」の使用の割

合は、学習者の母語である中国語の影響以外の要因が絡んでいる可能性が示唆された。今後、中国語母語話者以外も対象として研究を進めることで、「どの部分」が母語に拠らないものであるのか、あるいは、その中で学習者の母語が何らかの役割を果たしているかも明らかになってくるだろう。その際、対象とする学習者の母語のテンス・アスペクト体系と、日本語のテンス・アスペクト体系の対照も欠かせないことは言うまでもない。

また、第3章および第4章で用いた多肢選択式課題においては、今回の調査では4つの選択肢の内から1つを選択するよう求めた。しかし、選ばれた一つの選択肢に対して、学習者がどの程度、自信を持って答えていたのかについては不明である。選択式であるため、答えが分からない問題であっても回答を選ばなければならない。こうした点を解消するため、回答者がどの程度自分の回答に自信を持っているかを測る確信度（坂本 2007）を取り入れることや、選択肢に「わからない」などを加えることなども、一つの方法であると考えられる。

「る」「た」「ている」「ていた」の対立関係の習得については、多肢選択式課題で、学習者の理解の面を、「ている」「た」「ある／いる」の対立関係の習得については、条件付きの空欄補充課題で、学習者の算出の面を扱った。今後は両対立関係において理解と産出の両面から習得状況を記述し、説明を加えることも必要であろう。

最後に、本研究で得られたいくつかの習得段階に関する知見は、あくまでも横断的に収集したデータによって導かれた仮説である。長友（2002）が指摘するように、横断研究に潜む、「一般化を目指して焦るあまり、人間の経験を平均化し、実在しない人間の習得過程を描き出してしまう」（p.5）危険に常に気を付けていかなければならない。縦断的な調査も行い、今回の調査のような横断的な調査の結果と、補完し合うことで、日本語学習者のテンス・アスペクト習得の習得過程がより鮮明に描き出せると考えられる。これらすべてを、今後の課題としたい。

参考文献

- 足立章子・梅田康子・亀田仁・斎藤伸子・斉藤裕美・鶴田優（2004）『絵で導入・絵で練習』凡人社
- 荒川清秀（2003）『一步すすんだ中国語文法』大修館書店
- 荒川清秀（2011）「“着” はどんな場合に使うか」『中国語教育』8号, pp.1-11.
- 荒川清秀（2015）『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
- 庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4号, pp.75-94.
- 庵功雄（2010）「第1回 アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, pp.41-48. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 庵功雄（2011）「第2回 テンス・アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』2号, pp.59-67. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門 第2版』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 稲垣俊史（2011）「中国話者による日本語のテンス・アスペクトの習得についてーアスペクト仮説からの考察ー」『中国語話者のための日本語教育研究』2号, pp.15-26. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 稲垣俊史（2013）「テイルの二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』4号, pp.29-41. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 稲垣俊史（2015）「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得ー崔（2009）の再解釈ー」『中国語話者のための日本語教育研究』6号, pp.50-60. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 井上優・黄麗華（2000）「否定から見た日本語中国語のアスペクト」『現代中国語研究』創刊・第1期, pp.112-122.

- 井上優（2002）「「言語の対照研究」の役割と意義」国立国語研究所（編）『対照研究と日本語教育』 pp.3-20. くろしお出版
- 井上優・生越直樹・木村英樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照－日本語・朝鮮語・中国語－」生越直樹（編）『対照言語学』シリーズ言語科学第4巻, pp.125-159. 東京大学出版会
- 井上優（2011）「動的述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』1号, pp.21-34.
- 井上優（2012a）「モダリティの対照研究」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ：事例研究』 pp.195-213. ひつじ書房
- 井上優（2012b）「テンスの有無と事象の叙述様式－日本語と中国語の対照－」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』 pp.1-26. くろしお出版
- 岩崎卓（2000）「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19巻5号, pp.28-38. 明治書院
- 大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって－金田一段階－」（奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』 pp.85-104. むぎ書房に再録）
- 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」（奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』 pp.105-143. むぎ書房に再録）
- 影山太郎（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎（2009）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- 鎌田修（1996）「OPI」鎌田修・川口義一・鈴木睦（編）『日本語教授法ワークショップ』 pp.196-216. 凡人社
- 木村英樹（1982）「テンス・アスペクト：中国語」『講座日本語学』11巻, pp.19-39. 明治書院
- 木村英樹（1997）「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』 pp.157-179. 東方書店
- 木村英樹（2006）「「持続」・「完了」の視点を超えて－北京官話における「実存相」の提案－」『日本語文法』6巻2号, pp.45-61.
- 木村英樹（2012）『中国語文法の意味とカタチ－「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究－』白帝社

- 許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による「ている」の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95号, pp.37-48.
- 許夏珮（2000）「自然発話における日本語学習者による『テイル』の習得研究－OPI データの分析結果から－」『日本語教育』104号, pp.20-29.
- 許夏珮（2002）「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115号, pp.41-50.
- 許夏珮（2005）『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15号, pp.48-63（金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』pp.5-26. むぎ書房に再録）
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 黒野敦子（1995）「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87号, pp.153-164.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史（1996）「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』6号, pp.201-218.
- 小山悟（2003）「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性：母語の役割と影響を中心に」小山悟・大友可能子・野原美和子（編）『言語と教育：日本語を対象として』pp.415-436. くろしお出版
- 崔亜珍（2009）「SRE 理論の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究－中国人日本語学習者を対象に－」『日本語教育』142号, pp.80-90.
- 崔亜珍（2011）「自然発話における日本語テンス・アスペクトの習得研究－R 時の認識を中心に－」『小出記念日本語教育研究』19号, pp.5-19.
- 崔亜珍（2012）「日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得研究－SRE 理論の観点から－」九州大学大学院博士学位論文（未公刊）
- 坂本正（2005）「母語干渉判定基準－5 つの提案－」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ（編）『言語教育の新展開－牧野成一教授古稀記念論集』pp.275-288. ひつじ書房
- 坂本正（2007）「第二言語習得研究における盲点－確信度－」『日本文化學報』33号, pp.95-109. 韓国日本文化学会
- 佐々木嘉則（2010）『今さら訊けない…第二言語習得再入門』凡人社
- 下地早智子（2004）「日中両言語における文法現象としての視点の差異－移動動詞・受

- 身の表現・テンス／アスペクトの場合ー』『神戸市外国語大学外国語研究』58号, pp.59-75.
- 白井恭弘(1998)「言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子(編)『ボーダーレス時代の外国語教育』pp.69-108. 未来社
- 白井恭弘(2004)「非完結相『ている』の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉(編)『対照言語学の新展開』pp.71-99. ひつじ書房
- 菅谷奈津恵(2003)「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究:『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に」『日本語教育』119号, pp.65-74.
- 菅谷奈津恵(2004)「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究:L1の役割の検討」『日本語教育』123号, pp.56-65.
- 菅谷奈津恵(2005)「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005年版』(『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊号特集号) pp.39-67. 凡人社
- 菅谷奈津恵(2016)「アスペクトの習得」長友和彦(監修)森山新・向山陽子(編)『第二言語としての日本語習得研究の展望:第二言語から多言語へ』pp.123-143. ココ出版
- 鈴木重幸(1957)「日本語の動詞のすがた(アスペクト)についてー～スルの形と～シテイルの形ー」(金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』pp.63-81. むぎ書房に再録)
- 砂川有里子(1986)『日本語文法 セルフマスターシリーズ2 する・した・している』くろしお出版
- 曾我松男(1993)「日本語動詞における完了と実現について」『アカデミア 文学・語学編』54号, pp.43-75.
- 高橋太郎(1985)『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
- 高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析ー中国語話者の母語干渉20例ー』スリーエーネットワーク
- 陳昭心(2009)「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態」のテイルー日本語母語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見てー」『世界の日本語教育』19号, pp.1-15.

- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’ の意味と機能ーアスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけー」 (寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 pp.313-358. くろしお出版に再録)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究ー概観ー」 『日本語教育』 81 号, pp.1-18.
- 長友和彦 (1998) 「第二言語としての日本語の習得研究」 橋口俊秀・稲垣佳世子 (編) 『児童心理学の進歩 1998 年版』 pp.79-110. 金子書房
- 長友和彦 (2002) 「JSL 習得研究の発展を願ってー私的研究レビューー」 お茶の水女子大学日本言語文化学会 (編) 『第二言語習得・教育の研究最前線 2002 年版』 (『言語文化と日本語教育』 2002 年 5 月増刊特集号) pp.2-8. 凡人社
- 西口光一 (1995) 『日本語教授法を理解する本 歴史と理論編』 バベルプレス
- 西坂祥平・稲垣俊史 (2016) 「日本語と中国語における「変化」と「状態」／「存在」の表し方ー移動動詞と状態変化動詞のテイル使用場面に注目してー」 『中国語話者のための日本語教育研究』 7 号, pp.27-44. 中国語話者のための日本語教育研究会
- 西由美子・白井恭弘 (2004) 「会話における「ている」の意味ーアスペクト二構成要素理論による分析」 南雅彦・浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育 3』 pp.231-249. くろしお出版
- 野田尚史 (2001) 「文法項目の難易度」 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 『日本語学習者の文法習得』 pp.101-120. 大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法ー改訂版ー』 くろしお出版
- 松井一美 (2008) 「ロシア人日本語学習者のテイルの習得研究ー「動作の持続」と「結果の状態」を中心に」 『創価大学別科紀要』 19 号, pp.69-85
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 中右実 (編) 田中成範・松本曜 (著) 『空間と移動の表現』 pp.125-230. 研究社出版
- 三村由美 (1999) 「第 2 言語としての日本語のパーフェクトの習得」 『言語文化と日本語教育』 17 号, pp.48-59. お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 三宅登之 (2010) 「“了 1” と “了 2” の相違点とその認知的解釈」 『中国語教育』 8 号, pp.46-66.
- 村上京子 (2010) 「日本語教育における実証的研究ー研究方法と個人差についてー」 『日本語教育』 146 号, pp.90-102.

- 楊凱榮 (2001) 「中国語の“了”について」 つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』 pp.61-95. ひつじ書房
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp.155-327. むぎ書房
- 李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子 (2015) 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18号, pp.53-69.
- Andersen, R. W. (1984). The one to one principle of interlanguage construction, *Language Learning*, 34, 77-95.
- Andersen, R. W. (1991). Developmental sequences: The emergence of aspect marking in second language acquisition, In T. Huebner & C. A. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*, Amsterdam: John Benjamins, 305-324.
- Andersen, R. W. & Shirai, Y. (1994). Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133-156.
- Andersen, R. W. & Shirai, Y. (1996). The primacy of aspect in first and second language acquisition principles: The pidgin-creole connection, In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition*, San Diego, CA: Academic press, 527-570.
- Bardovi-Harlig, K. (2000). *Tense and aspect in second language acquisition: Form, meaning, and use*. Oxford: Blackwell.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge University Press. (山田小枝訳 (1988) 『アスペクト』 むぎ書房)
- Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge University Press. (久保修三訳 (2014) 『テンス』 開拓社)
- Corder, S. P. (1967). The significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-170.
- Corder, S. P. (1971). Idiosyncratic dialects and error analysis. *International Review of Applied Linguistics*, 9 (2), 147-159.
- Dulay, H., & Burt, M. (1973). Should we teach children syntax? *Language Learning*,

23, 245-258.

Dulay, H., & Burt, M. (1974). Natural sequences in child second language acquisition.

Language Learning, 24, 37-53.

Dulay, H., Burt, M., & Krashen, S. D. (1982). *Language two*. New York, NY:

Oxford University Press. (牧野高吉訳 (1982) 『第2言語の習得』 弓書房)

Gass, S. M. (2013). *Second Language Acquisition: An Introductory Course* (4th ed.).

Routledge.

Gilbert, G., & Orlovic, M. (1975). Pidgin German spoken by foreign workers in West

Germany: the definite article. Paper presented at the International Congress on

Pidgins and Creoles, University of Hawaii at Manoa, Honolulu.

Ishida, M. (2004). Effects of recasts on the acquisition of the aspectual form -te i-(ru)

by learners of Japanese as a foreign language. *Language Learning*, 54, 311-394.

Kellerman, E. (1978). Giving learners a break: Native speaker intuition as a source

of predictions about transferability. *Working Papers on Bilingualism*, 15, 59-92.

Kellerman, E. (1983). Now You See It, Now You Don't. In S. Gass., & L. Selinker.

(Eds.), *Language Transfer in Language Learning*, Rowley, MA: Newbury House, 112-134.

Li, C., & Thompson, S. A. (1981). *Mandarin Chinese: Functional reference grammar*.

Berkeley, CA: University of California Press.

Reichenbach, H. (1947). *Elements of symbolic logic*. NY: The Macmillan Company.

(石本新 (訳) (1982) 『記号論理学の原理』 大修館書店)

Rosch, E. (1973). On the internal structure of perceptual and semantic categories. In

T. Moore (Eds.), *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, New York : Academic Press, 111-144.

Schachter, J. (1974). An error in error analysis. *Language Learning*, 24, 205-214.

Schachter, J., & Rutherford, W. (1979). Discourse function and language transfer.

Working Papers in Bilingualism, 19, 3-12.

Selinker, L. (1969). Language transfer. *General Linguistics*, 9, 67-92.

Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in*

Language Teaching, 10, 209-231.

- Selinker, L. (1992). *Rediscovering Interlanguage*. London: Longman.
- Shibata, M. (1999). The use of Japanese tense-aspect morphology in L2 discourse narratives. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 2, 68-102.
- Shirai, Y. (1995). Tense-aspect marking by L2 learners of Japanese. In D. MacLaughlin & S. McEwen (Eds.), *BUCLD 19: Proceedings of the 19th annual Boston University Conference on Language Development*, Somerville, MA: Cascadilla Press, 575-586.
- Shirai, Y. (1998). The emergence of tense-aspect morphology in Japanese: Universal predisposition? *First Language*, 18, 281-309.
- Shirai, Y. (2002). The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5, 42-61.
- Shirai, Y., & Andersen, R. W. (1995). The acquisition of tense-aspect morphology: A prototype account. *Language*, 71, 743-762.
- Shirai, Y., & Kurono, A. (1998). The Acquisition of Tense-Aspect Marking in Japanese as a Second Language. *Language Learning*, 48, 245-279.
- Smith, C.S. (1991). *The parameter of aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Smith, C. S., & Erbaugh, M. S. (2005). Temporal interpretation in Mandarin Chinese. *Linguistics*, 43(4), 713-756.
- Sugaya, N., & Shirai, Y (2004). The acquisition of the imperfective aspect marker by L2 learners of Japanese: Universals vs. L1 transfer. *Comparative Research for a Developmental Index for first and second language of Japanese and English*. Grant-in-Aid for Scientific Research (B) 13410034 (OTOMO Kiyoshi), 239-256.
- Sugaya, N., & Shirai, Y. (2007). The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 learners of Japanese: Transfer, Universals, or Multiple Factors? *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 1-38.
- Tai, James. (1984). Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*, 289-296.
- White, L. (1991). Adverb placement in second language acquisition: Some effect of

- positive and negative evidence in the classroom. *Second Language Research*, 7, 133-161.
- Whitman, R. L., & Jackson, K. L. (1972). The unpredictability of contrastive analysis. *Language Learning*, 22(1), 29-41.
- Vendler, Z. (1957). Verbs and times. *Philosophical Review*, 66, 143-160.
- Zobl, H. (1982). A direction for contrastive analysis: The comparative study of developmental sequences. *TESOL Quarterly*, 16, 169-183.

付録資料①

第3章 調査紙A

問1.

パクさんと田中さんが勉強しています。田中さんは消しゴムを探しています。

田中：消しゴムがない。どこに行ったんだろう？

パク：消しゴム？そこにあるよ。

田中：どこ？

パク：（机の下を指差しながら）そこだよ、そこ。机の下に_____よ。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

問2.

昨日パクさんはパーティーに行きました。翌日、パクさんはリーさんと話しています。

パク：昨日はどうしてパーティーに来なかったんですか？

リー：今日の漢字のテストがあるから、家でずっと_____。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問3.

田中さんとリーさんは、未来の世界について話しています。

田中：2200年は、どんな世界かなあ。

リー：きっと、もっと便利な世界でしょうね。

田中：そうだね。でも、僕たちはもう_____から、その世界は見られないよね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問4.

パクさんはとても眠^{ねむ}そうです。

パク：今日はテストがあったから、昨日の夜、遅くまで勉強^{べんきょう}していたんです。

リー：大変^{たいへん}だったね。昨日は何時^{きのう なんじ}ごろ_____の？

- A. 寝^ねる B. 寝^ねた C. 寝^ねている D. 寝^ねていた

問5.

先生^{せんせい}が同僚^{どうりょう}の先生^{せんせい}と話^{はな}しています。

先生^{せんせい}：昨晚^{さくばん}、研究室^{けんきゅうしつ}で本^{ほん}を読^よんでいたら、突然^{とつぜん}ドアが_____んです。誰^{だれ}かと思^{おも}つたら、隣^{となり}の先生^{せんせい}でした。部屋^{へや}を間違^{まちが}えたそうです。

同僚^{どうりょう}：そうですか。それは驚^{おどろ}きましたね。

- A. 開^あく B. 開^あいた C. 開^あいている D. 開^あいていた

問6.

パクさんとリーさんは、あるドラマについて話^{はな}しています。

パク：ねえ、このあと、あの病気^{びょうき}の人^{ひと}どうなると思う？

リー：そうだなあ。重い病気^{おもい びょうき}だから、きっとすぐ_____でしょう。

- A. 死^しぬ B. 死^しんだ C. 死^しんでいる D. 死^しんでいた

問7.

パクさんとリーさんが自分^{じぶん}の家族^{かぞく}について話^{はな}しています。

パク：リーさんのお父^{とう}さんはどんな人^{ひと}ですか。

リー：父^{ちち}はとても面白^{おもしろ}い人^{ひと}です。よく面白^{おもしろ}いことを言^いって、家族^{かぞく}を_____ます。

- A. 笑^{わら}い B. 笑^{わら}わせ C. 笑^{わら}われ D. 笑^{わら}わせられ

問 8.

リーさんが、朝、学校で田中さんと話しています。

リー：昨日の夜11時ごろ、地震がありましたね。

田中：えっ、そうなんですか？その時間、私は_____から、全然気がつきませんでした。

- A. 寝る B. 寝た C. 寝ている D. 寝ていた

問 9.

卒業式の日に、田中さんとパクさんが話しています。

田中：ねえ、想像してみて、10年後の自分を。

パク：10年後の自分？そうだなあ、そのころ、私は_____でしょうね。

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問 10.

夜の7時です。ちょうどお母さんが帰ってきました。

子供：お母さん、お腹すいたよ。

お母さん：はいはい、ちょっとまってね。今ご飯を_____から。

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問 11.

お母さんが台所でご飯を作っています。子供がおもちゃを持ってやって来ました。

子供：お母さん、このおもちゃ、_____ちゃった。

お母さん：この前買ったばかりでしょう。お父さんに怒られるわよ。

- A. 壊れ B. 壊し C. 壊され D. 壊れられ

問 1 2.

ゆうはん^{じかん}です。こども^{あそ}んでいます。かあ^{こども}が子供をよんでいます。

かあ^{はん}さん：ご飯できたわよ。

こども^{すこ}：はい、もう少しまって、もうすぐ終わるから。

かあ^{さき}さん：もう。じゃあ、先に_____わよ。

- A. た^{食べる} B. た^{食べた} C. た^{食べている} D. た^{食べていた}

問 1 3.

かあ^{こども}さんと子供が自宅に向かって歩いていきます。

こども^{まえ}：あれ？うちの前に車^{くるま}が一台^{いちだい}_____よ。

かあ^{ともだち}さん：お父さんのお友達の車^{くるま}よ。きっとお父さんに会いにきたのよ。

- A. と^{停まる} B. と^{停まった} C. と^{停まっている} D. と^{停まっていた}

問 1 4.

たなか^{こいびと}さんは恋人の写真^{しゃしん}を同僚^{どうりょう}に見せています。

どうりょう^{きれい}：わあ、綺麗な人^{ひと}ですね。付き合^{つきあ}ってどのくらいですか？

たなか^{ねん}：5年^{ごねん}くらいです。実は、来年^{らいねん}の春^{はる}、彼女^{かのじょ}と_____んです。

- A. けっこん^{結婚する} B. けっこん^{結婚した} C. けっこん^{結婚している} D. けっこん^{結婚していた}

問 1 5.

田中さんは昨日、パーティーに参加しました。パクさんは参加できませんでした。次の日、二人が話しています。

パク：昨日のパーティー、どうだった？

田中：すごい量の_____よ。準備が大変だっただろうな。

- A. 料理が出た B. 料理を出した C. 料理が出された D. 料理を出された

問 1 6.

田中さんはレストランでお金を払っています。パクさんから電話です。

パク：もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか？

田中：ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。

パク：そうですか。わかりました。また今度行きましょう。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問 1 7.

田中さんは風邪を引いてしまいました。そこで、朝、上司に電話をしています。

田中：すみません。熱があるので、今日は仕事を_____ください。

上司：そうですか。わかりました。では、お大事に。

- A. 休む B. 休ませて C. 休まれて D. 休められて

問18.

田中さんが朝、学校でリーさんと話しています。

田中：昨日家に電話したけど、出ませんでしたね。

リー：そうですか？何時ごろでしたか？

田中：夜の8時ごろでした。

リー：ああ、そのころはご飯を_____ので、電話が聞こえなかったんだと思います。

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問19.

田中さんは図書館で勉強しています。ある学生が話しかけてきました。

学生：すみません、この本、あなたのですか？

田中：いいえ、違いますけど…。

学生：あ、そうですか。だれか忘れたのかなあ。

田中：そういえば、さっきまで、おばあさんがその席に_____よ。

- A. 座ります B. 座りました C. 座っています D. 座っていました

問20.

田中さんはとても安いパソコンを買いました。

田中：このパソコン、2万円で買ったんです。

パク：ええ、2万円？大丈夫ですか？すぐ_____かもしれませんよ。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

問 2 1.

田中さんはレストランで上司と食事をして、お金を払おうとしています。

上司：あつ、私が払うよ。

田中：本当にすみません。また_____ちゃって。

上司：いやいや、君はいつも頑張っているからね。

- A. 払っ B. 払わせ C. 払われ D. 払わせられて

問 2 2.

子供がお母さんに、学校のことを話しています。

子供：今日、学校の授業でケーキを_____よ。

お母さん：そうなの。すごいね。上手にできた？

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問 2 3.

田中さんは金魚を飼っています。朝起きてからえさをやりに金魚のところに行くと…。そのあと学校でリーさんと話しています。

リー：今日は元気がありませんね。何かありましたか？

田中：うん…。実は、今朝起きたら、うちの金魚が_____んだ。

リー：そうですか…。それは残念でしたね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問 2 4.

リーさんが田中さんの家に来ました。田中さんの部屋には新しいテレビがあります。

リー：あれ、田中さん、新しいテレビを買ったんですか。

田中：はい、先週、古いテレビが突然_____ので、買いました。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている。 D. 壊れていた

問 2 5.

リーさんは田中さんに借りた本を返すところです。しかし…。

リー：この本、コーヒーで_____しまいました。本当にすみません。

田中：古い本ですから大丈夫ですよ。気にしないでください。

- A. 汚れて B. 汚して C. 汚されて D. 汚れられて

問 2 6.

リーさんと田中さんは映画を見に来ています。人が多くて、空いている席は少ないです。

リー：わあ、すごい人だね。これじゃあ、一緒に座れないね。

田中：そうだね。じゃあ、リーさんはここにどうぞ。私はあっちに_____から。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 2 7.

リーさんは田中さんの家に電話をしています。田中さんのお母さんが電話に出ました。

リー：もしもし、リーです。田中さんをお願いします。

田中の母：今ソファで_____から、起こしてきますね。ちょっと待っていてください。

- A. 寝る B. 寝た C. 寝ている D. 寝ていた

問 28.

田中さんはリーさんと電話で話しています。

田中：じゃあ、明日の3時にあの喫茶店で会おうね。

リー：うん。私は早く着くと思うから、先に行って、いつもの席に_____ね。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 29.

電話でパクさんが田中さんを食事に誘っています。

パク：もしもし、今から一緒に食堂でご飯を食べませんか？

田中：すみません、今図書館で_____。今日は忙しいから、また今度誘ってください。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問 30.

社長が秘書と話しています。

社長：タクシー呼んでくれた？

秘書：はい。9時に来ると言ったので、8時55分にはタクシーが会社の玄関に_____とおもいます。

社長：わかった。ありがとう。

- A. 停まる B. 停まった C. 停まっている D. 停まっていた

問 3 1.

リーさんがパクさんをジョギングに誘っています。

リー：明日、一緒にジョギングしませんか？

パク：いいですよ。何時ごろがいいですか？

リー：朝の 6 時はどうですか？

パク：6 時？早すぎますよ。私はその時間まだ_____と思います。

- A. 寝る B. 寝た C. 寝ている D. 寝ていた

問 3 2.

今、桜が満開です。田中さんはリーさんと桜について話しています。

リー：今年は桜が咲くのが早かったですね。

田中：そうですね。昨日家の近くの公園に行ったら、もう花びらが少し地面に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

問 3 3.

田中さんは会議に出席しています。もうすぐ開始の時間です。

田中：あ、そろそろ時間だ。席に座らないと。

司会：ただ今から_____ます。ご着席ください。

- A. 会議が始まり B. 会議を始め C. 会議が始められ D. 会議を始められ

問34.

がっこうが終わりました。田中さんとパクさんはいつも自転車と一緒に帰ります。でも、今日
パクさんには、自転車がありません。

田中：パクさん、自転車は？

パク：昨日、リーさんに貸しました。

田中：あの人は物を大切にしないから、返してもらうときには、自転車が_____か
もしれませんよ。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

問35.

田中さんが家の玄関でお母さんと話しています。

田中：クラスのパーティーに行ってきます。

お母さん：帰り道は暗いから気をつけてね。遅くなるときは、大通りを通って帰って来るの
よ。夜7時以降は電気が_____から。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問36.

田中さんは市役所で働いて、来年度の市民講座を担当しています。課長が話しかけます。

課長：来年度の市民講座の案内状はいつごろ_____か？

田中：いま印刷中ですから、来月の初めごろだと思います。

- A. 出ます B. 出します C. 出られます D. 出されます

問 37.

夜の8時です。リーさんはまだ食事をしていません。そこで、近くのレストランに電話しています。

リー：もしもし、今からそちらで食べたいんですが、お店はまだ_____か？

店員：はい、当店は夜10時までの営業となっております。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問 38.

パクさんはバスの中で運転手に質問しています。

パク：すみません、このバスはどこに行きますか？ 栄に行きたいんですが…。

運転手：名古屋駅行きですよ。途中、栄に_____よ。

- A. 停まります B. 停まりました C. 停まっています D. 停まっていました

付録資料②

第3章 調査紙B

問1.

パクさんが田中さんに電話しています。

パク：田中さん、ちょっと話があるんだけど、明日時間ある？

田中：いいよ。明日はずっと学校にいると思うから。

パク：ありがとう。私はお昼ごろ学校に行くので、1時はどう？

田中：いいよ。そのころ、私は図書館で_____と思うので、学校に着いたら連絡してね。

- A. 勉強する B. 勉強した C. 勉強している D. 勉強していた

問2.

今日、花子の両親は花子連れてピクニックに行きます。お父さんはもう準備ができました。お母さんはまだ準備をしています。

お父さん：おーい、そろそろ出発するぞ。

お母さん：いま花子に服を_____いるから、ちょっとまって。

- A. 着て B. 着せて C. 着られて D. 着せられて

問3.

田中さんとリーさんが、寮の玄関を掃除しています。

田中：だいぶ綺麗になりましたね。

リー：そうですね。でも、みんなが毎日使いますから、明日はまたごみが_____で
しょうね。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

問4.

田中さんが会社で同僚と話しています。

田中：今朝、会社に来るとき、救急車が道の真ん中に_____。何かあったんですね。

同僚：はい、交通事故があったんですよ。私はちょうど事故を見てびっくりしました。

- A. 停まります B. 停了りました C. 停まっています D. 停まっていた

問5.

田中さんは学校でパクさんと話しています。

田中：昨日、喫茶店でSMAPの木村拓哉さんを見ましたよ。

パク：えっ？本当ですか？

田中：ええ、木村さんはお店に入って来て、私の席の近くに_____んです。びっくり
しましたよ。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問6.

リーさんが田中さんに電話しています。

リー：もしもし、田中さん。ちょっとお願いがあるんですけど、今時間がありますか？

田中：今ですか？ごめんなさい、今ご飯を_____ので、後でいいですか？

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問7.

リーさんは自己紹介をしています。

リー：私はリーと申します。今、大学3年生です。大学に入る前、3年間仕事をしていました。だから、皆さんより少し年が上かもしれません。

パク：リーさんは_____か？

リー：はい。子供も二人います。

- A. 結婚します B. 結婚しました C. 結婚しています D. 結婚していました

問8.

パクさんと田中さんは、夕方、寮に帰る途中です。

パク：この道、暗くてちょっと怖いですね。

田中：そうですね。でも、もうすぐ6時半ですから、電気が_____と思いますよ。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問 9 .

パクさんが先生と話しています。昨日テストがありましたが、パクさんの点数はあまりよくありませんでした。

先生：最近、あまり勉強していないみたいですね。

パク：すみません。明日からちゃんと_____。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問 1 0 .

今日はパクさんの家でパーティーです。リーさんはアルバイトがあつて、遅れて来ました。

リー：ごめんなさい、遅くなつて。

パク：いいえ。アルバイト、大変でしたね。

リー：はい。あ、お寿司がある！

パク：リーさんのために、_____んですよ。さあ、食べて。

- A. 残っている B. 残してある C. 残されている D. 残られている。

問 1 1 .

リーさんとパクさんが寮に向かって歩いています。そのとき、救急車が二人の近くを通っていきました。

パク：あれ？救急車が寮の方に向かっているね。

リー：そうね。あつ、寮の前に_____よ。何かあったのかな。

パク：心配ですね。大したことじゃなければいいけど。

- A. 停まる B. 停まった C. 停まっている D. 停まっていた

問 1 2.

リーさんとパクさんは買い物をしています。リーさんは自分の腕時計を見えています。

リー：もう 12 時だよ。そろそろ昼ご飯を食べようか。

パク：えっ？ 12 時？ 違いますよ。まだ 11 時ですよ。その時計は_____ね。

- A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

問 1 3.

田中さんは今日、新しい家に引っ越してきました。しかし、まだ布団がありません。大家さんと話しています。

大家：布団はいつ届く予定ですか？

田中：明日の予定です。大丈夫です。今日はソファで_____から。

- A. 寝ます B. 寝ました C. 寝ています D. 寝ていました

問 1 4.

田中さんは車を運転しています。目の前に何か見えます。

田中：あ、道路で猫が_____。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問 1 5.

パクさんは、朝、スーパーに買い物に来ました。しかし…。

パク：あれ？ おかしいなあ。ここに「9 時開店」って書いてあるけど…。(近くの人に) すみません、このお店、何時に_____か？

近くの人：ああ、今日は水曜日だから、休みですよ。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問16.

リーさんが、月曜日の朝、学校で田中さんと話しています。

リー：田中さん、週末どこかへ行きましたか？

田中：友達と海に行くつもりでしたが、雨が降ったので行けませんでした。

リー：そうですか。残念でしたね。

田中：ええ。とても楽しみにしていたので、_____。

- A. がっかりしました B. がっかりさせました C. がっかりされました D. がっかりさせられました

問17.

田中さんとリーさんとパクさんは同じ寮に住んでいます。今日は一緒に旅行に行きます。集合時間の朝8時になりました。しかし、リーさんは…。

田中：あれ？リーさんはまだ来てないの？

パク：昨日、夜遅くまで部屋の電気が_____から、寝坊だと思うよ。電話してみようか？

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問18.

田中さんは食事会に遅刻しそうです。リーさんに電話しています。

田中：もしもし。すみません、アルバイトが遅くなって…。今から移動しますから、ちょっと遅くなりそうです。

リー：そうですか。じゃあ、先に_____から、気をつけて来てくださいね。

- A. 食べます B. 食べました C. 食べています D. 食べていました

問 19.

パクさんが田中さんの家に来ています。パクさんは以前も遊びに来たことがあります。

パク：田中さん、犬はどこですか。小屋もないようですが。

田中：うちの犬は、先月、突然_____。その日も朝は元気だったんですが、夜気づいたらもう…。

パク：そうですか。それは残念でしたね。

- A. 死にます B. 死にました C. 死んでいます D. 死んでいました

問 20.

田中さんは友達の家で電話をしました。すると、友達の子供が電話に出ました。

田中：もしもし、お母さんいる？

友達の子供：うん、台所でご飯を_____。ちょっと待ってください。お母さんに代わります。

- A. 作ります B. 作りました C. 作っています D. 作っていました

問 21.

パクさんとリーさんが朝、建物の外から先生の研究室を見えています。

パク：先生まだ来ていないみたいね。

リー：そうだね。あっ、今電気が_____よ。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問 2 2.

部下が上司に今度の出張についてお願いをしています。

部下：今度の出張、私に_____ください。

上司：そうだな。じゃあ、君に頼むよ。

- A. 行って B. 行かせて C. 行かれて D. 行かせられて

問 2 3.

山田さんとリーさんは一緒に居酒屋にいます。

山田：あ、もう 9 時だ。そろそろ帰らないと。

リー：もう帰るの？もう少し一緒に飲みましょうよ。

山田：いや、うちで奥さんが待っているから。

リー：え？山田さん、いつ_____んですか？

山田：今年の春だよ。あれ、知らなかったの？

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問 2 4.

田中さんは喫茶店にいます。パクさんとここで 3 時に会う約束をしています。しかし、3 時になってもパクさんはまだ現れません。すると、3 時 05 分にパクさんから電話が来ました。

パク：もしもし、ごめんごめん。今店に着いたところだよ。どこにいる？

田中：一番奥の席に_____よ。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 2 5.

パクさんが田中さんの家に来ています。パクさんは引き出しの中にあるお金を見つけました。

パク：あ、こんな所に、お金があるよ。

田中：それはね、もしものときのために、_____んですよ。

- A. 入っている B. 入れてある C. 入れられている D. 入られている

問 2 6.

田中さんとパクさんとリーさんは同じ寮に住んでいます。今日は寮でパーティーをしています。しかし…。

田中：リーさんはまだ来ていませんね。外出しているのかな。

パク：いいえ、部屋にいますよ。私が来るとき、部屋のドアが_____から。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問 2 7.

テストの翌日、先生とパクさんが話しています。

先生：テスト、あまり良くありませんでしたね。前日はちゃんと_____か？

パク：すみません。実はアルバイトで疲れて寝てしまったんです。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問 28.

リーさんはパクさんと話しています。

リー：昨日、大学の前の喫茶店に行きました。あそこのコーヒー、全然おいしくなかったです。

パク：そうそう。あの店は、いつもまずいコーヒーを_____から、もう行かない方がいいよ。

- A. 飲む B. 飲ませる C. 飲まれる D. 飲ませられる

問 29.

パクさんがレストランに電話しています。

パク：もしもし、予約をしたいんですが。明日の夜10時なんですが、その時間はまだお店は_____か？

店員：はい、夜12時までですので、大丈夫です。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問 30.

田中さんとパクさんが話しています。パクさんは昨日、街で田中さんを見かけました。

パク：田中さん、昨日、小さな女の子と買い物をしていましたね。あれは誰ですか？

田中：私の娘ですよ。

パク：えっ？田中さんは独身ですよ？

田中：ええ。でも、実は以前_____んです。そのときの子供です。

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問3 1.

田中さんは来月の会議を担当しています。課長が話しかけます。

課長：来月の会議の準備、_____いますか？

田中：はい、もうすぐ当日のスケジュールが完成します。

- A. 進んで B. 進めて C. 進まれて D. 進められて

問3 2.

田中さんはテレビの修理をしてもらうために、電気屋に来ています。店員に事情を説明しています。

田中：昨日、テレビを見ようと思ったら、テレビが_____。そのときまで、全然

気づきませんでした。それで、修理をお願いしたいんですが。

- A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

問3 3.

パクさんとリーさんは、先生の研究室の前に来ました。

パク：（ドアをノックして）あれ？先生いないみたいだね。

リー：おかしいなあ。電気が_____のに。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問34.

田中さんは同僚と居酒屋へ行って、たくさんお酒を飲みました。帰り道、二人は駅で電車を待っています。

同僚：大丈夫ですか。もうすぐ電車が来ますよ。

田中：大丈夫です。すみません。

同僚：あっ、それ以上進むと線路に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

問35.

リーさんは田中さんに電話しました。しかし、田中さんは食事中で電話に出られませんでした。田中さんは食事の後、携帯電話を見ました。

田中：もしもし、リーさんですか？すみません、さっき私に電話しましたか？家族とご飯を_____ので、全然気づきませんでした。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問36.

田中さんは大きな荷物を運んでいます。パクさんが田中さんに話しかけます。

パク：その荷物、重そうですけど、大丈夫ですか？

田中：ええ、大丈夫です。ちょっと、ここに荷物を_____もらってもいいですか？

パク：はい、いいですよ。

- A. 置いて B. 置かせて C. 置かれて D. 置かせられて

問 3 7.

パクさんが田中さんに明日の予定を聞いています。

パク：明日、家にいますか？

田中：うん、その予定だけど。

パク：家に遊びに行ってもいいですか？

田中：いいですよ。何時ごろですか？

パク：午前11時ごろはどうですか？

田中：そのころ、私は昼食を_____と思いますから、一緒に食べませんか？

A. 作る

B. 作った

C. 作っている

D. 作っていた

問 3 8.

パクさんは道を歩いています。そして、その前を男の人が歩いています。

パク：あ、すみません、財布が_____よ。

男の人：あ、ありがとうございます。

A. 落ちます

B. 落ちました

C. 落ちています

D. 落ちていました

第4章 調査紙A

在此课题里面会出现几个对话。在对话前 里，会有对话场景的说

せんたくし なか ひと はい あた ばめん じょうきょう お かいわぶん
選択肢の中から一つだけが入ります。与えられた場面・状況で起こる会話文

として、最も適切なものに○を付けてください。前の問題に逆戻りはしないでください。

下面为例题。

(例题)

たなか げつようび あさ がっこう やまだ はな
田中さんは、月曜日の朝、学校で山田さんと話しています。

たなか しゅうまつ で
田中：週末はどこか出かけましたか？

やまだ
山田：はい。こうこうともだちあそびにきていたので、まちなか。

- あんない あんない あんない あんない
 A. 案内してくれました B. 案内されました C. 案内させました D. 案内してあげました

此例题，是田中先生和山田先生的对话。划线处应填入“山田先生当高中朋友的导游”，所以正确项目是D。

この例題は、^{れいだい}田中さんと^{たなか}山田さんの^{やまだ}会話文です。^{かいわぶん}下線部は、^{かせんぶ}「^{やまだ}山田さんが

こうこう ともだち あんない あらわ せいかい
高校の友達を案内した」ことを表しますから、Dが正解です。

【请耐心等待下一个指示。在那之前请不要打开下一页。】

問1.

パクさんと田中さんが勉強しています。田中さんは消しゴムを探しています。

田中：消しゴムがない。どこに行ったんだろう？

パク：消しゴム？そこにあるよ。

田中：どこ？

パク：（机の下を指差しながら）そこだよ、そこ。机の下に_____よ。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

問2.

昨日パクさんはパーティーに行きました。翌日、パクさんはリーさんと話しています。

パク：昨日はどうしてパーティーに来なかったんですか？

リー：今日の漢字のテストがあるから、家でずっと_____。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問3.

田中さんとリーさんは、未来の世界について話しています。

田中：2200年は、どんな世界かなあ。

リー：きっと、もっと便利な世界でしょうね。

田中：そうだね。でも、僕たちはもう_____から、その世界は見られないよね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問4.

パクさんとリーさんが朝、建物の外から先生の研究室を見えています。

パク：先生まだ来ていないみたいね。

リー：そうだね。あつ、今電気が_____よ。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問5.

先生が同僚の先生と話しています。

先生：昨晚、研究室で本を読んでいたら、突然ドアが_____んです。誰かと思っ

たら、隣の先生でした。部屋を間違えたそうです。

同僚：そうですか。それは驚きましたね。

- A. 開く B. 開いた C. 開いている D. 開いていた

問6.

パクさんとリーさんは、あるドラマについて話しています。

パク：ねえ、このあと、あの病気の人どうなると思う？

リー：そうだなあ。重い病気だから、きっとすぐ_____でしょう。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問 7.

パクさんはスーパーで田中さんに会いました。

パク：あっ、田中さん、こんにちは。どうしたんですか？とても嬉しそうですね。

田中：ふふふ、実は今日、うちの子が試験で 100 点を取って先生に_____んです。

パク：それはすごいですね！

- A. ほめた B. ほめさせた C. ほめられた D. ほめさせられた

問 8.

卒業式の日、田中さんとパクさんが話しています。

田中：ねえ、想像してみて、10年後の自分を。

パク：10年後の自分？そうだなあ、そのころ、私は_____でしょうね。

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問 9.

夜の 7 時です。お母さんが仕事から帰ってきました。

子供：お母さん、お腹すいたよ。

お母さん：はいはい、ちょっとまってね。今からご飯を_____から。

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問 10.

ゆうはん じかん 夕飯の時間です。こども 子供はゲームであそ 遊んでいます。かあ 母さんがこども 子供をよ 呼んでいます。

かあ 母さん：ごはん 飯できたわよ。

こども 子供：はい、もう少し 少々待って、もうすぐ お 終わるから。

かあ 母さん：もう。じゃあ、先に _____ わよ。

- A. た 食べる B. た 食べた C. た 食べている D. た 食べていた

問 11.

かあ 母さんとこども 子供が自宅に向かってあ 歩いていきます。

こども 子供：あれ？うちのまえ 前にくるま 車がいちだい 一台 _____ よ。

かあ 母さん：お父さんのおともだち 友達くるま 車よ。きっとお父さんにあ 会いにきたのよ。

- A. と 停まる B. と 停まった C. と 停まっている D. と 停まっていた

問 12.

たなか 田中さんはこいびと 恋人のしゃしん 写真をどうりよう 同僚に見せています。

どうりよう 同僚：わあ、きれいな 綺麗な人ですね。つきあ 付き合ってどのくらいですか？

たなか 田中：5年 ねん くらいです。実は、らいねん 来年のはる 春、かのじょ 彼女と _____ んです。

- A. けっこん 結婚する B. けっこん 結婚した C. けっこん 結婚している D. けっこん 結婚していた

問 13.

パクさんとリーさんがじぶん 自分のかぞく 家族についてはな 話しています。

パク：リーさんのおとう 父さんはどんな人 ひと ですか。

リー：とてもおもしろ 面白い人 ひと です。よくおもしろ 面白いことをい 言って、かぞく 家族を _____ ます。

- A. わら 笑い B. わら 笑わせ C. わら 笑われ D. わら 笑わせられ

問 1 4.

田中さんはレストランでお金を払っています。パクさんから電話です。

パク：もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか？

田中：ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。

パク：そうですか。わかりました。また今度行きましょう。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問 1 5.

田中さんが朝、学校でリーさんと話しています。

田中：昨日家に電話したけど、出ませんでしたね。

リー：そうですか？何時ごろでしたか？

田中：夜の8時ごろでした。

リー：ああ、そのころはご飯を_____ので、電話が聞こえなかったんだと思います。

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問 1 6.

田中さんは図書館で勉強しています。ある学生が話しかけてきました。

学生：すみません、この本、あなたのですか？

田中：いいえ、違いますけど…。

学生：あ、そうですか。だれか忘れたのかなあ。

田中：そういえば、さっきまで、おばあさんがその席に_____よ。

- A. 座ります B. 座りました C. 座っています D. 座っていました

問17.

田中さんはとても安いパソコンを買いました。

田中：このパソコン、2万円で買ったんです。

パク：ええ、2万円？大丈夫ですか？すぐ_____かもしれませんよ。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

問18.

田中さんは今日、風邪を引きました。朝、上司に電話をしています。

田中：すみません。熱があるので、今日は仕事を_____ください。

上司：それは大変ですね。わかりました。お大事に。

- A. 休む B. 休ませて C. 休まれて D. 休められて

問19.

子供がお母さんに、学校のことを話しています。

子供：今日、学校の授業でケーキを_____よ。

お母さん：そうなの。すごいね。上手にできた？

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問 2 0.

田中さんは金魚を飼っています。朝起きてからえさをやりに金魚のところに行くと…。そのあと学校でリーさんと話しています。

リー：今日は元気がありませんね。何かありましたか？

田中：うん…。実は、今朝起きたら、うちの金魚が_____んだ。

リー：そうですか…。それは残念でしたね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問 2 1.

リーさんが田中さんの家に来ました。田中さんの部屋には新しいテレビがあります。

リー：あれ、田中さん、新しいテレビを買ったんですか。

田中：はい、先週、古いテレビが突然_____ので、買いました。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

問 2 2.

李さんはデパートでパクさんに会いました。パクさんは歩き方が少し変です。

パク：痛たたた…

李：パクさん、どうしたんですか？足を怪我したんですか？

パク：さっき、地下鉄の中で足を_____んです。痛たたた…

- A. 踏んだ B. 踏まれた C. 踏ませた D. 踏ませられた

問 2 3.

リーさんと田中さんは映画を見に来ています。人が多くて、空いている席は少ないです。

リー：わあ、すごい人だね。これじゃあ、一緒に座れないね。

田中：そうだね。じゃあ、リーさんはここにどうぞ。私はあちに_____から。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 2 4.

田中さんはリーさんと電話で話しています。

田中：じゃあ、明日の3時にあの喫茶店で会おうね。

リー：うん。私は早く着くと思うから、先に行って、いつもの席に_____ね。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 2 5.

電話でパクさんが田中さんを食事に誘っています。

パク：もしもし、今から一緒に食堂でご飯を食べませんか？

田中：すみません、今図書館で_____。今日は忙しいから、また今度誘ってください。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問 2 6 .

パクさんは明日、バス旅行に参加します。旅行会社のスタッフと話しています。

パク：あの、明日の集合場所、私は初めて行くので、分かるかどうか不安です。

スタッフ：大丈夫ですよ。広場の真ん中に大きなバスが_____から、すぐわかりますよ。

- A. 停まります B. 停了りました C. 停まっています D. 停まっていました

問 2 7 .

今、桜が満開です。田中さんはリーさんと桜について話しています。

リー：今年は桜が咲くのが早かったですね。

田中：そうですね。昨日家の近くの公園に行ったら、もう花びらが少し地面に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

問 2 8 .

田中さんと李さんは会議に出席しています。もうすぐ開始の時間です。

田中：あ、司会者が出てきましたよ。

李：本当だ。そろそろ会議が_____ね。

- A. 始まります B. 始めます C. 始められます D. 始めさせます

問 29.

学校が終わりました。田中さんとパクさんはいつも自転車で一緒に帰ります。でも、今日
パクさんには、自転車がありません。

田中：パクさん、自転車は？

パク：昨日、リーさんに貸しました。

田中：あの人は物を大切にしないから、返してもらうときには、自転車が_____か
もしれませんよ。

- A. 壊れる B. 壊れた C. 壊れている D. 壊れていた

問 30.

田中さんが家の玄関でお母さんと話しています。

田中：クラスのパーティーに行ってきます。

お母さん：帰り道は暗いから気をつけてね。遅くなるときは、大通りを通って帰って来るの
よ。夜7時以降は電気が_____から。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問 31.

夜の8時です。リーさんはまだ食事をしていません。そこで、近くのレストランに電話し
ています。

リー：もしもし、今からそちらで食べたいんですが、お店はまだ_____か？

店員：はい、当店は夜10時までの営業となっております。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問32.

パクさんはバスの中で運転手に質問しています。

パク：すみません、このバスはどこに行きますか？ 栄に行きたいんですが…。

運転手：名古屋駅行きですよ。途中、栄に_____よ。

- A. 停まります B. 停まりました C. 停まっています D. 停まっていました

第4章 調査紙 B

在此课题里面会出现几个对话。在对话前里，会有对话场景的说

せんたくし なか ひと はい あた ばめん じょうきょう お かいわぶん
選択肢の中から一つだけが入ります。与えられた場面・状況で起こる会話文

として、最も適切なものに○を付けてください。前の問題に逆戻りはしないでください。

下面为例题。

(例题)

たなか げつようび あさ がっこう やまだ はな
田中さんは、月曜日の朝、学校で山田さんと話しています。

たなか しゅうまつ で
田中：週末はどこか出かけましたか？

やまだ
山田：はい。こうこうともだちあそびにきていたので、まちなか。

- あんない あんない あんない あんない
 A. 案内してくれました B. 案内されました C. 案内させました D. 案内してあげました

此例题，是田中先生和山田先生的对话。划线处应填入“山田先生当高中朋友的导游”，所以正确项目是D。

この例題は、^{れいだい}田中さんと^{たなか}山田さんの^{やまだ}会話文です。^{かいわぶん}下線部は、^{かせんぶ}「^{やまだ}山田さんが

こうこう ともだち あんない あらわ せいかい
高校の友達を案内した | ことを表しますから、Dが正解です。

【请耐心等待下一个指示。在那之前请不要打开下一页。】

問1.

パクさんが田中さんに電話しています。

パク：田中さん、ちょっと話があるんだけど、明日時間ある？

田中：いいよ。明日はずっと学校にいると思うから。

パク：ありがとう。私はお昼ごろ学校に行くので、1時はどう？

田中：いいよ。そのころ、私は図書館で_____と思うので、学校に着いたら連絡してね。

- A. 勉強する B. 勉強した C. 勉強している D. 勉強していた

問2.

田中さんは、李さんの誕生日パーティーでピアノを弾きました。

李：すごい！田中さん、ピアノが弾けるんですね。

田中：ええ。三ヶ月ぐらいピアノの練習をして、今は少し_____ようになりました。

- A. 弾く B. 弾いた C. 弾ける D. 弾けた

問3.

田中さんとリーさんが、寮の玄関を掃除しています。

田中：だいぶ綺麗になりましたね。

リー：そうですね。でも、みんなが毎日使いますから、明日はまたごみが_____でしょうね。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

問4.

田中さんが会社で同僚と話しています。

田中：今朝、会社に来るとき、救急車が道の真ん中に_____。何かあったんですね。

同僚：はい、交通事故があったんですよ。私はちょうど事故を見てびっくりしました。

- A. 停まります B. 停了りました C. 停まっています D. 停まっていた

問5.

田中さんは学校でパクさんと話しています。

田中：昨日、喫茶店でSMAPの木村拓哉さんを見ましたよ。

パク：えっ？本当ですか？

田中：ええ、木村さんはお店に入ってきて、私の席の近くに_____んです。びっくりしましたよ。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問6.

リーさんが田中さんに電話しています。

リー：もしもし、田中さん。ちょっとお願いがあるんですけど、今時間がありますか？

田中：今ですか？ごめんなさい、今ご飯を_____ので、後でいいですか？

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問7.

リーさんは自己紹介をしています。

リー：私はリーと申します。今、大学3年生です。大学に入る前、3年間仕事をしていました。だから、皆さんより少し年が上かもしれません。

パク：リーさんは_____か？

リー：はい。子供も二人います。

- A. 結婚します B. 結婚しました C. 結婚しています D. 結婚していました

問8.

パクさんと田中さんは、夕方、寮に帰る途中です。

パク：この道、暗くてちょっと怖いですね。

田中：そうですね。でも、もうすぐ6時半ですから、電気が_____と思いますよ。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問9.

パクさんが先生と話しています。昨日テストがありましたが、パクさんの点数はあまりよくありませんでした。

先生：最近、あまり勉強していないみたいですね。

パク：すみません。明日からちゃんと_____。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問10.

李さんは旅行会社のパンフレットを見えています。

田中：李さん、どこか旅行に行くんですか？

李：ええ。(パンフレットを見ながら) この島に行ってみたいですね。

田中：あ、私は以前、その島に行ったことがあります。その島では たくさんの珍しい鳥が_____よ。

- A. 見ます B. 見えます C. 見られます D. 見させます

問11.

リーさんとパクさんが寮に向かって歩いています。そのとき、救急車が二人の近くを_____通っていきました。

パク：あれ？救急車が寮の方に向かっていているね。

リー：そうね。あつ、寮の前に_____よ。何かあったのかな。

パク：心配ですね。大したことじゃなければいいけど。

- A. 停まる B. 停まった C. 停まっている D. 停まっていた

問12.

リーさんとパクさんは買い物をしています。リーさんは自分の腕時計を見えています。

リー：もう12時だよ。そろそろ昼ご飯を食べようか。

パク：えっ？12時？違いますよ。まだ11時ですよ。その時計は_____ね。

- A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

問13.

田中さんは車を運転しています。目の前に何か見えます。

田中：あ、道路で猫が_____。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

問14.

パクさんは、朝、スーパーに買い物に来ました。しかし…。

パク：あれ？おかしいなあ。ここに「9時開店」って書いてあるけど…。(近くの人に) すみません、このお店、何時に_____か？

近くの人：ああ、今日は水曜日だから、休みですよ。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問15.

田中さんとリーさんとパクさんは同じ寮に住んでいます。今日は一緒に旅行に行きます。集合時間の朝8時になりました。しかし、リーさんは…。

田中：あれ？リーさんはまだ来てないの？

パク：昨日、夜遅くまで部屋の電気が_____から、寝坊だと思っよ。電話してみようか？

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問 1 6 .

田中さんは食事会に遅刻しそうです。リーさんに電話しています。

田中：もしもし。すみません、アルバイトが遅くなって…。今から移動しますから、ちょっと遅くなりそうです。

リー：そうですか。じゃあ、先に_____から、気をつけて来てくださいね。

- A. 食べます B. 食べました C. 食べています D. 食べていました

問 1 7 .

パクさんが田中さんの家に来ています。パクさんは以前も遊びに来たことがあります。

パク：田中さん、犬はどこですか。小屋もないようですが。

田中：うちの犬は、先月、突然_____。その日も朝は元気だったんですが、夜気づいたらもう…。

パク：そうですか。それは残念でしたね。

- A. 死にます B. 死にました C. 死んでいます D. 死んでいました

問 1 8 .

田中さんは友達の家で電話をしました。すると、友達の子供が電話に出ました。

田中：もしもし、お母さんいる？

友達の子供：うん、台所でご飯を_____。ちょっと待ってください。お母さんに代わります。

- A. 作ります B. 作りました C. 作っています D. 作っていました

問 19.

パクさんと李さんは有名なお寺に来ました。パクさんは写真を撮っています。

パク：あれ？李さん、写真を撮らないんですか？

李：実は、先週、泥棒にカメラを_____んです。

パク：えっ！？本当ですか？

- A. 盗られてしまった B. 盗ってもらった C. 盗らせてしまった D. 盗られなくなった

問 20.

山田さんとリーさんは一緒に居酒屋にいます。

山田：あ、もう 9 時だ。そろそろ帰らないと。

リー：もう帰るの？もう少し一緒に飲みましょうよ。

山田：いや、うちで奥さんが待っているから。

リー：え？山田さん、いつ_____んですか？

山田：今年の春だよ。あれ、知らなかったの？

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問 21.

テストの翌日、先生とパクさんが話しています。

先生：テスト、あまり良くありませんでしたね。前日はちゃんと_____か？

パク：すみません。実はアルバイトで疲れて寝てしまったんです。

- A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

問 2 2.

田中さんとパクさんとリーさんは同じ寮に住んでいます。今日は寮でパーティーをしています。しかし…。

田中：リーさんはまだ来ていませんね。外出しているのかな。

パク：いいえ、部屋にいますよ。私が来る時、部屋のドアが_____から。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問 2 3.

田中さんは喫茶店にいます。パクさんとここで 3時に会う約束をしています。しかし、3時になってもパクさんはまだ現れません。すると、3時05分にパクさんから電話が来ました。

パク：もしもし、ごめんごめん。今店に着いたところだよ。どこにいる？

田中：一番奥の席に_____よ。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

問 2 4.

昨日はパクさんの誕生日パーティーでした。李さんはアルバイトで参加できませんでした。次の日、李さんはパクさんと話しています。

李：昨日は参加できなくてすみませんでした。あれ？パクさん、その時計って…

パク：ええ、昨日のパーティーで_____んです。可愛いでしょう？

- A. あげた B. もらった C. くれた D. もらわれた

問 2 5 .

パクさんがレストランに電話しています。

パク：もしもし、予約をしたいんですが。明日の夜10時なんですが、その時間はまだお店は
_____か？

店員：はい、夜12時までですので、大丈夫です。

- A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました

問 2 6 .

田中さんとパクさんが話しています。パクさんは昨日、街で田中さんを見かけました。

パク：田中さん、昨日、小さな女の子と買い物をしていましたね。あれは誰ですか？

田中：私の娘ですよ。

パク：えっ？田中さんは独身ですよ？

田中：ええ。でも、実は以前_____んです。そのときの子供です。

- A. 結婚する B. 結婚した C. 結婚している D. 結婚していた

問 2 7 .

田中さんはテレビの修理をしてもらうために、電気屋に来ています。店員に事情を説明しています。

田中：昨日、テレビを見ようと思ったら、テレビが_____。そのときまで、全然
気づきませんでした。それで、修理をお願いしたいんですが。

- A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

問 28.

パクさんとリーさんは、先生の研究室の前に来ました。

パク：(ドアをノックして) あれ？先生いないみたいだね。

リー：おかしいなあ。電気が_____のに。

- A. つく B. ついた C. ついている D. ついていた

問 29.

田中さんは同僚と居酒屋へ行って、たくさんお酒を飲みました。帰り道、二人は駅で電車を待っています。

同僚：大丈夫ですか。もうすぐ電車が来ますよ。

田中：大丈夫です。すみません。

同僚：あっ、それ以上進むと線路に_____よ。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

問 30.

リーさんは田中さんに電話しました。しかし、田中さんは食事中で電話に出られませんでした。田中さんは食事の後、携帯電話を見ました。

田中：もしもし、リーさんですか？すみません、さっき私に電話しましたか？家族とご飯を_____ので、全然気づきませんでした。

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

問3 1.

李さんとパクさんは一緒にショッピングをしています。

李：パクさん、どうしたんですか？

パク：ええ、実は、窓を_____まま、出て来てしまっで…。

李：じゃあ、早く帰ったほうがいいですね。

- A. 開けた B. 開ける C. 開く D. 開いた

問3 2.

パクさんが田中さんに明日の予定を聞いています。

パク：明日、家にいますか？

田中：うん、その予定だけど。

パク：家に遊びに行ってもいいですか？

田中：いいですよ。何時ごろですか？

パク：午前11時ごろはどうですか？

田中：そのころ、私は昼食を_____と思いますから、一緒に食べませんか？

- A. 作る B. 作った C. 作っている D. 作っていた

問3 3.

パクさんは道を歩いています。そして、その前を男の人が歩いています。

パク：あ、すみません、財布が_____よ。

男の人：あ、ありがとうございます。

- A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

付録資料⑤
第 5 章 調査紙（中国語版）

課題

此課題里面会出现几个对话。在对话前，会有对话场景的说明。所有对话中，都设有一处需补全的填空。请您利用（ ）内的单词，在划线处填入适当的短句，完成该对话。

下一页，有两个例题。请练习看看。

(例题 1)

你在电车上偶然遇到一个英国人，走过去主动与他交谈……。

英国人：你英语说得真好，学了多久？

你：我_____。（十年）

(例题 2)

你在公司工作，已经八点了……



你：啊，都八点了，最近几乎每天加班，今天_____。（家）

例题 1，是你和一名英国人的对话。划线处应填入“学了多久”的回答，且回答中必须含有“十年”这个词。因此，您可以填“大概学了十年”亦或是“学了十年”等。

例题 2，是你在公司一个人自言自语。划线处应填入“已经八点了……”的后面，而回答中必须含有“家”这个词。因此，您可以填“我要早点儿回家”或是“我想早点儿回家”等。

【请耐心等待下一个指示。在那之前请不要打开下一页。】

问题 1 .

假设你接了顾客的电话……

顾客：你好，我是××公司的○○。总经理在吗？

你：请稍等。

你：＜对总经理＞总经理，是○○打来的_____。（电话）

问题 2 .

假设星期天的傍晚，你和朋友在学校踢完足球回家的时候路过老师的办公室……

朋友：老师，应该在研究室吧？

你：也许吧。屋里_____。（灯）

问题 3

假设你在登山，走在路上……

你：欸，你看！这里_____。（罕见的花）

朋友：真的耶。不知道叫什么话。

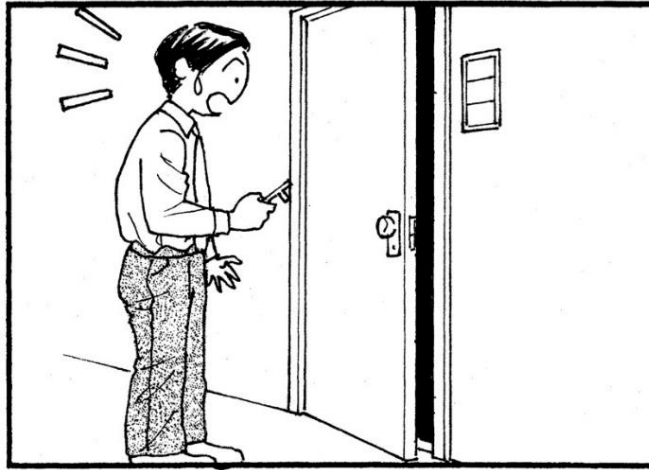
问题 4 .

假设你在学校的停车场发现了可疑人员，需要向学校的保卫人员报告的时候……

你：＜对警卫员＞那里_____。（可疑的人）

问题 5 .

假设你拿出钥匙准备开门的时候……



你：奇怪！_____。（门） 我忘了锁门？

问题 6 .

假设你发现邮箱里有一封寄给你母亲的信，你拿着那封信喊母亲的时候……

你：＜对妈妈＞妈，信箱里_____。（信）

问题 7

假设晚上，你和朋友走在回家的路上。你抬头看了看天上说……

你：你看，天上_____！（星星）

朋友：真的耶。明天天气肯定不错。

问题 8 .

假设家里来电话了，是找妈妈的。你让对方稍等一下……

你：＜对妈妈＞ 妈，_____。（电话）

问题 9.

假设你和朋友走在路上，突然发现前方……



你：啊，地上_____。(钱包)

问题 10.

假设你放学之后，回家。在门口……

你：我回来啦。＜看到了陌生人的鞋子＞

妈妈：＜走到门口＞你回来啦。

你：家里_____吗？（客人）

妈妈：嗯，是爸爸的朋友。

问题 11.

假设你和朋友上了公交车，发现最后一排没人坐……

你：啊，后面_____。（坐位）

朋友：运气真好！

问题 12

假设你先在在上海旅游。到了宾馆后，打电话向家人报平安……

妈妈：宾馆怎么样？

你：感觉不错。房间里装修豪华，墙上还_____。（名画）

问题 13.

假设你早上在等电梯的时候，遇到了朋友……

朋友：早上好。

你：早上好。诶？头上_____。（东西）

朋友：诶？真的吗！？

问题 14.

假设你回家后，肚子饿了打开冰箱……



你：啊，冰箱里_____。（蛋糕）

问题 15.

假设由于眼睛很痛，你去医院看医生……

你：早上起来眼睛很痛。

医生：让我看看。啊，眼睛里_____。（眼睫毛）

付録資料⑥

第5章 調査紙（日本語版）

かだい 課題

この課題では、いくつかの場面・状況が出てきます。最初に、その場面・

状況を説明する文章や絵があります。その下に、登場人物による会話や

発話が続きます。すべての会話・発話には、空所の部分があります。最も

自然だと思ふ文を完成させてください。前の問題に逆戻りはしないでくださ

い。

次のページに例題が2問あります。練習のためにやってみてください。

（例題 1）

あなたは電車^{でんしゃ}でたまたまイギリス人^{じん だんせい}の男性^あに会いました。彼^{かれ}と話^{はな}していると
...

イギリス人^{じん えいご}：英語^{じょうず}がお上手^{べんきょう}ですね。どのくらい勉強^{べんきょう}されたんですか？

あなた：そうですね。だいたい10年^{ねん}くらい_____。

（例題 2）

あなたは会社^{かいしゃ}で残業^{ざんぎょう}しています。もう8時^じです…



あなた：あ、もう 8 時^じだ。

まいにちざんぎょう 毎日残業だから、今日は早く家^{いえ}に_____。

れいだい 例題 1 は、イギリス人^{じん}とあなたの会話^{かいわ}です。下線部^{かせんぶ}では、「どのくらい勉強^{べんきょう}

されたんですか」に対して「だいたい 10 年^{ねん}くらい」に続く文^{ぶん}を完成^{かんせい}させなければ

なりません。よって、例え^{たと}ば、下線部^{かせんぶ}には「勉強^{べんきょう}しました」「です」など

はい が入ります。

れいだい 例題 2 は、あなた一人^{ひとり}の発話^{はつわ}です。下線部^{かせんぶ}では、「毎日残業^{まいにちざんぎょう}だから、今日^{きょう}

は早く家^{いえ}に」に続く文^{ぶん}を完成^{かんせい}させなければなりません。よって、例え^{たと}ば、

かせんぶ 下線部^{かせんぶ}には「帰^{かえ}りたいな」「帰^{かえ}ろうかな」などが入^{はい}ります。

つぎ しじ 次^{つぎ}の指示^{しじ}があるまで、次^{つぎ}のページ^{すす}には進^{すす}まないでください。】

問 1.

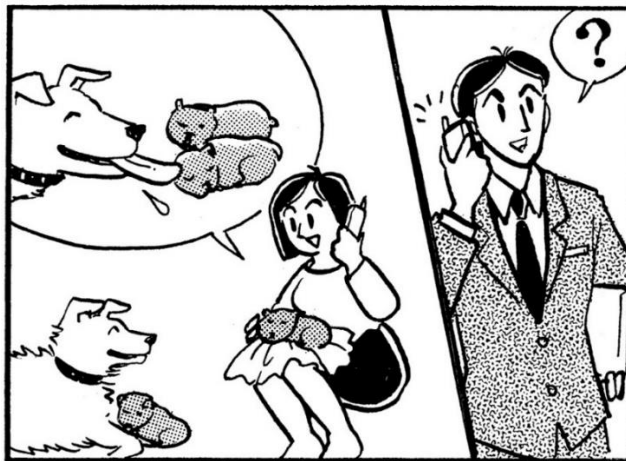
あなたは友人と山登りをしています。道を歩いていると…

あなた：あっ！見て見て、珍しい花が_____。

友人：本当だ。なんという名前の花だろうね。

問 2.

あなたの犬は、お腹に赤ちゃんがいます。会社にいる夫から電話が来て…



夫：犬の様子、どう？

あなた：いま_____。2匹も！

夫：それはよかった！今日は早く帰るよ。

問 3.

あなたは日曜日に友人と学校へサッカーの練習に行ったとき、先生の研究室からあかりが見えて…

友人：先生、いらっしゃるのかな？

あなた：みたいだね。電気が_____。

問 4.

あなたは学校の駐車場で不審者を見かけました。学校の警備員に伝えます…

あなた：＜警備員に＞あそこに不審者が_____。

問 5.

あなたは得意先から社長への電話を受けて…

得意先：××会社の〇〇と申します。社長はいらっしゃいますか？

あなた：少々お待ちください。

あなた：＜社長に＞社長、〇〇様から電話が_____。

問 6.

あなたは会社で上司と話しています…

上司：この仕事、今日の5時までに_____。

あなた：えっ、今日の5時ですか？これから会議なので、ちょっと…

問 7.

あなたが郵便受けをのぞいたら、お母さん宛の手紙が一通…。あなたはそれを
持ってお母さんに声をかけて…

あなた：＜お母さんに＞お母さん、ポストに手紙が_____。

問 8.

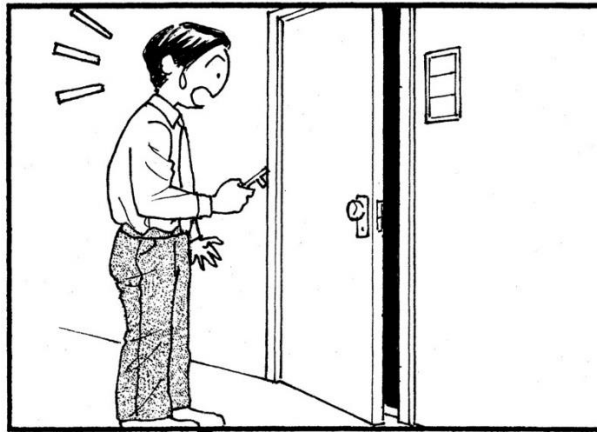
よる 夜、あなたは友人と家に帰っています。あなたは空を見上げて…

あなた：見て、星がたくさん_____！

ゆうじん 友人：ほんとう 本当だね。あした 明日はきっといい 天気になるだろうね。

問 9.

あなたは家の前で鍵を取り出してドアを開けようとしたとき…



あなた：おかしいなあ！ドアが_____。

かぎ 鍵をかけ わす 忘れたのかなあ

問 10.

あなたが電話に出たら、それはお母さんへの電話でした。あなたは相手の方に
ま
待っていただいて…

あなた：＜お母さんに＞お母さん、電話が_____。

問 11.

よる
夜、あなたが残業していると同僚が話しかけてきて…

どうりょう
同僚：あれ、まだ帰らないの？

あなた：うん。もう少し仕事があるから。

これが終わったら_____。

問 12.

あなたが友人と道を歩いていたら、前に…



あなた：あ、財布が_____。

問 13.

放課後、家に帰ると、玄関で…

あなた：ただいま。＜玄関に見たことのない靴がある＞

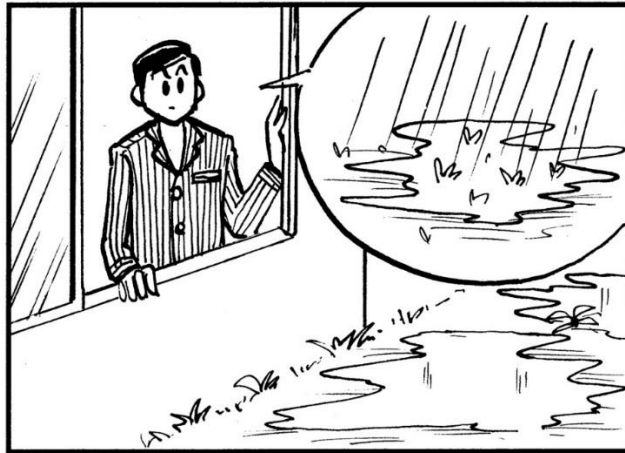
お母さん：＜玄関に迎えにきて＞おかえり。

あなた：お客さんが_____。

お母さん：うん、お父さんの友達よ。

問 14.

あなたが^{あさお}朝起きて、^{まど}窓を^あ開けると…



あなた：あれ？夜中に雨が_____。

^{みず}水たまりができてる。

問 15.

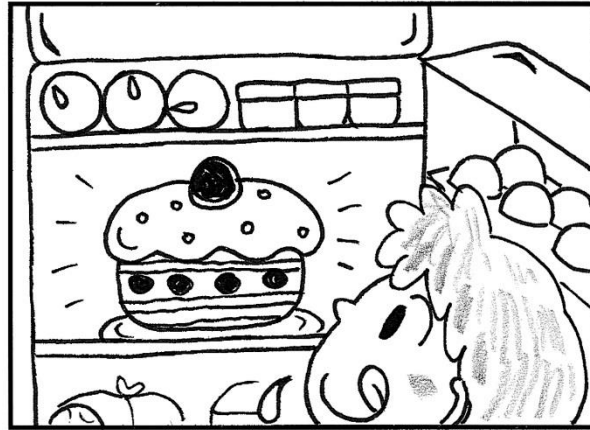
あなたが^{ゆうじん}友人とバスに^の乗ったら、^{いちばんうし}一番後ろに^{だれ}誰もいませんでした…

あなた：あ、^{せき}席が_____。

^{ゆうじん}友人　：^{ほんとう}本当だ。ラッキーだね。

問 16.

あなたは帰宅後、お腹がすいたので、冷蔵庫を開けました…



あなた：あ、ケーキが_____。

問 17.

あなたは上海を旅行中です。ホテルに着いて、お母さんに電話しています…

お母さん：ホテルはどう？

あなた：いい感じだよ。

部屋がとても豪華で、壁に有名な絵が_____。

問 18.

あなたがキッチンで夕飯^{ゆうはん}を作^{つく}っていると、子^こどもが来^きて…

子^こども：お母^{かあ}さん、晩^{ばん}ごはん、まだ？

あなた：ちょっと待^まっててね。もうすぐ_____。

問 19.

あなたが朝^{あさ}エレベーターを待^まっていると、友^{ゆうじん}人^あに会^あって…

あなた：おはよう。あれ？ 頭^{あたま}に何^{なに}か_____。

友^{ゆうじん}人^あ：え？ 本^{ほん}当^{とう}！？

問 20.

あなたは朝^{あさ}起^おきると目^めが痛^{いた}くて、病^{びょう}院^{いん}に行^いきました…

あなた：朝^{あさ}から目^めが痛^{いた}くて。

医^い者^{しゃ}：ちよっと見^みせてください。あ。ま^まつげが_____。